
在宅ワーク・夫と妻のニーズ

～ワークスペースのある住まいづくりに向けて～

調査報告書



旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所

我が国における暮らし方のモデルは、時代と共に変化してきました。戦後昭和の核家族が増えた時代では、夫は日中を職場で過ごし、帰宅後にくつろぐ生活を、妻は終日自宅で育児と家事をこなすという「昭和専業主婦モデル」が主流でした。平成に入り、共働き世帯が専業主婦世帯の割合を超えると、夫婦は共に日中を職場で過ごし、帰宅後の忙しい時間帯をやりくりしながら家事育児を協力してこなす一方で、自宅は日中不在となるために未就学児は保育園に預ける、という「平成共働きモデル」の割合が急増しました。

そうした状況の中、共働き家族研究所は平成元年に設立し、平成の時代、都市における共働き家族の意識と社会の変化を見つめながら、将来の家族像や住まいのあり方を研究し、家族が家事・育児を効率よく、シェアしやすい住まいの提案を行ってきました。

令和の現在、ワークライフバランスの重要性が認知されるようになったことに加え、昨年発生した新型コロナウイルスの感染拡大への対策として、在宅ワークが急速に普及し、これまで通勤先の職場で行っていた仕事を自宅でこなす、いわゆる「職住融合」の暮らし方へと一気に変化を遂げつつあります。また緊急事態宣言の発出で外出が制限される中、家族の拠点としての役割も増してきています。

家づくりは在宅ワークを行う同居家族全体の視点が重要です。本研究では在宅ワークをしていない同居の家族はどう感じているのか、メリットの認識と在宅ワーク時の配慮をお伝えできれば幸いです。また今回のコロナ禍での変化は大きな転換期になる予想され、ワークライフバランスはどう変化するか、仕事と家事の融合により夫婦の家事・育児の分担はどう変わっていくか…など、将来の家族の在り方、住まいの在り方を示唆するものであり、皆さんと一緒に今後の住まいを考える機会になれば幸いです。

くらしノバージョン研究所 所長

山田恭司

目次

第1章 社会背景

1-1	在宅ワーク促進のトレンド	8
1-2	新型コロナウイルス感染の状況と調査時期	10
1-3	ワークライフバランスの考え方の変化	12
	コラム:在宅ワークによるワークライフバランスの改善:回答者の声	14

第2章 調査の概要

2-1	調査対象と時期	16
2-2	調査対象者の属性	18
2-3	調査対象住宅の概要	20
2-4	調査対象住宅からの通勤手段	22

第3章 在宅ワークによるくらしの変化

3-1	定着した在宅ワーク	24
3-2	在宅ワークによる生活行為の増減	26
3-3	夕方以降の生活時間の変化	28
3-4	睡眠と起床時間の変化	30
	コラム:在宅ワークで増えた減った時間・機会・不安:回答者の声	32

第4章 在宅ワークの場所とニーズ

4-1	在宅ワークの場所の区分	34
	コラム:個室の数による在宅ワーク場所選択への影響(前回調査結果)	35
4-2	家族に影響される在宅ワークの場所	36
4-3	建設時の在宅ワーク経験と想定	38
4-4	在宅ワークで使うもの・購入したもの	40

4-5	在宅ワーク場所での行為	42
4-6	在宅ワークスペースの課題	44

第5章 在宅ワークのメリット・デメリット

5-1	在宅ワーク本人のメリット	48
5-2	在宅ワークしていない配偶者のメリット	50
5-3	在宅ワークのデメリット	52
コラム	在宅ワークの合間の家事/仕事への集中について：回答者の声	53
5-4	在宅ワークへの配慮と困りごと	54
5-5	メリット認識の夫妻の差	56
コラム	在宅ワーク時の気分転換：回答者の声	58

第6章 夫の家事分担増加の可能性

6-1	在宅ワークで夫の家事が増加	60
6-2	在宅ワークで増加する夫の家事の内容	62
6-3	在宅ワークに対する夫妻の希望のずれ	64
コラム	夫妻それぞれの気持ち：回答者の声	66

第7章 職住融合時代の家づくり

7-1	在宅ワークを考えた家づくり	68
7-2	LDK周辺のワークスペースの提案	70
7-3	個室フロアのワークスペースの提案	72

■訂正記録

2021/4/16 Ver1.0公開

2021/6/16 Ver1.11に修正

- ・ P10 緊急事態宣言解除日修正 5/25→5/26

- ・ P14 レイアウト調整

- ・ P26-27 在宅ワークによる時間の増減、在宅ワークによる機会・不安感の増減グラフ修正

- ・ P27 3-2(3)文章修正

「光熱費の増加」の回答が夫で約6割、妻で約8割→「光熱費の増加」の回答が夫で約6割、妻で約7割

- ・ P56 左上章タイトル修正

- ・ P62 ページ番号レイアウト修正

第 1 章

社会背景

1-1 在宅ワーク促進のトレンド

(1) テレワーク促進の政策

政府の「第5期科学技術基本計画」(2016年1月閣議決定)で用いられたSociety 5.0と呼ばれる未来社会のコンセプトの中で、「世界最先端IT宣言・官民データ活用推進基本計画」(2017年5月閣議決定)において制度等に基づく雇用型テレワーカーの割合を東京オリンピックが開催予定であった2020年時点で2016年の2倍の15.4%とする目標が設定され、テレワークが促進されました。

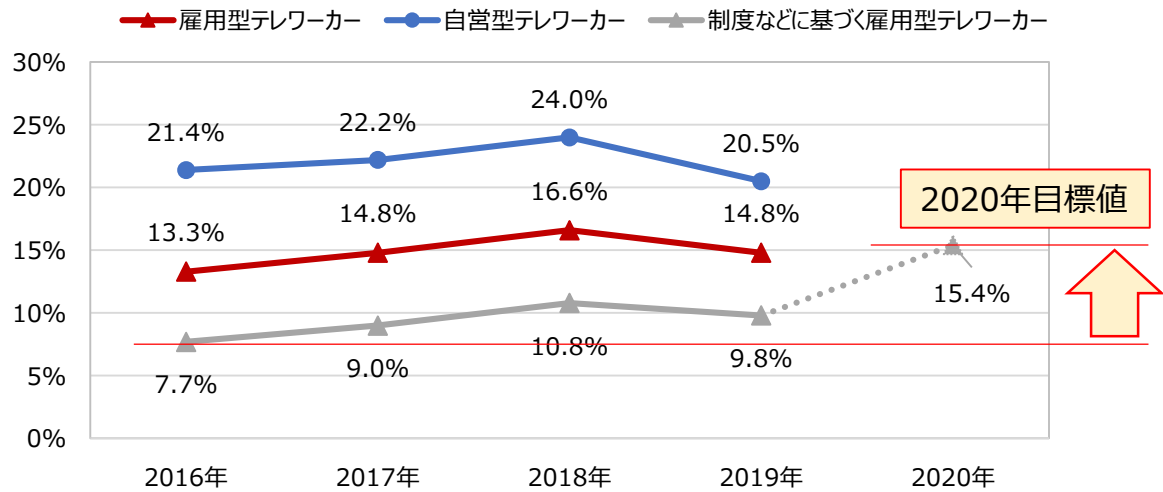
雇用型テレワーカーの比率は、2016年以降着実に増加していましたが、2019年時点で9.8%であり目標とはかなり差がある状況でした。

・Society 5.0とは・・・「サイバー空間の積極的な活用を中心とした取組を通して、新しい価値やサービスが次々と創出され、人々に豊かさをもたらす、狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く人類史上5番目の社会」のこと。
第5期科学技術基本計画において、国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱。

・雇用型テレワークとは、ICTを活用して、労働者が所属する事業場と異なる場所で、所属事業場で行うことが可能な業務を行うこと（例：在宅勤務、モバイルワーク、サテライトオフィスでの勤務）

・制度等に基づく雇用型テレワーカーとは「テレワーク制度等が導入されている」と回答した雇用型テレワーカー。

・自営型テレワークとは、ICTを活用して、請負契約等に基づき、遠隔で、個人事業者・小規模事業者等が業務を行うこと（例：SOHO、在宅ワーク、クラウドソーシング）



(n)人数	2016年(H28)	2017年(H29)	2018年(H30)	2019年(R1)
自営型テレワーカー	912	787	1,050	860
雇用型テレワーカー	4,761	5,393	5,926	5,312
制度などに基づく雇用型テレワーカー	2,752	3,281	3,847	3,509
自営型就業者	4,256	3,550	4,377	4,193
雇用型就業者	35,744	36,450	35,623	35,803

n= 40,000 40,000 40,000 40,000

出展：令和元年度テレワーク人口実態調査（国土交通省）

(2) コロナ禍によるテレワーク普及の実態

東京商工リサーチの「新型コロナウイルスに関するアンケート調査」では、2020年4月以降、継続的(ほぼ2か月おき)にテレワークを実施している企業の比率を調査し公表しています。2020年4～5月の緊急事態宣言以降、テレワーク実施企業は大きく増加し、第5回(5/28-6/9調査)では大企業で8割超、中小企業でも5割超となりました。緊急事態宣言解除後も大企業では5割超が実施を続け、テレワークが定着しているといえるでしょう。

なお、第12回調査では大企業中小企業の別が示されず、代わって都道府県別の比率が示されています。地域差が大きく全国平均では35.5%の実施率ですが、東京都に限ると66.8%となっています。

第14回調査では再度大企業、中小企業の別が復活し、全体に実施企業の率が高まっていることが示され、大企業では7割近くとなっています。

大企業：この調査では資本金1億円以上

設問：貴社では、「新型コロナウイルス」の感染拡大を防ぐため、在宅勤務・リモートワークを実施しましたか？

第3回、第5回：「実施した」「実施していない」の2者択一

第6回以降：「現在、実施している」「新型コロナ以降、一度も実施していない」「新型コロナ以降に実施したが、現在は取りやめた」の3者択一

調査回	発表日	調査日	回答数			実施率		
			全企業	大企業	中小企業	全企業	大企業	中小企業
第3回	2020年4月10日	3/27-4/5	17340	2835	14505	25.4%	48.1%	21.0%
第5回	2020年6月17日	5/28-6/9	18002	2907	15095	56.4%	83.1%	51.3%
第6回	2020年7月14日	6/29-7/8	14356	2400	11956	31.0%	55.2%	26.2%
第8回	2020年9月15日	8/28-9/8	12980	2153	10827	34.4%	61.3%	29.0%
第10回	2020年11月25日	11/9-11/16	11076	1818	9258	30.7%	57.4%	25.5%
第12回	2021年1月22日	1/5-1/14	12027			35.5%		
第14回	2021年3月18日	3/1-3/8	9754	1465	8289	38.5%	69.2%	33.1%

1-2 新型コロナウイルス感染の状況と調査時期

(1) 新型コロナウイルスの感染状況

2020年3月より急速に新型コロナウイルス感染者が増加し、小中学校の一斉休校が行われ、さらに4月の緊急事態宣言によって在宅ワークは一挙に広がりました。

(2) 2020年4月に前回調査を実施

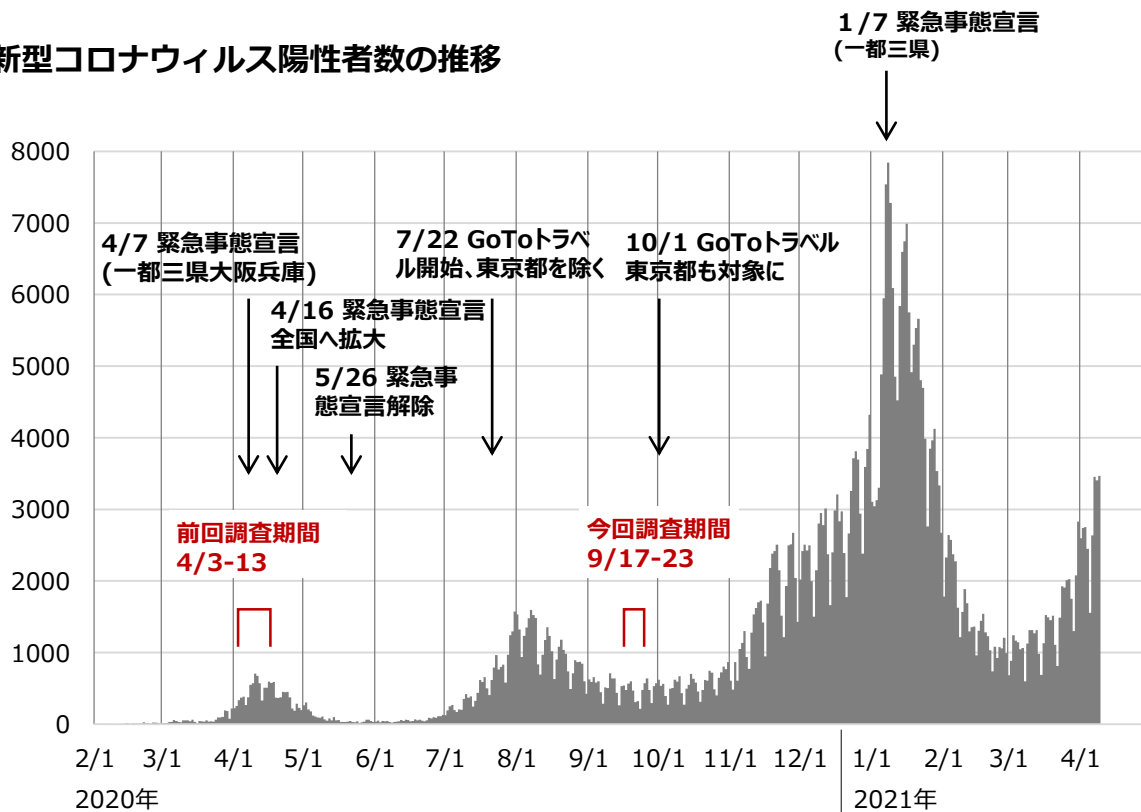
感染拡大初期の2020年4月に本調査に先立って戸建持家、集合賃貸住宅を対象とした調査を実施しています。調査時期は3月から始まった一斉休校に続き、一都三県＋大阪兵庫での緊急事態宣言の発出時期と重なり、「ステイホーム」というスローガンで外出の自粛が呼びかけられた時期となっています。

(3) 今回の調査は新型コロナ陽性者数の減少期に実施

2020年7月にGo To トラベル(東京都除く)が始まり、その後の感染者数増加も落ち着きを見せた9月下旬の調査となっています。10/1から東京都対象のGo To トラベルも始まることが報じられ、感染者数の抑制から経済再生へのシフトが行われた時期でした。その後感染者が増え再び緊急事態宣言が発令されたことを考えると、コロナ終息後の状況を占うために適した貴重な時期であったと言えます。

Go To トラベル：外出自粛などの影響による旅行需要激減等、地域産業の甚大な被害に対する、官民一体型の需要喚起策

■ 新型コロナウイルス陽性者数の推移



出典：厚生労働省 新型コロナウイルス感染症について オープンデータ より作成
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>

■新型コロナウイルス対応の主な出来事

2020/02/05 横浜港寄港中のダイヤモンドプリンセス号の検疫より新型コロナウイルス陽性確認の発表
2020/03/02 全国の小中学校高等学校臨時休校要請開始

2020/04/07 緊急事態宣言(埼玉、千葉、東京、神奈川、大阪、兵庫、福岡)
2020/04/16 緊急事態宣言(全都道府県に拡大)
2020/05/14 緊急事態宣言一部解除(北海道、埼玉、千葉、東京、神奈川、京都、大阪、兵庫は継続)
2020/05/21 緊急事態宣言一部解除(北海道、埼玉、千葉、東京、神奈川は継続)
2020/05/26 緊急事態宣言解除

2020/07/22 Go Toトラベル開始(東京都発着を除く)
2020/10/01 Go Toトラベルに東京都発着を追加
2020/12/28 Go Toトラベル全国一斉停止

2021/01/07 緊急事態宣言(埼玉、千葉、東京、神奈川)
2021/01/13 緊急事態宣言(上記一都三県+栃木、岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡)
2021/02/08 緊急事態宣言一部解除(上記一都三県+岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡は継続)
2021/03/01 緊急事態宣言一部解除(埼玉、千葉、東京、神奈川は継続)
2021/03/22 緊急事態宣言解除

2021/04/05 まん延防止等重点措置実施(宮城、大阪、兵庫)
2021/04/12 まん延防止等重点措置実施(東京、京都、沖縄)

■くらしノバージョン研究所実施の前回調査について

1. 調査の目的:在宅ワークスペースの現状とくらしの在り方を探る
2. 調査時期:
 - 【スクリーニング調査】 2020年4月3日～4月8日
 - 【本調査】 2020年4月10日～4月13日(左記に加え4月22日～27日一部設問追加)
3. 調査方法:Webアンケート調査
4. 調査対象:
 - 【スクリーニング調査】 全国の週7時間以上働いている男女 20歳～69歳 計35816名
 - 【本調査】 上記、在宅ワーク実施者・希望者のうち、回答した計3808名
持家戸建住宅 1971名(全国)、賃貸集合住宅 1837名(※エリア家賃限定)
5. ニュースリリース
2020年6月5日 在宅ワークに関するくらしの変化についての調査結果
<https://www.asahi-kasei.co.jp/j-koho/press/20200605-02/index/>

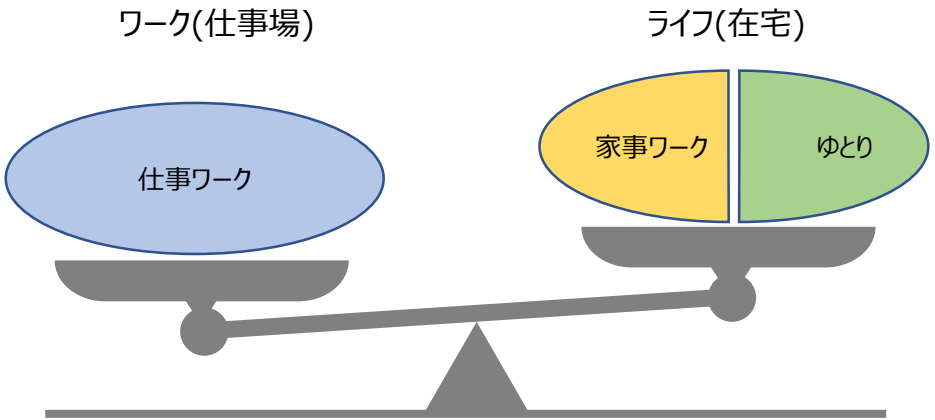
1-3 ワークライフバランスの考え方の変化

(1) 在宅ワークでは仕事と家事ワークのトータルの効率化がメリットに

前回2020年4月の調査結果から浮き彫りになったこととして、ワークライフバランスの考え方が在宅ワークによって変わるのではないか、ということがあります。これまでのオフィスへの通勤を前提としたワークバランスでは、ライフの部分充実させるため結果的に長時間労働をなくし早く帰ることが目標となっていました。この場合のライフは家事ワークとゆとりの合計であり、共働き家族では家で限られた時間の中での家事ワーク部分の合理化によるゆとり創出がテーマとなってきました。

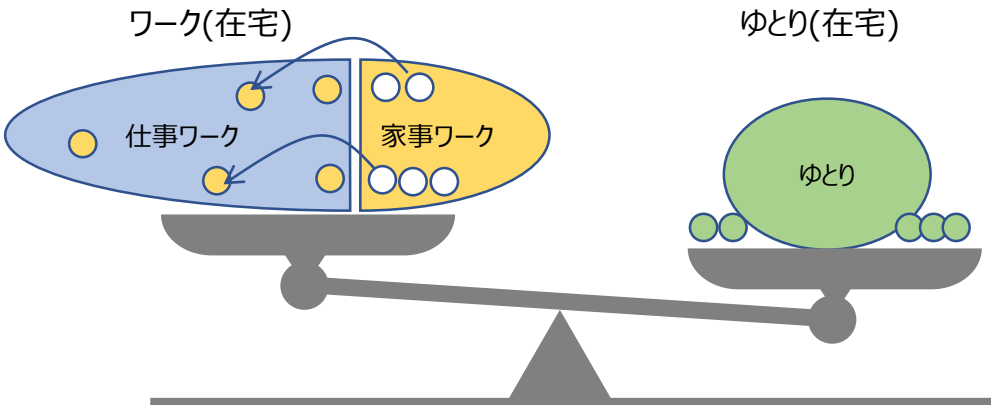
在宅ワークになると、ワークとライフの場所の区別が曖昧になります。その中でゆとりを生み出すためには、仕事としてのワークと家事ワークのバランスと共に、合計が小さくなることが重要です。仕事ワークだけでなく、家事を含めた生産性を高めて早く終わることが大事で、そのために仕事の合間に家事をすることも有効な選択肢になります。更には在宅であれば、家族との時間を仕事の合間の休憩時間に入れることも可能です。こうした暮らし方を捉えていくことが、在宅ワークの研究として重要になってきています。

■通勤日のワークライフバランスの概念



■在宅日のワークライフバランスの概念

家事ワークを仕事の合間に行うことでワークの総量が減り、その分ゆとりが増える



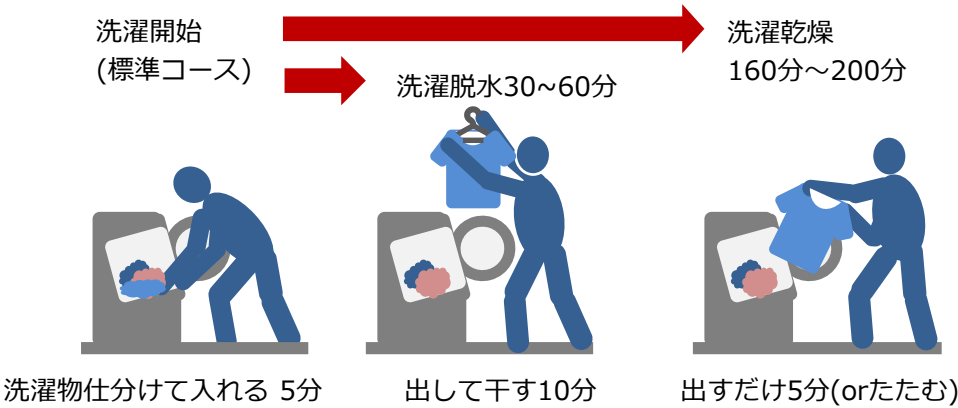
(2) 共働き対応の家事合理化で仕事合間の家事が可能に

前回2020年4月の調査結果発表時に掲出した表を再掲します。昭和の専業主婦を想定したくらし方モデルはnLDKの間取りやニュータウンというまちづくりにまで影響を及ぼしました。平成に入り共働きが増加すると、昼間は留守が当たり前となり、限られた時間で家事を行うため家電品の自動化が進みました。これにより家事の作業量は大幅に減少しましたが、洗濯や炊飯にかかる時間が短くなったわけではなく、時間をおいて少量の作業をすればよい「細切れ家事」の状態に変化しました。この状況は仕事の合間に家事を行うのに適した状況であり、在宅ワークにおいても有効に活用すべきではないかと思います。

■各時代の家づくりで想定されたくらし方モデル(前回調査で提示)

	戦後昭和(核家族) 専業主婦モデル	平成共働きモデル	令和在宅ワークモデル
昼	夫：通勤し仕事 妻：在宅で家事育児 子(未就学)：在宅	夫妻：通勤し仕事 子：保育園	夫妻：どちらか、または両方が在宅ワーク ↓ 仕事の場の選択は？
夜	夫：在宅でくつろぐ 妻：在宅で家事育児 子(未就学)：在宅	夫妻：在宅で家事育児 子：在宅	家族との関係や 夜間のくらしが どう変化するか？ ⇒今回の課題

■全自動洗濯乾燥機の使われ方の例



コラム：在宅ワークによるワークライフバランスの改善：回答者の声

在宅ワークによるワークライフバランスの改善を表現した回答者の声を集めてみました。通勤がない分運動不足にならないようジョギングやウォーキングをしたり、家族との時間が増えたりしている様子がよくわかります。また、子どもに与えるよい影響についても多くのコメントをいただきました。

夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

妻の在宅勤務プラス時短勤務により、子どもの習い事の時間が取れるようになった。また、自分自身の変化としては夜のランニングの時間がとりやすくなった。良いことの方が圧倒的に多い。(個室派夫・妻在宅)

家族で夕食を一緒にとる機会が多くなったこと、小学生の息子の送迎が出来るのは良い。また運動不足解消のために始めた早朝ウォーキングは生活リズムが取れてよい。会社の同僚とのコミュニケーションが少し減ったのは悪い点だが、コロナ影響で在宅ワークでもほぼオフィスと変わりなく仕事が出来ることが実証されたのは大きい。(LD派夫・妻通勤)

朝、昼、晩にストレッチなど身体のメンテナンスが出来る。夫とウォーキングする時間を持つようになった。終業後、家族でスーパー銭湯に行ったり平日の晩も楽しみが増えた。(LD派妻・夫在宅)

在宅ワークをきっかけに通勤時間が減った分、ジョギングや英語等の勉強をする時間に割り当てることができるようになり、健康やスキルを身に付けることができるようになった。(個室派夫・妻非就業)

主人はいつも残業で遅く子どもの寝顔しか見れていなかったが、在宅の日は残業が少なくなり、夜子どもの顔を見れたり少しの時間遊んでもらえるようになった。また夕食の片付けが一気に済むので楽になった。主人はいつも朝、おにぎりを車で食べているが、在宅の日は朝ごはんがちゃんと食べれるようになった。(非就業妻・夫在宅)

主人は以前から在宅ワークをすることはありましたが、コロナの影響で毎日在宅ワークになりました。今後もしばらく続きます。良い点は、主人が家にいるので、子どもが飼いたいと言っていた犬を飼う決断ができました。犬の世話をしてくれたり、子どもの送迎を手伝ってくれたりして、助かります。そして家族の時間が増えました。子どもが小さい時に在宅ワークだとよかったなと思います。(通勤妻・夫在宅)

在宅ワークにより、通勤に費やしていた時間がなくなったのは非常に有意義。必要な時のみ出社しているが、オフィスは設備等充実しており、出社時の効率も高まった。在宅と出社は自由となり、コロナ禍前よりメリハリある生活ができています。(LD派夫・妻通勤)

第2章

調査の概要

2-1 調査対象と時期

(1) 調査の目的

ヘーベルハウス居住者における在宅ワークの実態と、在宅ワークに伴うくらしの変化を把握し、在宅ワークしている本人と同居配偶者の意識を調べることで、在宅ワーク時代の家づくりに役立てていくことを目指します。

(2) 調査概要

ヘーベリアンのネット登録者を対象に、メールで「在宅ワークのくらしに関する調査」アンケートへの協力を依頼し、Web上でご回答いただきました。調査対象は、あなた、または同居ご家族が現在、月1回以上在宅ワークをされている方としました。在宅ワークとは、ご自宅で仕事することとして、報酬の有無は問わず、リタイア後などの社会と関わるNPO活動やボランティアも含めています。また、事務所や医院など併用住宅の場合、事業用部分ではない、ご自宅部分での仕事を在宅ワークとしています。

※「ヘーベリアン」とは旭化成ホームズが建設した住宅「ヘーベルハウス」の居住者の総称

＜調査時期＞ 2020年9月17日～23日

＜調査対象＞ 1990年1月～2020年8月引渡の自社設計施工の住宅

但し、1990年1月～2004年12月引渡については、契約者の現在年齢が60代と推定される方、2005年1月～2020年8月引渡については、契約時の入居予定家族構成がわかる方に限定し配信

＜用語の定義＞ 就業者：週7時間以上勤務の方

在宅ワーク者：就業者かつ在宅ワーク頻度月1回以上の方

本人：在宅ワーク者本人の回答

配偶者：在宅ワーク者本人の配偶者で在宅ワークしていない方の回答

W在宅ワーク：夫妻共に在宅ワークをしている方

＜有効回答数＞ 夫妻どちらかが在宅ワークをしている方 n=1492

回収数n=1784の内、①下記の就業時間や在宅ワーク頻度の条件を満たさなかったもの、

②単身者の在宅ワーク③ご回答者夫妻以外の家族が在宅ワークのケースを除いて分析しました。

なお、一部の設問で回答がないものも有効としたため、設問により有効回答数が異なります。

本人・配偶者別回答者数

回答者数の一覧

		夫	妻	計
A1	本人	1027	186	1213
	(内:W在宅ワーク)	175	77	252
A2	配偶者	94	185	279
計	夫妻どちらかが在宅ワーク	1121	371	1492

A1+A2=計 となります。

A1:本人在宅ワーク

(内)W在宅ワーク

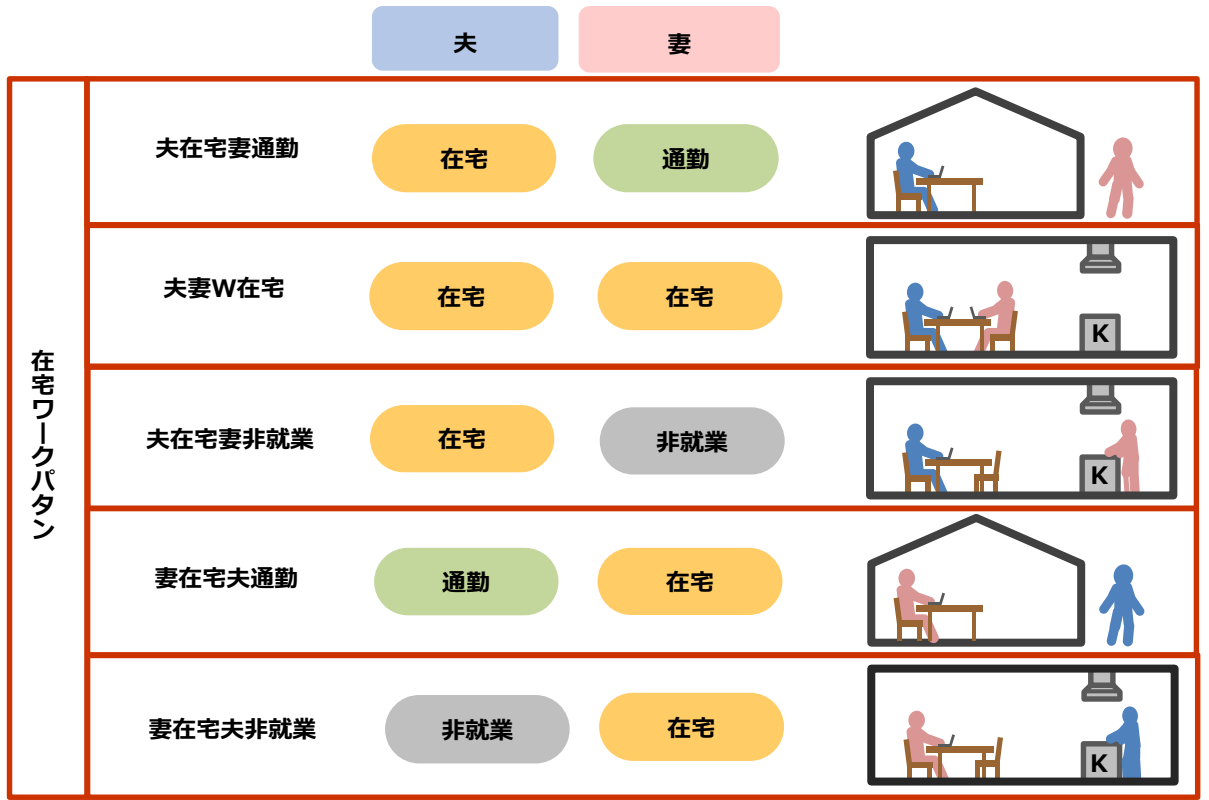
A2:配偶者在宅ワーク

(3) 在宅ワークパタンの定義

在宅ワークの際、配偶者が通勤で不在なのか、一緒に在宅ワークをしているのか、仕事していないのかによって、意識は変わるものと推測されます。そのため夫妻の働き方の通勤・在宅ワーク・非就業の組合せを在宅ワークパターンと名付け、これによる違いを分析します。在宅ワークパターンは下表の5種類(どちらも在宅ワークしていない場合は対象外)に分類され、それぞれ夫・妻の立場での回答があります。

在宅ワークパターン別回答者数

夫妻の在宅ワーク、通勤、非就業の組合せ								
夫	妻	在宅ワークパタン	回答者 計	夫	妻	計	夫	妻
在宅	通勤	夫在宅妻通勤	469	377	92	31%	34%	25%
在宅	在宅	夫妻W在宅	252	175	77	17%	16%	21%
在宅	非就業	夫在宅妻非就業	568	475	93	38%	42%	25%
通勤	在宅	妻在宅夫通勤	185	86	99	12%	8%	27%
非就業	在宅	妻在宅夫非就業	18	8	10	1%	1%	3%
夫妻いる場合 計			1492	1121	371	100%	100%	100%
夫在宅 計			1289	1027	262	86%	92%	71%
妻在宅 計			455	269	186	30%	24%	50%



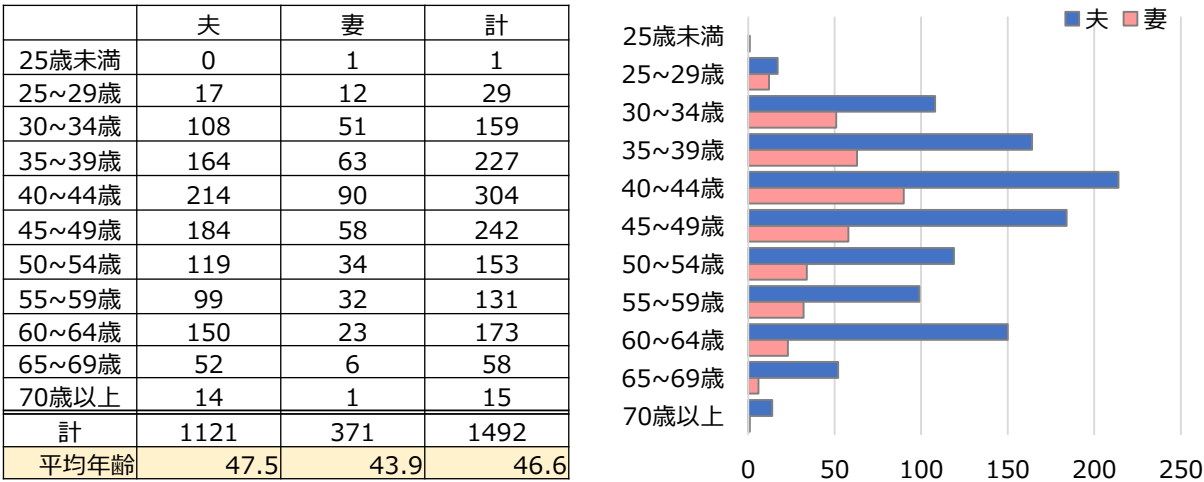
2-2 調査対象者の属性

(1) 回答者の年齢とライフステージ分布

調査対象者の年齢は、40代を中心に、20～70代まで広く分布しています。

長子の学齢を基準とし、夫妻のみの場合は夫50歳を境界として、7つのライフステージに区分し、長子小学生以下を若年層、それ以上を熟年層として分析を行いました。二世帯住宅の親世帯回答は別としています。夫妻共に就業者(週7時間以上)の共働き率は長子幼児期で一旦55%まで低下し、中高生～大学生では7割近くまで上がった後も5割程度を保ち、熟年層全体の共働き率では約6割で若年層とあまり変わらず、熟年層でも共働きが多数派となっています。

回答者の年齢分布



ライフステージの分布

	全体				在宅ワーク本人				在宅ワークしていない配偶者			
	夫	妻	計	共働き率	夫	妻	計	共働き率	夫	妻	計	共働き率
40代以下夫婦のみ	92	56	148	79%	74	29	103	81%	18	27	45	76%
（長子）幼児	260	81	341	55%	227	32	259	52%	28	48	76	66%
（長子）小学生	232	69	301	63%	214	43	257	63%	18	25	43	63%
（長子）中高学生	164	66	230	70%	161	34	195	69%	8	34	42	69%
（長子）大学(院)生	66	28	94	68%	65	10	75	75%	1	18	19	42%
（長子）社会人	132	26	158	54%	126	13	139	54%	6	13	19	58%
50代以上夫婦のみ	163	41	204	47%	148	24	172	45%	15	17	32	56%
親世帯	12	4	16	38%	12	1	13	38%	0	3	3	33%
総計	1121	371	1492	61%	1027	186	1213	60%	94	185	279	64%
若年層計	584	206	790	63%	515	104	619	61%	64	100	164	68%
熟年層計	525	161	686	59%	500	81	581	59%	30	82	112	59%
若年層 平均年齢(歳)	39.7	37.9	39.2	39.2	39.7	38.2	39.5	39.5	39.0	37.5	38.1	38.0
熟年層 平均年齢(歳)	55.8	50.9	54.6	53.0	55.7	51.7	55.1	53.4	54.8	50.1	51.3	50.5

ライフステージは長子、子がいない場合は夫年齢で判定
若年層：40代以下夫婦のみ＋長子小学生以下
熟年層：長子中学生以上＋50代以上夫婦のみ
若年層、熟年層共に親世帯回答を除く

(2) ライフステージと在宅ワークパタンの関係

在宅ワークパタンの分布に若年層熟年層で大きな違いはなく、夫回答では若年層の方がW在宅、夫通勤妻在宅のパタンが少し多くなっています。また、夫在宅妻通勤のパタンは夫回答、夫通勤妻在宅のパタンが妻回答に多いのは、本調査の性格上在宅ワーカー本人が回答者となることが多いためと考えられます。

ライフステージ×在宅ワークパタン

回答者		夫						妻					
在宅ワークパタン	夫	在宅	在宅	在宅	通勤	非就業		在宅	在宅	在宅	通勤	非就業	
	妻	通勤	在宅	非就業	在宅	在宅	夫 計	通勤	在宅	非就業	在宅	在宅	妻 計
1	40代以下夫婦のみ	28	26	20	17	1	92	17	15	10	14	0	56
2	(長子) 幼児	72	31	127	30	0	260	23	10	26	22	0	81
3	(長子) 小学生	79	42	94	17	0	232	7	19	16	25	2	69
4	(長子) 中高学生	73	29	55	7	0	164	22	14	13	15	2	66
5	(長子) 大学(院)生	29	17	19	1	0	66	7	6	11	4	0	28
6	(長子) 社会人	51	13	62	5	1	132	6	4	7	7	2	26
7	50代以上夫婦のみ	41	16	91	9	6	163	9	9	8	12	3	41
	親世帯	4	1	7	0	0	12	1	0	2	0	1	4
	若年層 計	179	99	241	64	1	584	47	44	52	61	2	206
	熟年層 計	194	75	227	22	7	525	44	33	39	38	7	161
	若年層 %	31%	17%	41%	11%	0%	100%	23%	21%	25%	30%	1%	100%
	熟年層 %	37%	14%	43%	4%	1%	100%	27%	20%	24%	24%	4%	100%
	総計	377	175	475	86	8	1121	92	77	93	99	10	371

(3) ライフステージと就業時間の関係

夫では週50時間以上の就業者は若年層の方が多くなっています。週7-30時間の就業者は夫妻共に熟年層に多い傾向があります。

ライフステージ×就業時間：本人

		夫						妻					
		週60h以上	週50-60	週40-50	週30-40	週7h-30未満	夫 計	週60h以上	週50-60	週40-50	週30-40	週7h-30未満	妻 計
1	40代以下夫婦のみ	18	11	37	4	4	74	1	4	16	5	3	29
2	(長子) 幼児	44	57	109	12	5	227	4	2	5	14	7	32
3	(長子) 小学生	46	42	107	9	10	214	4	1	18	14	6	43
4	(長子) 中高学生	32	43	73	10	3	161	0	3	12	5	14	34
5	(長子) 大学(院)生	15	12	29	7	2	65	0	0	3	5	2	10
6	(長子) 社会人	9	14	54	33	16	126	1	2	3	3	4	13
7	50代以上夫婦のみ	19	19	51	30	29	148	1	4	5	6	8	24
	親世帯	0	1	3	4	4	12	0	0	1	0	0	1
	若年層 計	108	110	253	25	19	515	9	7	39	33	16	104
	熟年層 計	75	88	207	80	50	500	2	9	23	19	28	81
	若年層 %	21%	21%	49%	5%	4%	100%	9%	7%	38%	32%	15%	100%
	熟年層 %	15%	18%	41%	16%	10%	100%	2%	11%	28%	23%	35%	100%
	総計	183	199	463	109	73	1027	11	16	63	52	44	186

2-3 調査対象住宅の概要

(1) 建設地と引渡年の分布

「調査対象となった住宅のある都道府県は、ヘーベルハウスの施工エリアに限定され、関東から北九州の各都府県に分布しています。一都三県で半数以上を占め、中部3県で約2割、関西圏2府4県で1割と なっています。

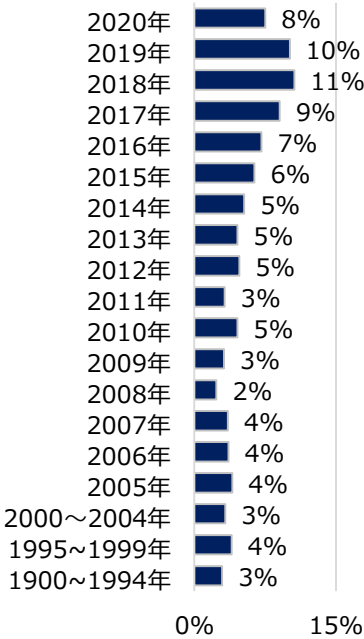
引渡年は直近5年以内の新しいものが多い傾向が若干見られますが、2005年までは比較的均等な分布 となっています。

2005年以降のアンケート回答依頼は契約時アンケートの回答で入居予定家族構成が分かるものに限定 して配信し、2004年以前は契約時アンケートの回答有無を問わず、契約者の現在推定年齢を60代に 限定して配信しています。そのため、2004年以前ではサンプル数としては少なくなっていますが、子どもが 独立した部屋を在宅ワークに活用するケースなどの数もある程度確保できたと思われます。

建設地・引渡年

建設地	(n)	(%)
東京都	278	19%
山梨県	6	0%
千葉県	139	9%
茨城県	48	3%
埼玉県	170	11%
群馬県	18	1%
栃木県	20	1%
神奈川県	244	16%
静岡県	96	6%
愛知県	238	16%
岐阜県	20	1%
三重県	21	1%
京都府	19	1%
滋賀県	14	1%
大阪府	71	5%
和歌山県	3	0%
兵庫県	36	2%
奈良県	7	0%
岡山県	8	1%
広島県	11	1%
山口県	1	0%
福岡県	24	2%
関東1都3県	831	56%
中部3県	279	19%
関西2府4県	150	10%
総計	1492	100%

引渡年	(n)	(%)
2020年	112	8%
2019年	151	10%
2018年	158	11%
2017年	135	9%
2016年	106	7%
2015年	95	6%
2014年	79	5%
2013年	68	5%
2012年	71	5%
2011年	48	3%
2010年	68	5%
2009年	47	3%
2008年	35	2%
2007年	53	4%
2006年	54	4%
2005年	60	4%
2000～2004年	49	3%
1995～1999年	59	4%
1900～1994年	44	3%
総計	1492	100%



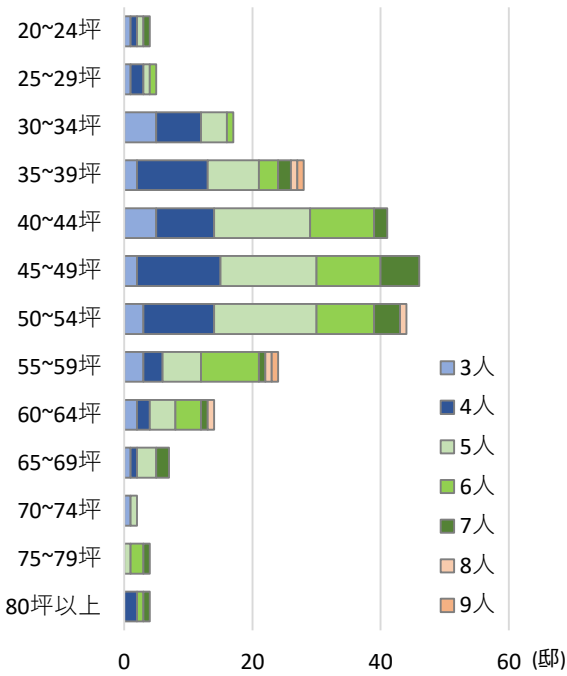
(2) 家族人数と延べ面積の分布

親子同居の有無別に、家族人数と延べ面積の関係を表にしたものです。親子同居の場合は40～54坪が多く、家族人数は4～6人が中心となっています。親子同居なしの場合は30坪台が多く、家族人数3～4人が中心となっています。夫妻それぞれの親が同居している複合同居の回答には面積や間取りから別居の親について誤って答えた疑いのあるものが多く、一部の分析ではこの回答を除いています。

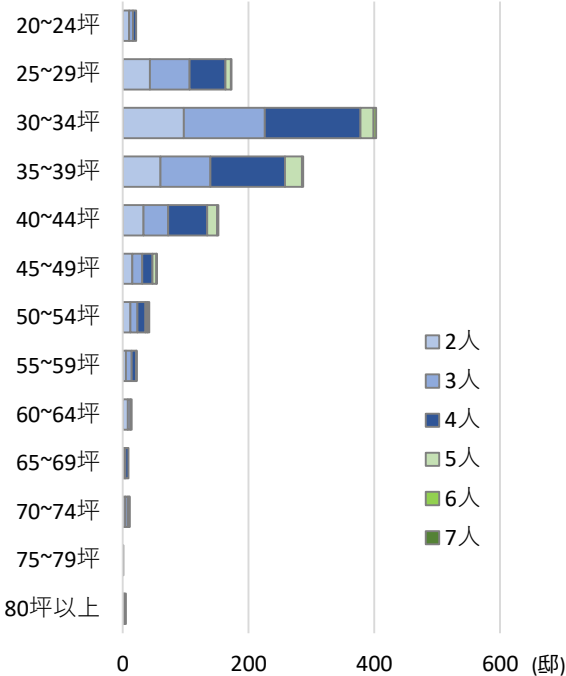
延べ面積分布

同居人数	親子同居あり								複合同居	親子同居なし（ミドルシングル含む）							(複合除)合計
	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	計		2人	3人	4人	5人	6人	7人	計	
20～24坪	1	1	1	0	1	0	0	4	0	10	6	5	0	0	0	21	25
25～29坪	1	2	1	1	0	0	0	5	2	43	63	57	9	1	0	173	178
30～34坪	5	7	4	1	0	0	0	17	3	97	129	152	21	4	0	403	420
35～39坪	2	11	8	3	2	1	1	28	3	60	79	119	27	2	0	287	315
40～44坪	5	9	15	10	2	0	0	41	2	33	39	62	16	2	0	152	193
45～49坪	2	13	15	10	6	0	0	46	0	15	16	16	6	0	1	54	100
50～54坪	3	11	16	9	4	1	0	44	0	12	11	13	3	3	0	42	86
55～59坪	3	3	6	9	1	1	1	24	0	5	9	7	1	0	0	22	46
60～64坪	2	2	4	4	1	1	0	14	0	8	4	2	0	0	0	14	28
65～69坪	1	1	3	0	2	0	0	7	0	2	2	5	0	0	0	9	16
70～74坪	1	0	1	0	0	0	0	2	0	4	4	2	1	0	0	11	13
75～79坪	0	0	1	2	1	0	0	4	0	0	1	0	0	0	0	1	5
80坪以上	0	2	0	1	1	0	0	4	0	1	2	0	2	0	0	5	9
アパート併用	2	8	4	3	1	1	0	19	0	7	6	11	5	0	0	29	48
総計	26	62	75	50	21	4	2	240	10	290	371	451	86	12	1	1194	1482

延べ面積分布：親子同居あり



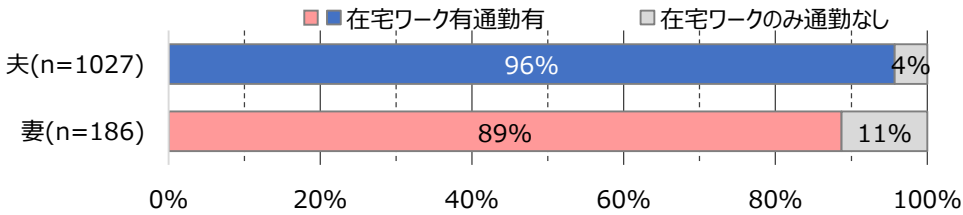
延べ面積分布：親子同居なし



2-4 調査対象住宅からの通勤手段

(1) 在宅ワーク有で、オフィス通勤があるテレワーク者がほとんどを占める

在宅ワークしている本人では、在宅ワークのみの方は少なく、夫の96%妻の89%がオフィス通勤もある「自宅テレワーク」となっています。このように高い要因として、今回の調査では店舗や医院、事務所などの自宅併設部分での仕事は在宅ワークに含めず、住宅部分での仕事のみに限っていることが考えられます。



(2) 通勤手段は鉄道利用が6割以上

本人のオフィス通勤がある場合の通勤手段では、鉄道利用が夫妻共6割以上と多く、バス利用と合わせた公共交通機関利用者は夫で7割近くを占めています。次いで車利用が夫で23%妻が30%と妻の方がやや車通勤が多い結果となっています。

	夫		妻	
	n	%	n	%
鉄道利用(駅まで徒歩、自転車、バス、車の計)	651	66%	99	60%
バス利用(鉄道利用なし)	15	2%	3	2%
車利用	229	23%	49	30%
自転車・バイク	50	5%	8	5%
徒歩のみ	24	2%	2	1%
不明他	14	1%	4	2%
公共交通機関利用 計	666	68%	102	62%
総計	983	100%	165	100%

第3章

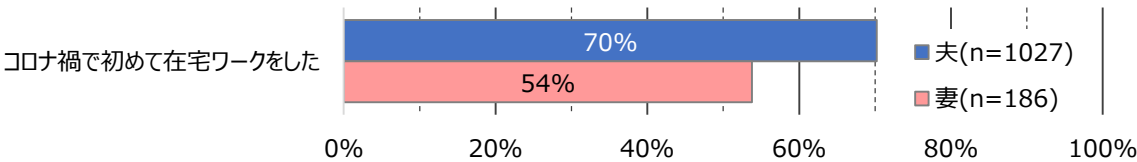
在宅ワークによるくらしの変化

3-1 定着した在宅ワーク

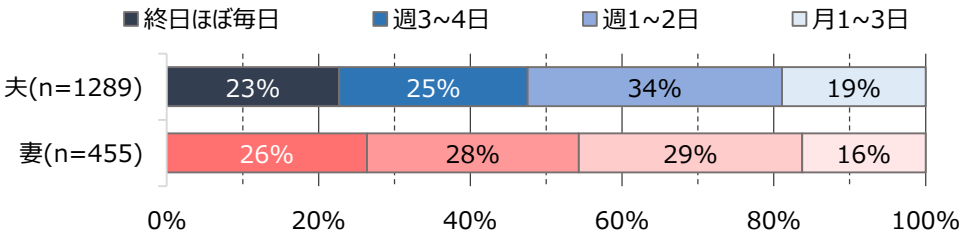
(1) 週1回以上在宅ワークが定着し、終日出勤に限定されない働き方に

在宅ワーク者のうち、2020年以降に初めて在宅ワークを開始したと回答した人は夫7割、妻5割以上と、コロナ禍をきっかけに始めた人が過半数を占め、在宅ワークがコロナ禍の影響で急速に広まったことがわかります。在宅ワークの頻度は、夫妻とも8割以上が週1日以上と回答し、定着を感じさせる結果となっています。終日ではないケースが夫で2割、妻で3割強を占め、出勤前や早く帰宅しての在宅ワークなど、働き方は多様になっていると考えられます。

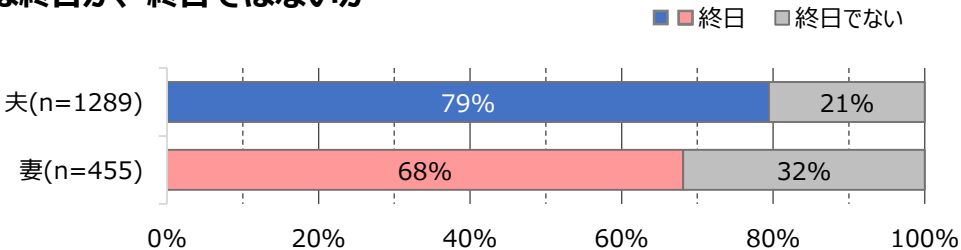
■ コロナ禍で初めて在宅ワークを開始したか：本人



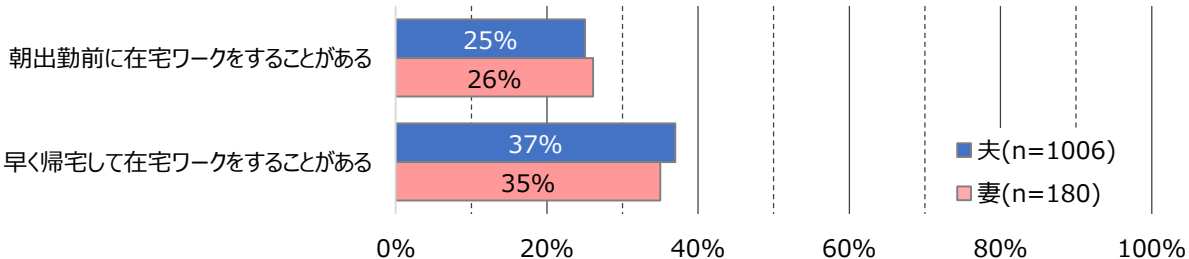
■ 在宅ワークの頻度



■ 在宅ワークは終日か、終日ではないか



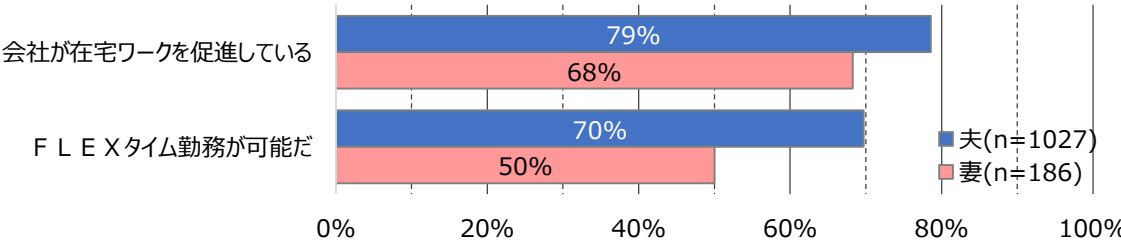
■ 出勤前または早く帰宅しての在宅ワーク：本人・通勤有限定



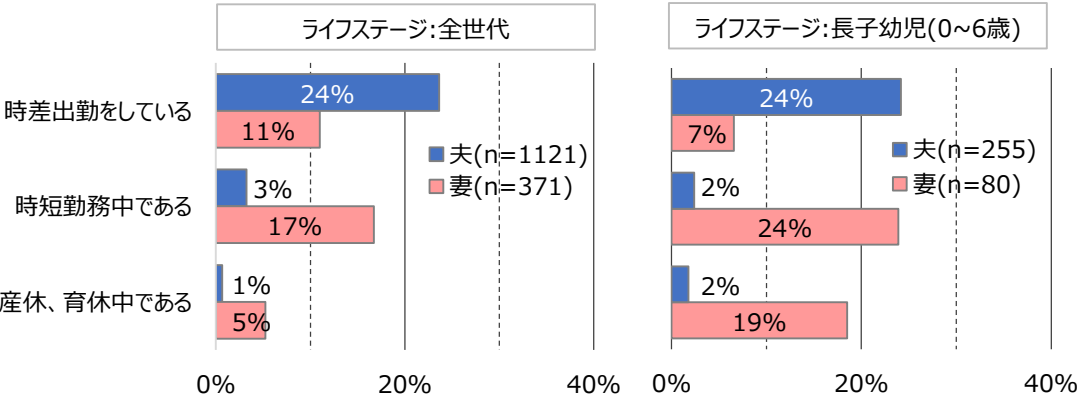
(2)会社制度の整備は進んだが、利用者の率に課題

働き方に関する会社制度の質問では、勤務先が在宅ワークを促進している人が夫で約8割、妻で約7割、FLEXタイム勤務制度がある人が夫で7割、妻で5割と、普及が進んでいます。時差出勤は夫が世代を問わず活用し、時短勤務は長子が幼児期の妻が多く活用していましたが、いずれも現状1/4程度に留まっています。

■在宅ワークに関する会社の制度：本人



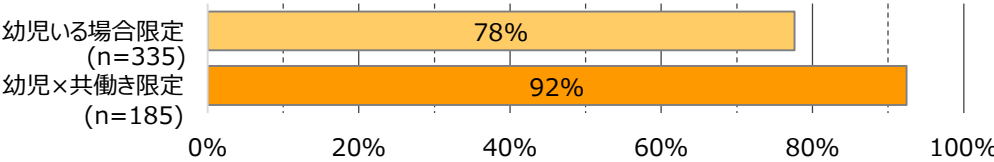
■時差出勤、時短勤務や子育て休暇の状況



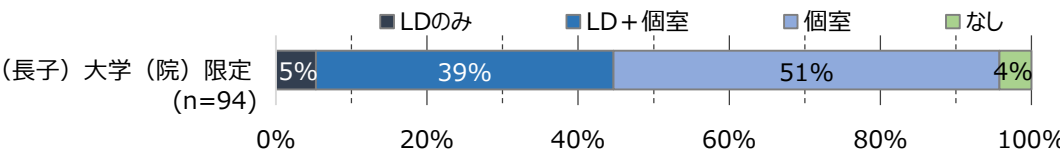
(3)保育園は再開し、オンライン授業は継続

保育園・幼稚園に通っていると答えた人は幼児がいる場合限定で約8割、共働き家庭に限定すると9割の結果になりました。緊急事態宣言が最初に出た一斉休校の時期と異なり、子どもの世話をしながらの在宅ワークではなくなったと言えます。また、大学生がいる家庭では、ほぼ全てオンライン授業を受けており、子ども部屋などの個室に留まらず、LDの利用も4割程度みられました。

■保育園・幼稚園に通っているか



■大学(院)生のオンライン授業時の使用場所



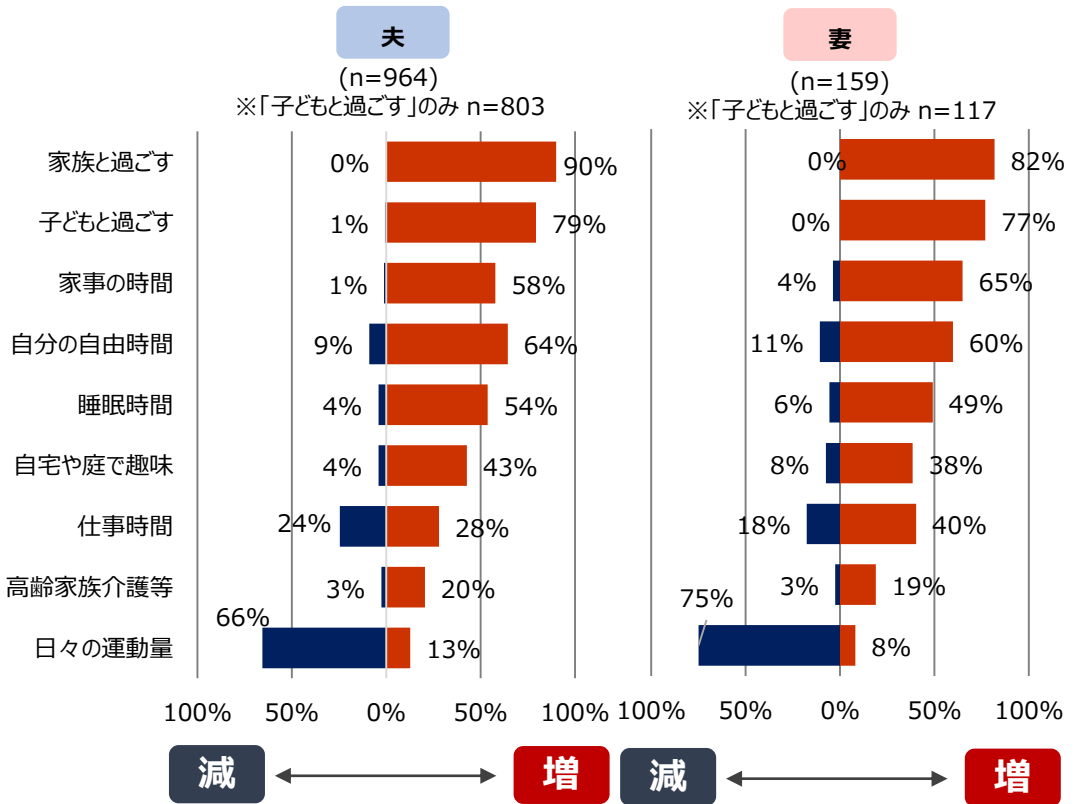
3-2 在宅ワークによる生活行為の増減

(1)ワークの時間は増減共にあるが、大多数のライフの時間項目は増加

在宅ワークによって通勤時よりも在宅時間が増えたことで、日々の生活のうちに占める時間には大きな変化がみられました。在宅ワーク者本人への通勤時と在宅ワーク時の時間の増減についての質問で、増減を左右に振り分けたグラフを作成してみました。「変わらない」という回答の比率を省略したため、合計は100%未満となっています。

増加した時間としては夫妻とも同傾向で、「家族と過ごす」時間を筆頭に、家事や睡眠、自由に使える時間など家での生活時間が全般に広く挙がりました。仕事時間については、減った人が他の項目より多くばらつきの多い結果となっています。これは、在宅ワークでの仕事効率の個人差や、通勤時間が無くなった分をどのくらい仕事時間に充てるかが影響していると考えられます。減った時間としては日々の運動量が最も多く、通勤がなくなった影響と共に、外出自粛の影響も考えられます。

■在宅ワークによる時間の増減：本人



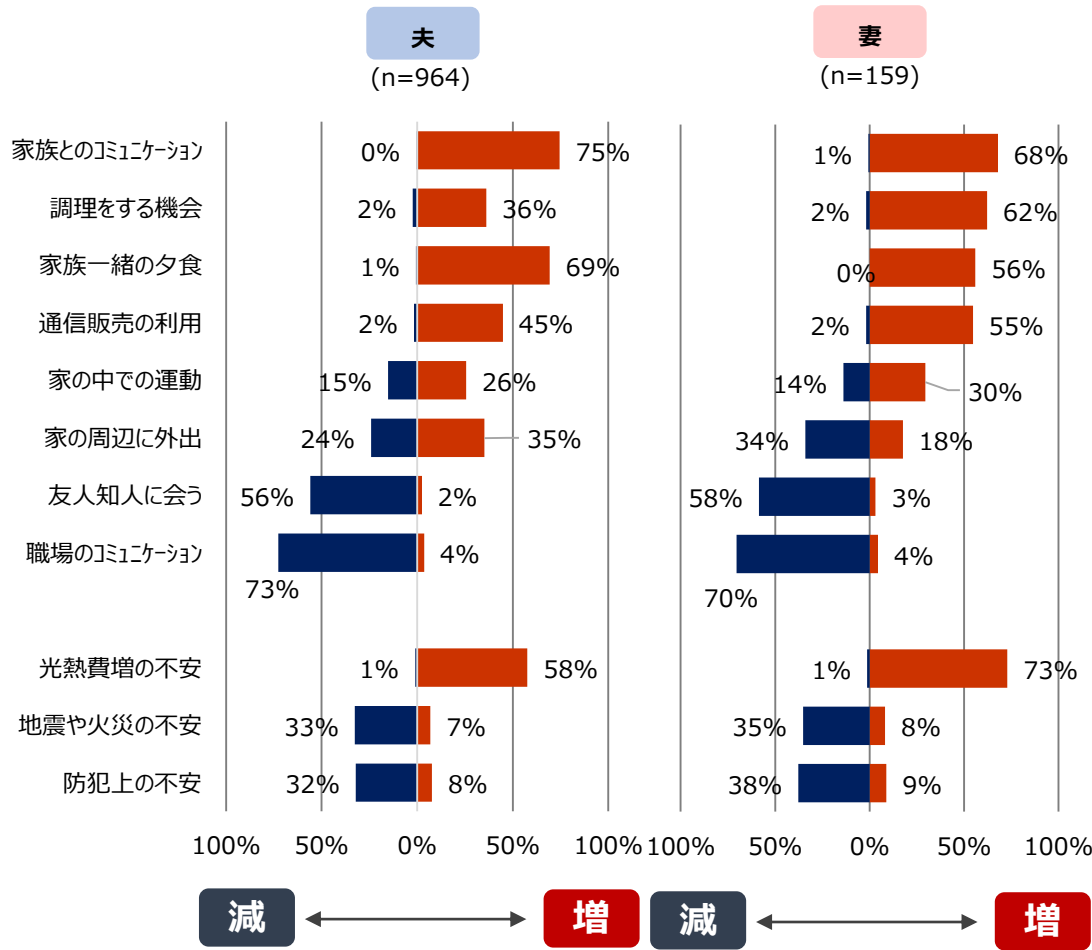
(2)家族コミュニケーションや調理の機会は増加、外出関連の項目は減少

機会の増減についての質問では、夫妻とも「家族とのコミュニケーション」が増加項目として最も高く、時間の増減と同じ傾向となりました。夫妻差があった項目としては調理の機会は妻が、家族一緒にの夕食機会は夫がより増えており、在宅ワークによる妻の家事負担の増加が示唆されます。減った項目としては友人や職場でのコミュニケーションの機会が多く、仕事中の会話や終業後の会合がなくなったことの影響が多いと考えられます。

(3)光熱費の不安は増加、防災防犯の不安は減少

不安感の増減についての質問では、「光熱費の増加」の回答が夫で約6割、妻で約7割と多くありました。妻の方が不安感が高いのは、家計管理を妻がしているケースが多く敏感なためと推測されます。また、地震や火災等の災害に対する不安や、空き巣等の防犯上の不安は夫妻とも大幅に減少しており、在宅していることにより安心感が得られるという傾向がみられました。

■在宅ワークによる機会・不安感の増減：本人



3-3 夕方以降の生活時間の変化

(1)夕食の時間は在宅ワークで早まる

通勤から在宅ワークになったことでの生活時間の変化をみると、すべての場合で夫妻ともに夕食開始時刻が早まっています。夕食前に終業している層では、夕食開始時刻は夫で66分、妻で39分早まり、片道の通勤時間が夫57分妻52分なので、ほぼ通勤時間分早くなっていました。一方、就寝時刻については夫で17分、妻で20分の早まりであり夕食後の時間が増えたことが分かります。

(2)在宅ワークだと夕食後の仕事が可能に

夫は夕食前終業層(n=607)が多数派であるものの、夕食後仕事をする夕食後終業層(n=111)も約16%みられました。この層の夕食開始時刻の早まりは1時間51分と大きく、在宅ワーク時は仕事を中断して夕食を取り、夕食後に仕事を再開するといった生活スタイルとしているようです。通勤時は外食または遅い夕食をとる人が多かったなか、生活リズムも大きく改善されていると考えられます。妻では夕食後終業層は少なく6名のみなので平均時間を省略しています。

(3)夕食時間の早まりは長子が幼児～小学生のライフステージで特に大きい

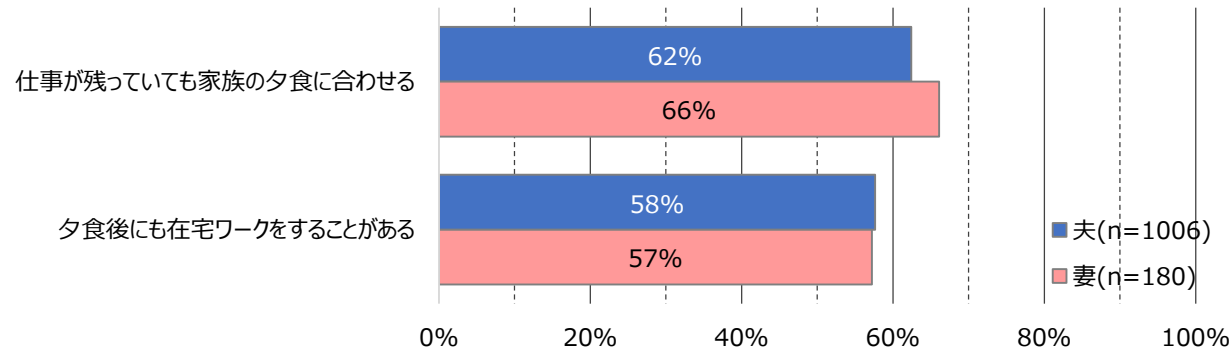
子どもの有無及び長子の年代によるライフステージ別に在宅ワーク時の夕食開始時刻をみると、長子が幼児の場合1時間37分、小学生の場合1時間27分と早まりが大きく、19時台前半となりました。子どもの夕食時間に合わせて家族全員で食べていると推測されます。長子が大学生以上、50代以上夫妻のみでは通勤時の夕食が元々早く、早まりは約40分ですが在宅時は同様に19時半前の夕食開始となっています。

■通勤日在宅日の夕方以降の生活行為の平均時刻と生活時間：本人

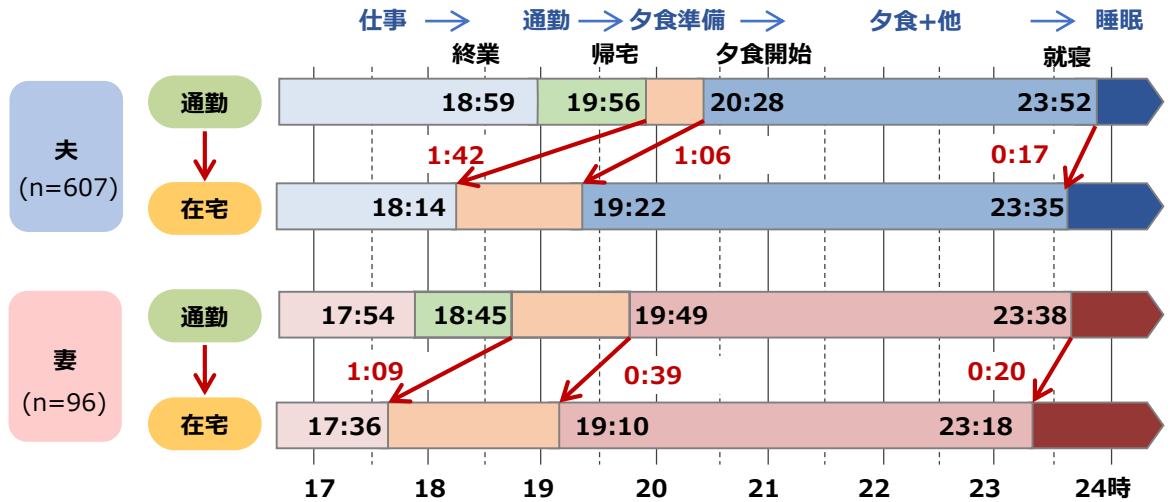
※週30時間以上就業、午前中に通勤、在宅日は終日、時刻逆転矛盾ない回答に限定。○時台との回答を○時30分として平均

分析軸			各行為の平均時刻			生活時間			
	在宅ワーク者と状況		帰宅・ 終業	夕食	就寝		通勤往復	帰宅・終業 →夕食	夕食 →就寝
終業 夕食前後別	夫	在宅日終業夕食前 (n=607)	通勤日 19:56	20:28	23:52		1:54	0:32	3:24
			在宅日 18:14	19:22	23:35		0:00	1:08	4:13
			早遅 -1:42	-1:06	-0:17	増加時間	-1:54	0:36	0:49
	妻	在宅日終業夕食後 (n=111)	通勤日 20:59	21:04	0:25		1:55	0:05	3:21
			在宅日 21:52	19:13	0:21		0:00	2:39	5:08
			早遅 0:53	-1:51	-0:04	増加時間	-1:55	-2:34	1:47
		在宅日終業夕食前 (n=96)	通勤日 18:45	19:49	23:38		1:44	1:04	3:49
			在宅日 17:36	19:10	23:18		0:00	1:34	4:08
			早遅 -1:09	-0:39	-0:20	増加時間	-1:44	0:30	0:19
ライフ ステージ別	夫	40代以下夫妻のみ (n=57)	通勤日 20:16	20:57	0:11		1:53	0:41	3:14
			在宅日 18:48	19:44	23:57		0:00	0:56	4:13
			早遅 -1:28	-1:13	-0:14	増加時間	-1:53	0:15	0:59
		長子幼児 (n=165)	通勤日 20:23	20:43	23:59		1:58	0:20	3:16
			在宅日 18:58	19:06	23:36		0:00	0:08	4:30
			早遅 -1:25	-1:37	-0:23	増加時間	-1:58	0:12	1:14
		長子小学生 (n=157)	通勤日 20:22	20:44	0:08		1:49	0:22	3:24
			在宅日 19:13	19:17	23:47		0:00	0:04	4:30
			早遅 -1:09	-1:27	-0:21	増加時間	-1:49	0:18	1:06
		長子中高生 (n=133)	通勤日 20:13	20:36	0:03		1:49	0:23	3:27
			在宅日 18:53	19:25	23:51		0:00	0:32	4:26
			早遅 -1:20	-1:11	-0:12	増加時間	-1:49	0:09	0:59
		長子大学/社会人 (n=122)	通勤日 19:31	20:14	23:37		1:53	0:43	3:23
			在宅日 18:19	19:30	23:30		0:00	1:11	4:00
			早遅 -1:12	-0:44	-0:07	増加時間	-1:53	0:28	0:37
		50代以上夫妻のみ (n=79)	通勤日 19:35	20:05	23:45		2:08	0:30	3:40
			在宅日 18:17	19:23	23:36		0:00	1:06	4:13
			早遅 -1:18	-0:42	-0:09	増加時間	-2:08	0:36	0:33

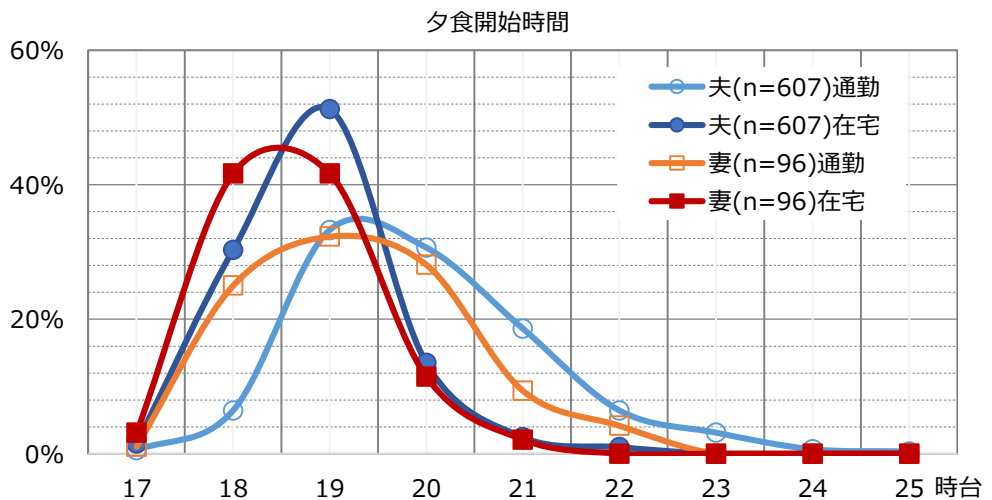
■在宅ワークと家族時間の関係調整：本人



■通勤日→在宅日の夕方以降の生活時間比較：在宅時夕食前終業者



■通勤・在宅ワーク時の夕食開始時間：在宅時夕食前終業者



3-4 睡眠と起床時間の変化

(1)在宅ワークで睡眠時間が増加、朝の時間に余裕が生まれる

通勤から在宅ワークになったことで、在宅日夕食前終業の場合は夫妻ともに起床時刻が約30分遅くなり、就寝が20分程度早くなることと合わせて睡眠時間が増加していました。起床→出勤(家を出る時間)や始業の時刻も遅くなり、朝の時間に余裕ができています。仕事時間は通勤時間を差し引いても夫で1時間、妻で30分短くなっています。

(2)在宅日夕食後終業者は生活時間が夜型

夕食後の時間に仕事をする在宅日夕食後終業層は、就寝時刻の早まりが小さく、就寝が0:21、起床は6:59と夕食前終業層より遅く、夜型の生活であることが示唆されます。起床時刻は29分遅くなり、睡眠時間は長くなっています。仕事時間は終業－始業としているため、夕食後終業層では通勤日の仕事時間が約11時間半と長く、在宅日はさらに約1時間40分の増加となっていますが、これには子どもが寝てから仕事を再開するなどの場合が含まれ、必ずしも就業時間の増加を意味するものではないと思われます。

(3)ライフステージ別では子育て期の変化が大きい

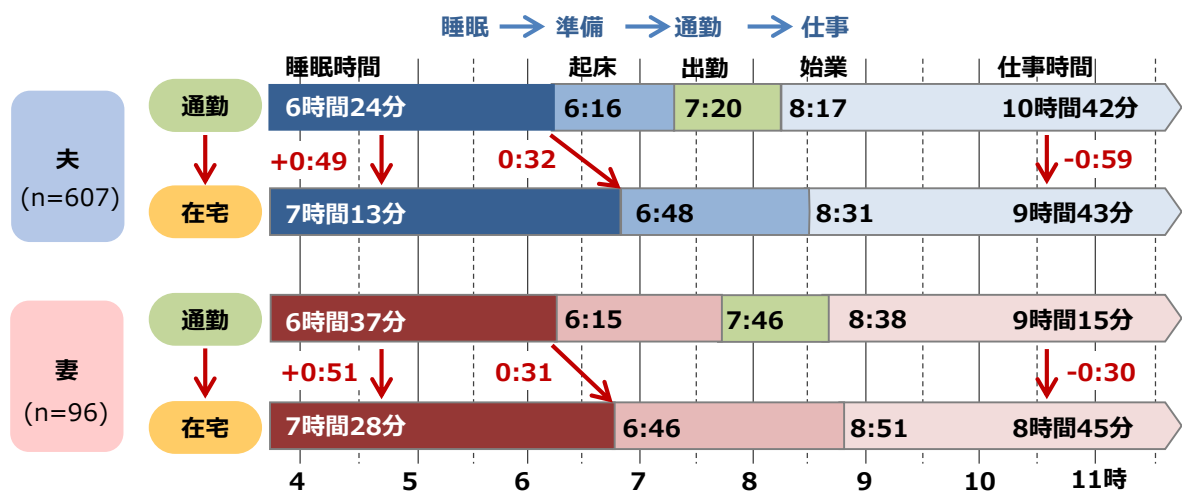
子どもの有無及び長子の年代によるライフステージ別に比較すると就寝時刻は長子が幼児、小学生の場合、他の世代より早まりが大きく、睡眠時間も長くなっています。在宅ワークには特に子育て世代の忙しさを緩和する効果があると言えます。

■通勤日在宅日の就寝以降の生活行為の平均時刻と生活時間：本人

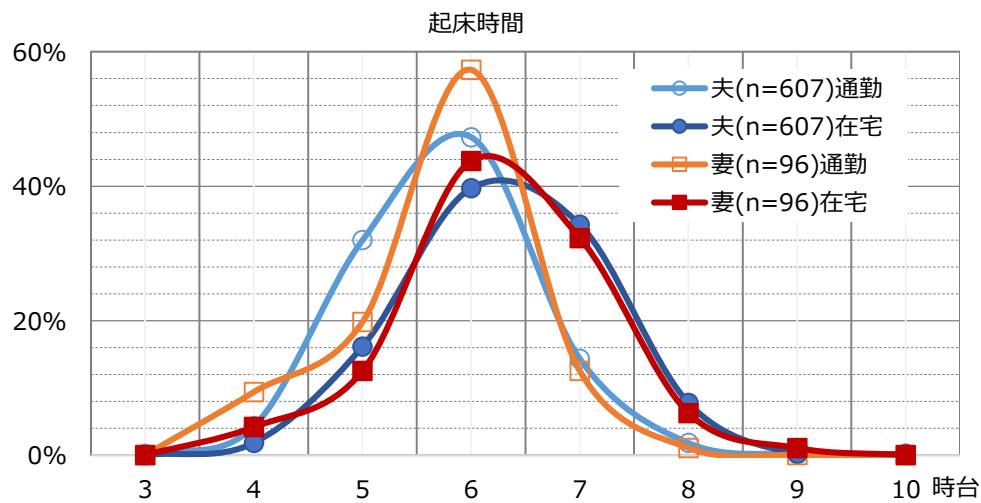
※週30時間以上就業、午前中に通勤、在宅日は終日、時刻逆転矛盾ない回答に限定。○時台との回答を○時30分として平均

分析軸			各行為の平均時刻			生活時間			
在宅ワーク者と状況			就寝	起床	出勤・始業		睡眠時間 就寝→起床	起床→ 出勤・始業	仕事時間 始業→終業
終業夕食前後別	夫	在宅日終業夕食前 (n=607)	通勤日 23:52	6:16	7:20		6:24	1:04	10:42
			在宅日 23:35	6:48	8:31		7:13	1:43	9:43
			早遅 -0:17	0:32	1:11	増加時間	0:49	0:39	-0:59
	妻	在宅日終業夕食後 (n=111)	通勤日 0:25	6:30	7:34		6:05	1:04	11:31
			在宅日 0:21	6:59	8:40		6:38	1:41	13:12
			早遅 -0:04	0:29	1:06	増加時間	0:33	0:37	1:41
ライフステージ別	夫	在宅日終業夕食前 (n=96)	通勤日 23:38	6:15	7:46		6:37	1:31	9:15
			在宅日 23:18	6:46	8:51		7:28	2:05	8:45
			早遅 -0:20	0:31	1:05	増加時間	0:51	0:34	-0:30
		40代以下夫妻のみ (n=57)	通勤日 0:11	6:30	7:25		6:19	0:55	10:57
			在宅日 23:57	7:08	8:40		7:11	1:32	10:08
			早遅 -0:14	0:38	1:15	増加時間	0:52	0:37	-0:49
	妻	長子幼児 (n=165)	通勤日 23:59	6:28	7:23		6:29	0:55	11:02
			在宅日 23:36	7:04	8:41		7:28	1:37	10:17
			早遅 -0:23	0:36	1:18	増加時間	0:59	0:42	-0:45
		長子小学生 (n=157)	通勤日 0:08	6:26	7:33		6:18	1:07	10:59
			在宅日 23:47	6:51	8:34		7:04	1:43	10:39
			早遅 -0:21	0:25	1:01	増加時間	0:46	0:36	-0:20
	夫	長子中高生 (n=133)	通勤日 0:03	6:21	7:30		6:18	1:09	10:53
			在宅日 23:51	6:53	8:30		7:02	1:37	10:23
			早遅 -0:12	0:32	1:10	増加時間	0:44	0:28	-0:30
		長子大学/社会人 (n=122)	通勤日 23:37	5:57	7:04		6:20	1:07	10:35
			在宅日 23:30	6:29	8:22		6:59	1:53	9:57
			早遅 -0:07	0:32	1:18	増加時間	0:39	0:46	-0:38
	妻	50代以上夫妻のみ (n=79)	通勤日 23:45	6:01	7:15		6:16	1:14	10:12
			在宅日 23:36	6:33	8:24		6:57	1:51	9:53
			早遅 -0:09	0:32	1:09	増加時間	0:41	0:37	-0:19

■ 通勤日→在宅日の睡眠と起床時間の比較：在宅時夕食前終業者



■ 通勤日・在宅日の起床時間：在宅時夕食前終業者



コラム：在宅ワークで増えた減った時間・機会・不安：回答者の声

在宅ワークでの生活の変化について、リアルな声を集めてみました。通勤時間が無くなる、というのが最大の変化で、その効果についての声が多く寄せられています。

夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

いい点は、嫁(わたし)の通勤時間がなくなり自宅ご飯が増え外食費が減った。睡眠時間が増えた。悪い点は、残業禁止になり給料が減った。友達と会えなくなった。趣味を新しく探さなければいけなくなった。(LD派妻・夫通勤)

何しろ通勤時間という人生の中で最大の無駄時間が無くなり有効に使い、通勤でイライラする事もなく神経が落ち着いて居るので、多少の深夜残業もそのまま風呂に入って落ち着いてすんなり寝入事ができるので寝不足が全く無くなった。仕事でも今まで不可能だった家族と夕飯がとれるし、最高。(個室派夫・妻通勤)

良い点：通勤時間がないのでその分睡眠時間が増えたので疲れにくくなった。・在宅ワークだと人の目がないので、仕事の合間にストレッチが出来る。・昼休みに簡単な家事ができる。・人がいないので邪魔されないで仕事出来る。・メガネで仕事出来るので、目が疲れにくい。・宅急便が受け取れる。

悪い点・眠いとき、気持ちを強く持たないと居眠りしてしまいそうになる。・ネット回線が安定しないときがある、猫に邪魔されることがある。(LD派妻・夫通勤)

通勤時間がなくなったことで、自宅にいる時間が増え、家族で過ごす時間が長くなった。自分の仕事は在宅ワークができないため、自分自身の暮らしの大きな変化はない。配偶者は在宅ワークが始まり、昼食を自宅とることが増えたため、外食が減り、コロナ感染対策で職場の仲間との飲み会もなくなったため交際費が減った。(通勤妻・夫在宅)

夫が調理や洗濯についてコメントしているのも在宅ワークならではのようです。

洗濯する機会が増えて衛生的に良くなった。不要な服の断捨離が進んだ。掃除機をかける回数が増えた。運動不足を感じる、昼飯はインスタント食品が主流になって栄養面を心配している。(個室派夫・妻通勤)

出張生活から在宅ワークへ切り替わりましたので、劇的な変化でした。仕事上は一長一短あります（作業効率は上がるが、コミュニケーションロスが多いなど）。しかし私生活はほぼ良いことばかりです。子どもたちと触れ合える時間も増え、出張先からの電話とは段違いです。妻も在宅ワークがずっと続けば嬉しいと言っています。(個室派夫・妻非就業)

妻が通勤している場合に、夫が在宅で家事をしてうまくいっているケースです。

ほぼ毎日、家族で夕飯を食べることができるようになり、家族の時間が増えたのが1番のメリット。また、4月から自分が職場復帰したタイミングで配偶者の在宅ワークが始まり、状況に応じて家事や子育ての役割分担がスムーズに出来ている。(通勤妻・夫LD派)

第4章

在宅ワークの場所とニーズ

4-1 在宅ワークの場所の区分

(1) 在宅ワークの場所をLD派、個室派に分けて分析

在宅ワーク時に一番使う場所の質問は、夫妻それぞれについて原アンケートの選択肢では16区分＋その他でお聞きし、その他の回答内容からさらに「防音室」「子ども部屋」を抽出して19区分として集計しました。

その結果を大きくLD派と個室派の2区分に分け、以降の分析を行います。またLD派はダイニングテーブルとそれ以外、個室派は家族共用か個人専用かで分けて分布をみることにしました。

また、個室派の寝室兼用の比率をみると、夫は2割、妻は1割に満たず、寝室での在宅ワークを避ける傾向が見て取れます。

■在宅ワーク時に一番使う場所：区分と一覧

在宅ワーク場所の区分			回答数		比率	
2区分	4区分	原アンケートの選択肢	夫	妻	夫	妻
LD派	Dテーブル	ダイニングテーブル	252	212	20%	47%
	他のLD	LDKの書斎コーナー	54	21	4%	5%
		LDKの造り付けのカウンター	55	41	4%	9%
		LDKの置き家具のデスク	44	23	3%	5%
		リビングのローテーブル(ソファ等用のもの)	34	20	3%	4%
		LDKの床上げタタミスペース	12	6	1%	1%
		LDKに隣接する部屋	45	15	4%	3%
個室派	共用個室	家族共用の個室（寝室以外）	104	30	8%	7%
		家族共用の個室（寝室と兼用）※	125	19	10%	4%
		廊下・ホールの一角	19	1	1%	0%
		子供部屋	19	3	1%	1%
	専用個室	個室の一角の書斎コーナー	136	19	11%	4%
		子供が独立して空いた個室	43	4	3%	1%
		自分専用の個室（寝室以外）	223	24	17%	5%
		自分専用の個室（寝室と兼用）※	108	14	8%	3%
		納戸・ウォークインクローゼット	11	0	1%	0%
防音室	0	3	0%	1%		
集計対象計		1284	455	100%	100%	
集計対象外		テラス・ベランダ・屋上	3	0		
		他	2	0		
回答総数			1289	455		

2区分			夫	妻	夫	妻
LD派	計		496	338	39%	74%
個室派	計		788	117	61%	26%

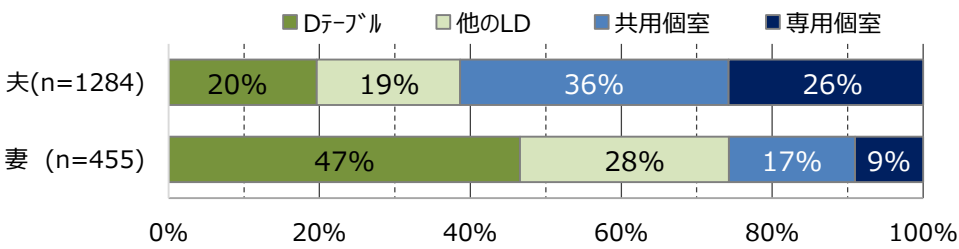
4区分			夫	妻	夫	妻
LD派	Dテーブル		252	212	20%	47%
	他のLD		244	126	19%	28%
個室派	共用個室		267	53	21%	12%
	専用個室		521	64	41%	14%

個室派	寝室兼用	上記※家族共用・自分専用の計	233	33	18%	7%
-----	------	----------------	-----	----	-----	----

(2) 在宅ワークの場所は夫は個室、妻はLDが多い

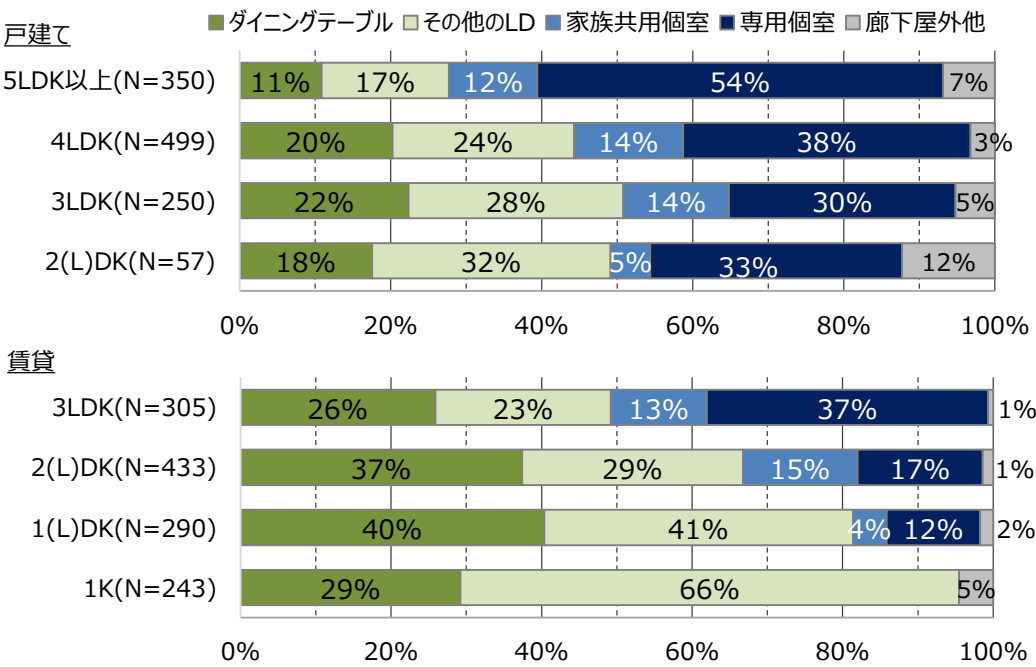
在宅ワーク時に一番使う場所は、夫では個室派が6割を占めたのに対し、妻は7割以上がLD派であり、
夫妻の差が際立った結果となりました。妻はダイニングテーブルの利用が5割近くを占め、夫の2割と開き
があります。また専用個室は夫妻共に共用個室の比率より低くなっています。

■在宅ワーク時に一番使う場所：4区分



コラム：個室の数による在宅ワーク場所選択への影響(前回調査結果)

前回調査での在宅ワークの場所の分布は、戸建持家ではLD派が計41%(n=1189 男性回答者が多い)、
集合賃貸では71%(n=1308)という結果となっています。個室数別の集計をしてみると、戸建持家では5
LDK以上で個室の比率が上がるが4LDK以下では影響が少なく、集合賃貸では個室数の影響が大きく
多いほど個室の率が増える、という結果となりました。戸建で専用個室が多いのは、回答者で50代以上の
比率が高く個室数に余裕があったためと考えられます。



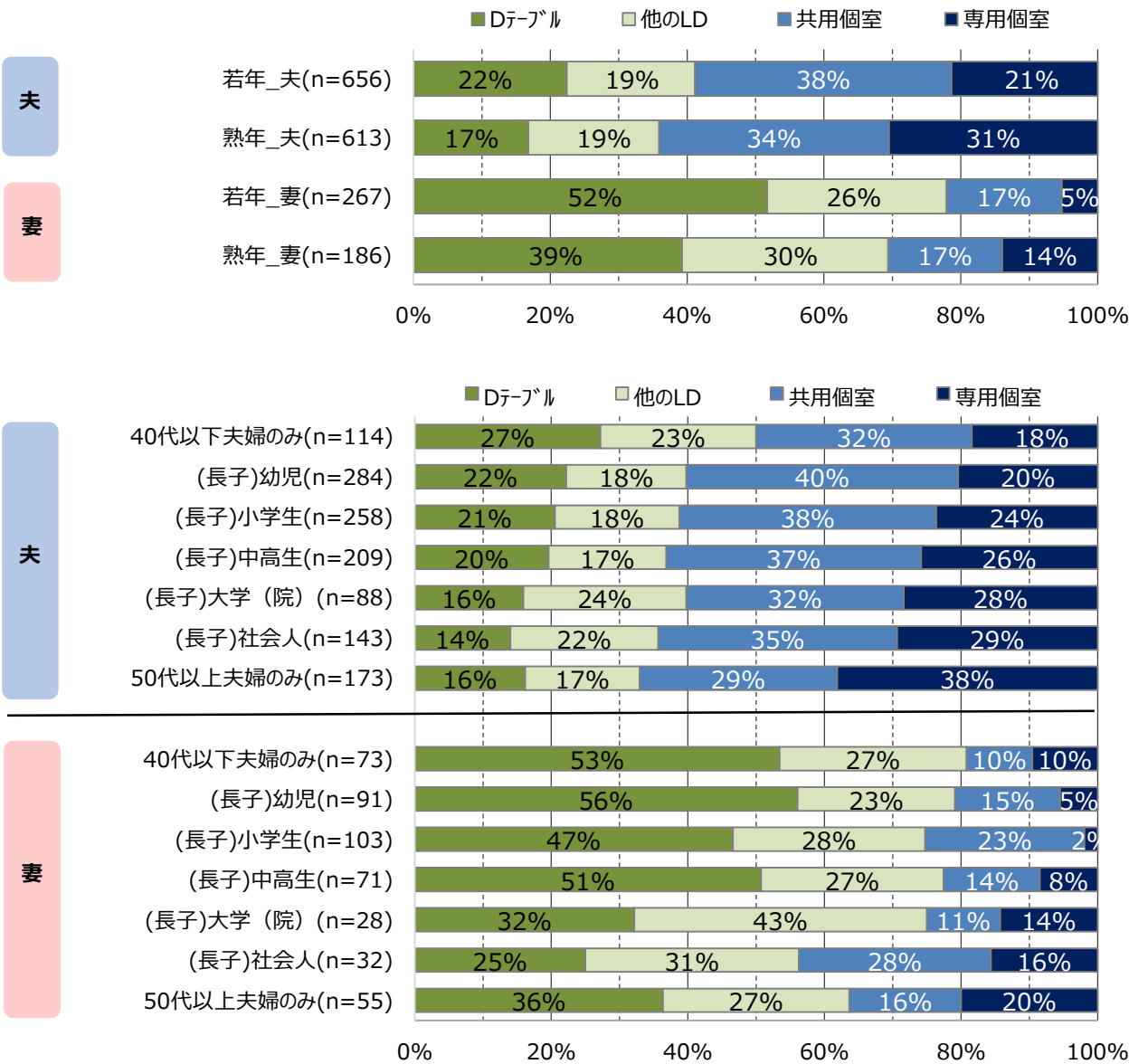
4-2 家族に影響される在宅ワークの場所

(1) ライフステージの後期に個室派が増加

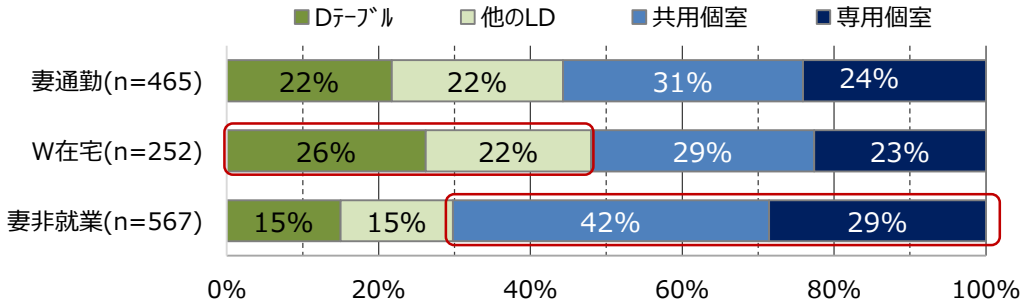
在宅ワーク時に一番使う場所をライフステージ別にみると、夫妻共に子が社会人以降のライフステージでは、個室派が多くなる傾向があります。子に個室が必要なくなり、夫妻で別寝としたり寝室以外の個室を持つケースが増えるためと考えられます。

在宅ワークパタン別にみると、夫のLD派の比率が高いのは共働きの場合で、妻が通勤している場合はLDを独占でき、W在宅ワークの場合は同じ空間でも気にならないためと思われます。但しW在宅ワークの場合、同じ日に在宅しているとは限らず、日をずらしている場合も含まれています。また、逆に少ないのは妻が専業主婦の場合で、妻がいるLDを避けて在宅ワークをしていると考えられます。

■在宅ワーク時に一番使う場所：ライフステージ別



■ 夫の在宅ワーク時に一番使う場所：妻の在宅ワークパターン別



■ 在宅ワーク場所として選んだ理由：回答者の声

夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

LD派

家族と同じ空間で在宅ワークや勉強を出来るとお互いの理解が深まると考えた為(LD派夫・妻通勤)

昼間は陽が差して、部屋が明るく作業しやすいため。LANケーブルの口が近くにある。(LD派夫・妻通勤)

子どもの様子を見ながら作業ができる。コーヒー等の飲み物がいれやすく気分転換がしやすい。落ち着く。(LD派妻・夫通勤)

机が広く、P C、ディスプレイが置きやすく、作業しやすい。空き時間に家事などがすぐできる。家族と空き時間に会話しやすい。(LD派妻・夫通勤)

家の中心で合間に家事も出来便利のため(LD派妻・夫通勤)

Web会議をすることを念頭に置かず家を建てたので、背景にするのにちょうどよい壁がちょうどよい場所がないのが残念です。(LD派妻・夫通勤)

個室派

1FのLDKは子ども達がTVを見るので、音の影響が少ない2F寝室がベスト。リビング程広くないのでエアコンの光熱費も抑えられる。物が少なくWEB会議にも影響がない。(個室派妻・夫通勤)

2人なので、一階と二階それぞれ分かれるようにした。配偶者のほうがWEB会議が少ないため、セミ防音の部屋を自分にあてた。(個室派夫・妻在宅)

NEST空間での作業も考えたが、調べ物が多いので仕事に必要な本や座り仕事で姿勢が悪くならないようにするディスプレイ、パソコンラックなどを置くと手狭なことや、朝早くから夜遅くまでのハードワークのため他の家族の生活とある程度独立させたかったため。また、夫がリフレッシュできるような筋トレグッズなども置いて仕事以外のストレスが溜まらないよう配慮した結果、まだ使っていない子ども部屋を仕事部屋として使うことにした。(非就業妻・夫在宅)

■ 子どもの勉強場所や書斎、専用個室の活用：回答者の声

子どもが勉強するスペースをリビングでつくりたかったからです。家事をしながら子どもの勉強が見られる環境が良いです(LD派妻・夫在宅)

キッチン横家事室が2.5畳程度で棚もあり、在宅ワークに適しているのでそこを仕事用の部屋としている(LD派夫・妻非就業)

Web会議でのちょっとしたスペースが欲しい(LD派夫・妻非就業)

仕事道具や資料を子どもに触られないようにするため。仕事に集中できるため個室にした。(個室派妻・夫通勤)

元々は書斎で使用するつもりだったが、仕事の依頼があったため、仕事スペースとした。生活動線から離れており、一人で静かに作業ができる場所であるため、仕事スペースとして選んだ。(個室派夫・妻通勤)

4-3 建設時の在宅ワーク経験と想定

(1) 8割近い家では在宅ワークは想定外

家づくりの際に在宅ワークやPC置き場を想定していたかの質問で、引渡年別に整理を2019年までは8割近くが在宅ワークを想定していなかったことがわかりました。直近の2020年度では在宅ワーク経験者が22%に倍増しています。

(2) 在宅ワークの家としての満足度は、PC置場を想定したか否かがポイント

在宅ワークの家としての満足度は在宅ワーク経験者・想定者は大変満足する割合が高く、家づくり段階での想定が満足度に関わることがわかります。ただし、在宅ワークを想定していなくてもPC置場を想定していた家も同様に約9割が満足に感じていることから、PC作業ができる環境を整えることが重要なようです。

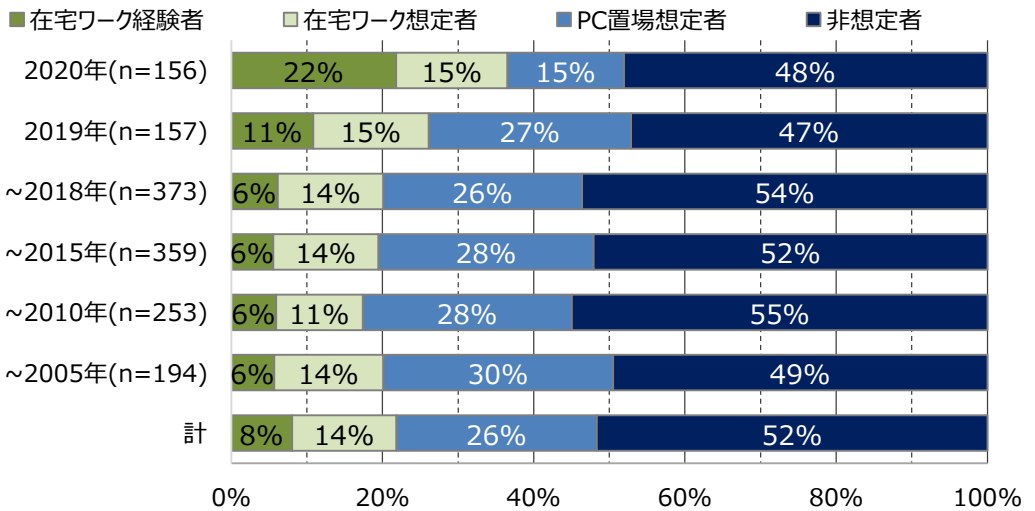
(3) 勉強の場所や書斎を作った家では、そこでの在宅ワーク率が高くなる

NESTコーナー(※1)やBLANK(※2)などの子どもの勉強スペースや、LDや個室の書斎コーナーがある家では、ダイニングでの在宅ワーク率がない家に比べて高く、その場所が活用されていると思われます。

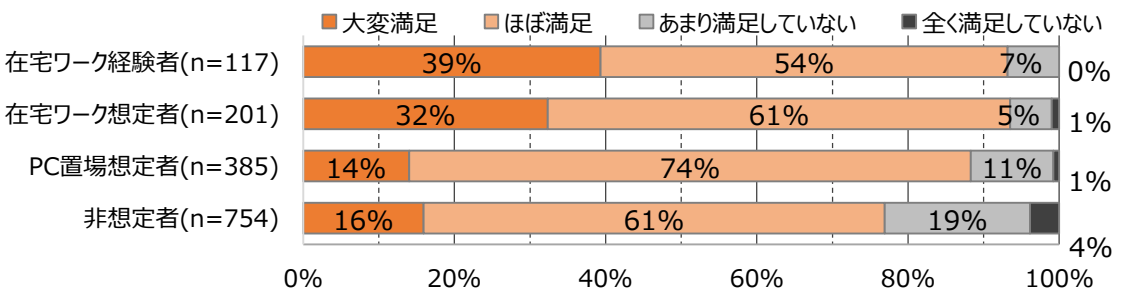
※1:LDに作る子どもの勉強用のデスクカウンター

※2:ライフステージに合わせて子どもの遊び場や親の趣味部屋等に使うキッチン横の続き小部屋

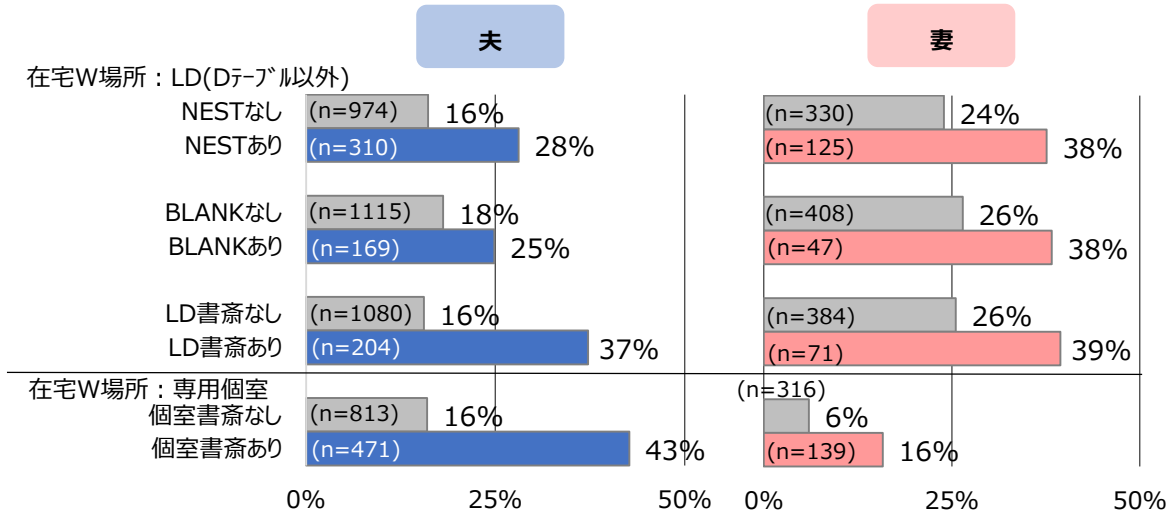
■在宅ワークやPC置場の想定



■在宅ワークやPC置場の想定別 在宅ワークする家としての満足度



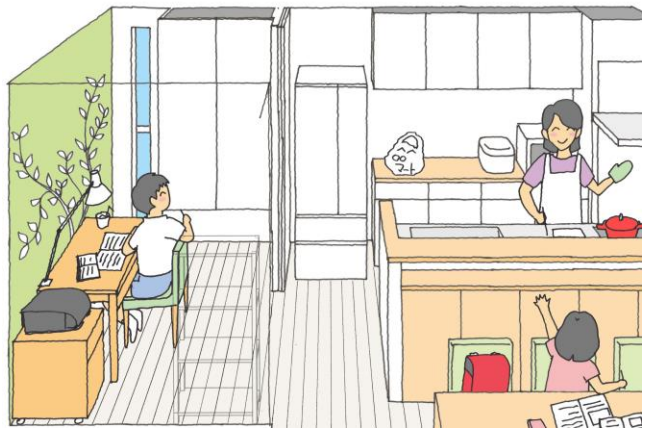
■ 勉強場所や書斎の有無による在宅ワーク場所の比率



■ 子どもの勉強場所や書斎の提案例



+NEST:キッチンから目の届く子どもの勉強場所



BLANK:DK隣接の小部屋を自由に活用



書斎:居場所としての独立の部屋、あるいは付属室を特に二世帯住宅での居場所として提案



4-4 在宅ワークで使うもの・購入したもの

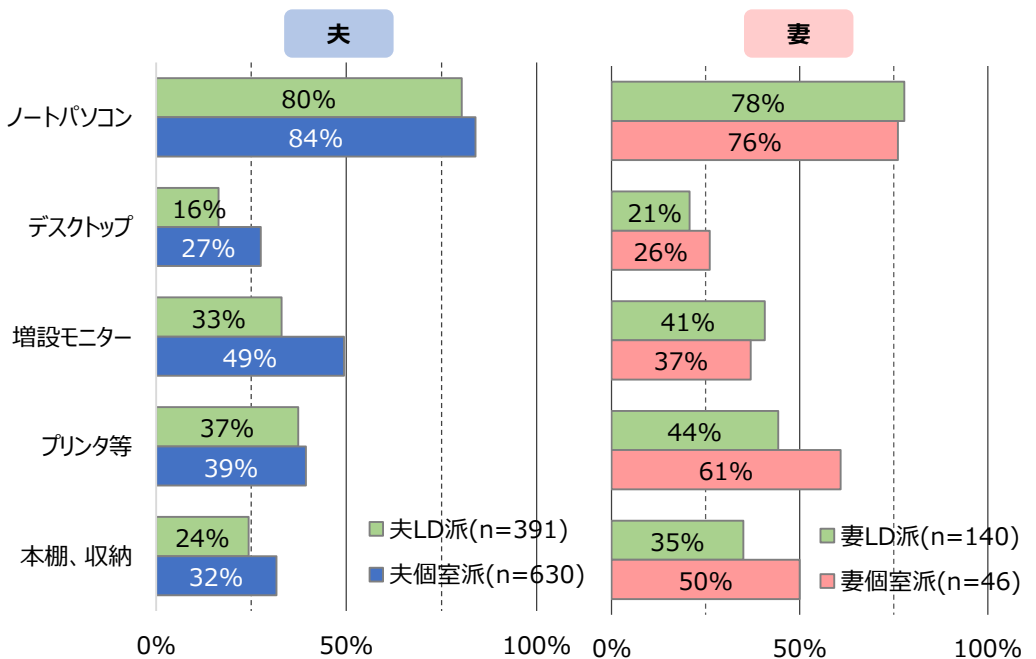
(1) ノートPC+増設モニターでペーパーレス化

在宅ワーク時に使用するものについては、LD・個室の場所に関わらずノートパソコンが夫妻・LD派個室派共通して約8割と最も多く、増設モニターの使用は夫の個室派では約半数に達しています。また、プリンタや本棚・収納の使用率をみると、増設モニターと同等か下回る結果になっておりペーパーレス化が進んでいると考えられます。

(2) 新規購入はディスプレイモニター、椅子、机、妻は運動グッズ

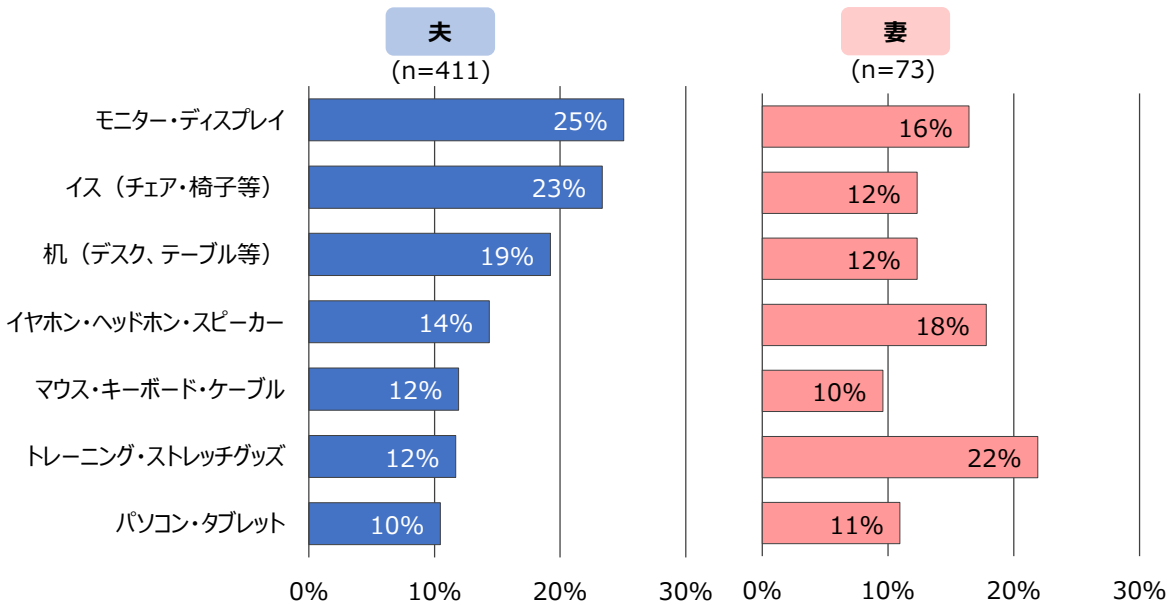
在宅ワークのために購入したものでは、PC用のディスプレイモニター、椅子、机など在宅ワーク環境を整えるアイテムが多く、特に妻ではトレーニング・ストレッチグッズといった在宅時間の増加による運動不足解消のためのアイテムが一位でした。そのほかワークスペースの改善したいことの自由回答から、スタンディングデスク、Wi-Fiルーターの増強やメッシュWiFi化、照明やWeb会議の背景に関することや、収納、冷蔵庫など、在宅ワークの環境を整備するためのアイテムが挙げられました。

■在宅ワークで使うもの



■在宅ワークをきっかけに購入したもの：購入品ある人

※「在宅ワークをきっかけに購入したものがある」回答者限定



■在宅ワークスペースの改善点：居住者の声

机・椅子・モニター

夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

会社と違って机椅子がチープなこともあり疲れる。(個室派夫・妻非就業)

古いダイニングチェアを使っているので、オフィスチェアを買いたい。(LD派夫・妻LDで在宅)

部屋が小さいためにエアコンが効きすぎて温度調節が難しい。また、作業部屋としている書斎は長時間過ごすことを想定していないだったのでちょっと狭く、座ったまま背伸びができる程度の余裕を持たせても良かったと思う。欲を言えば今はやりのスタンディングデスクが余裕をもって入れられれば・・・。(個室派夫・妻通勤)

ノートPCの(サブ)モニタを同時におけるスペースが欲しい。宅内Wifiを安定させたい。1F2F移動で回線が切れる。(個室派夫・妻通勤)

照明・背景

Web会議の際に逆光となることが多く画面がどうしても暗くなることが多いので不満。(LD派妻・夫LDで在宅)

仕事をするには部屋の照明が少し暗い。(個室派夫・妻通勤)

NESTを作れば良かったと後悔しており、何か方法がないかと思ったりします。また会議の際に壁が白なのがつまらなく、アクセントクロスにしたいなと思います。ただ、そのまゝに出て休憩するとき、作って良かったと心から思います。(LD派妻・夫通勤)

収納・設備

子どもの勉強スペースと一緒にしてしまうのものが混在しやすくなる。机の下に収納できるスペースを作りたいがなかなか良い案が浮かばない。(LD派妻・夫個室で在宅)

会個室で集中できる環境は気に入っている。冷蔵庫など飲み物を取りにリビングに降りると家族に話しかけられそのまま時間が過ぎることがあるので、冷蔵庫も備えたい。(個室派夫・妻非就業)

4-5 在宅ワーク場所での行為

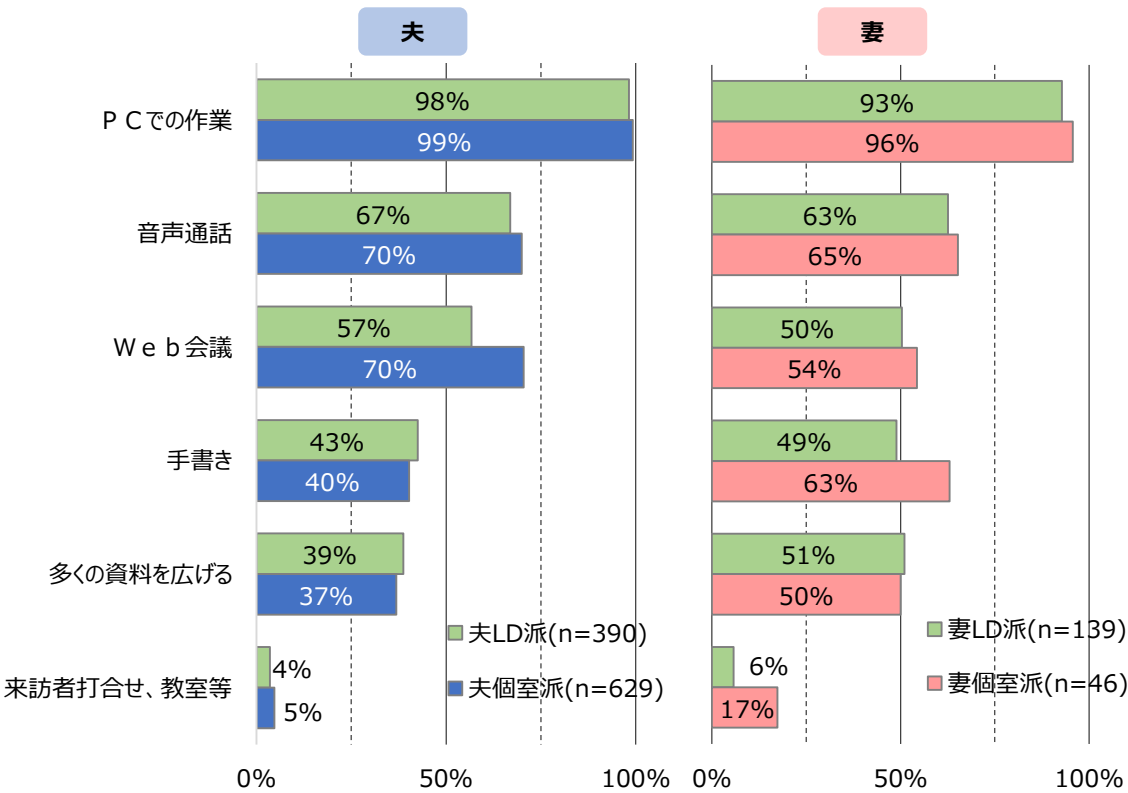
(1) PC作業が基本で、通話やWeb会議も半数を超える

在宅ワーク場所での行為については、PC作業が最も多くほぼ全員がしていました。次いで音声通話、Web会議が多いことから、全体としてはPC作業と共に発声しやすい環境が求められていると思われます。また、夫の方が妻に比べて手書き・多くの資料を広げる機会が少なく、ペーパーレス化が進行していると言えそうです。

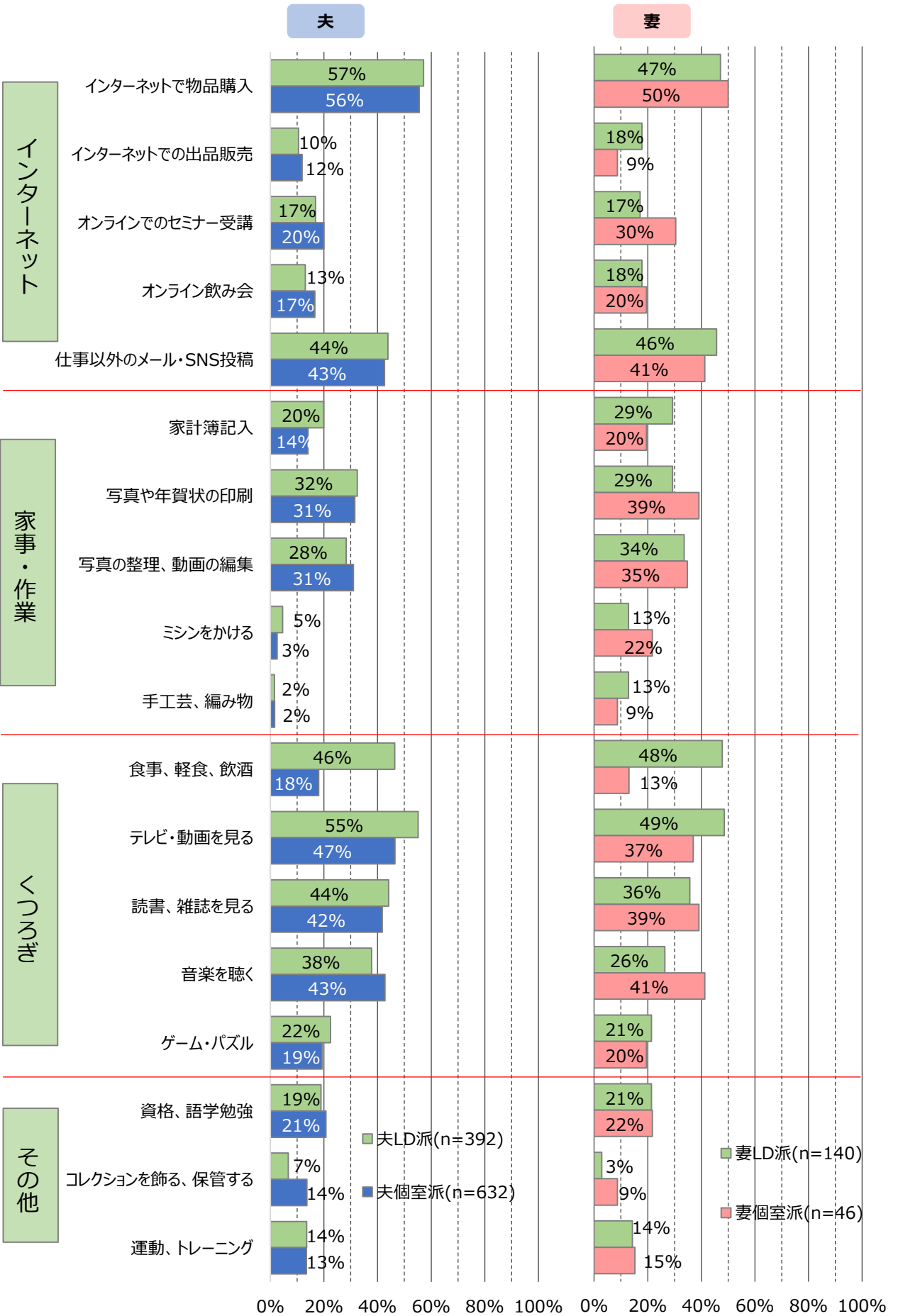
(2) 在宅ワーク場所でPCを活用し仕事以外の行為も多く行われる

在宅ワーク場所で仕事以外にする行為についてはインターネットでの物品購入が最も多く、仕事と同様にPC利用スペースとして使われることが多いようです。場所別に差があった項目は食事・軽食・飲酒で、個室派はLD派に比べて少ないですが夫で18%、妻で13%いました。オンライン飲み会については、LD派よりも個室派の方が多く夫で17%、妻で20%いました。

■在宅ワークの場所で行う仕事の行為：本人



■在宅ワークの場所で行う仕事以外の行為：本人

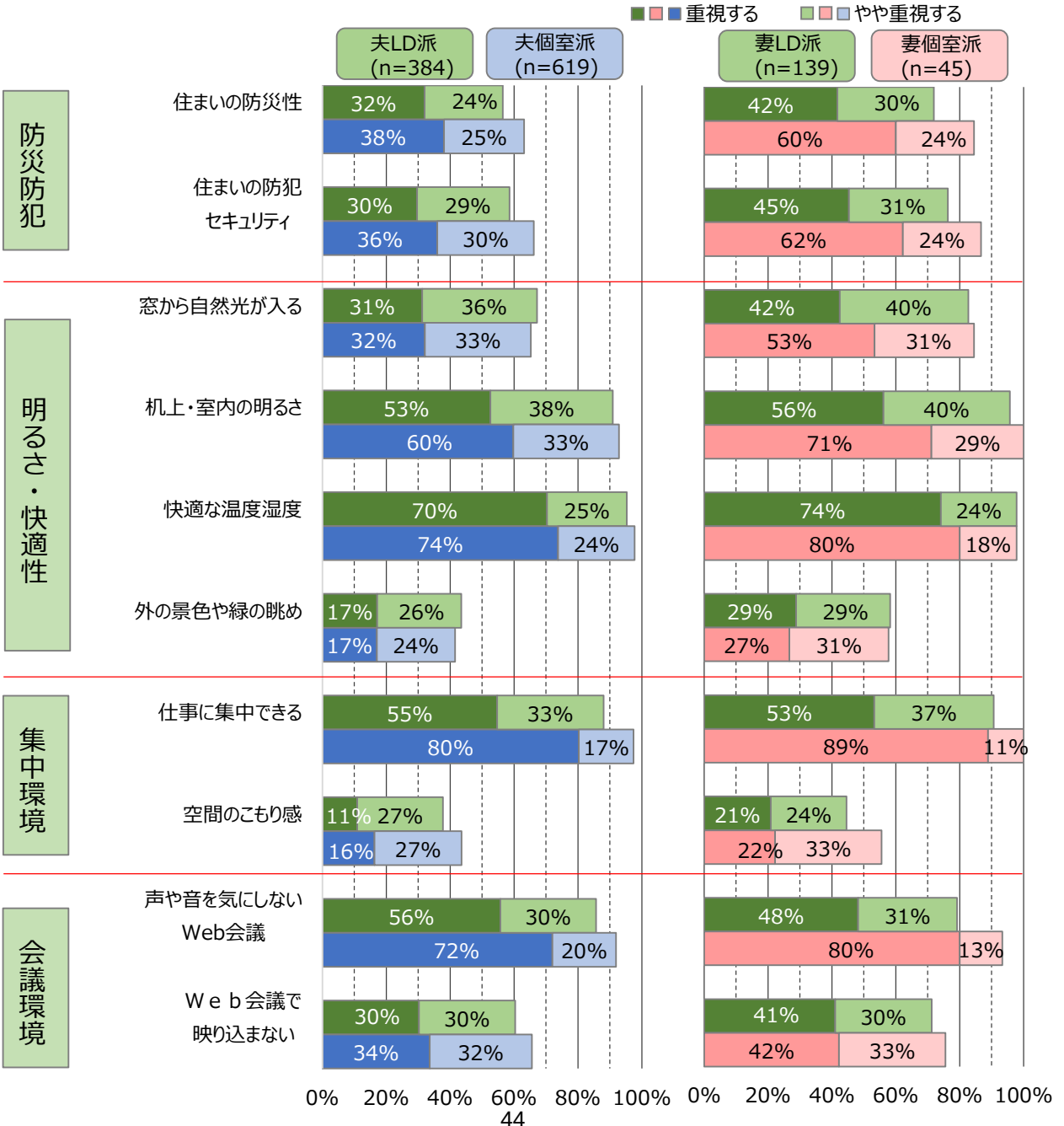


4-6 在宅ワークスペースの課題

(1) 夫はWeb会議を、妻は自然光や防犯を重視

在宅ワークの環境において重視されている点として、夫妻・在宅ワーク場所別に関わらず全体の傾向は似ており、室内の明るさや快適な温湿度環境、仕事に集中できる環境、が多く、全体に妻の方が重視する傾向がありますが、声や音を気にしないWeb会議については夫LD派の方が妻LD派よりが多かったのが特徴的です。妻のほうの方が夫よりも在宅時の防災性やセキュリティをより重視し、個室派のほうがLD派よりも重視する傾向にありました。個室派はLD派より仕事に集中できる、声や音を気にしないWeb会議などの、集中環境や会議環境を重視する傾向があり、こもって集中すると目が届かない防犯を重視する傾向も特に妻で強くなっています。

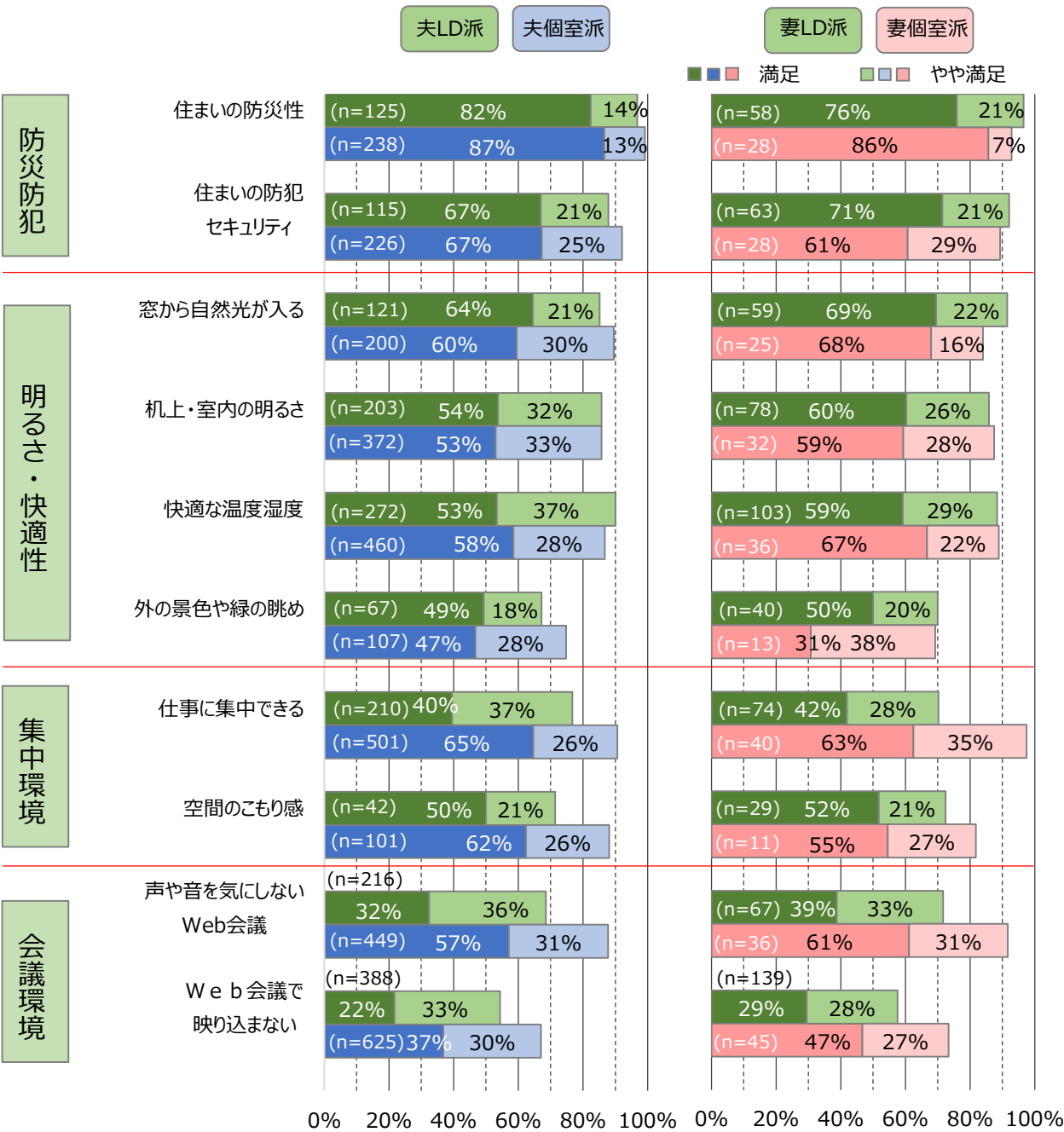
■在宅ワークの環境として重視すること：本人



(2) 重視者の満足度が低いWeb会議関連が課題

在宅ワークにおける重視項目について、それぞれ「重視する」と回答した方に限定して、各項目の満足度を示しました。「住まいの防災性」については重視している方の「満足」の割合が最も多く、ヘーベルハウスの特徴でもある防災性の高さが満足度につながっていたようです。重視する方が多いのに対し「満足」が低かった項目としては、妻個室派の「外の景色や緑の眺め」や、夫妻LD派の「声や音を気にしないWeb会議」「Web会議で映り込まない」が多く、これらは在宅ワークスペースを計画する際によく考慮すべき点だと考えられます。

■在宅ワークの環境として「重視する」方限定の満足度：本人



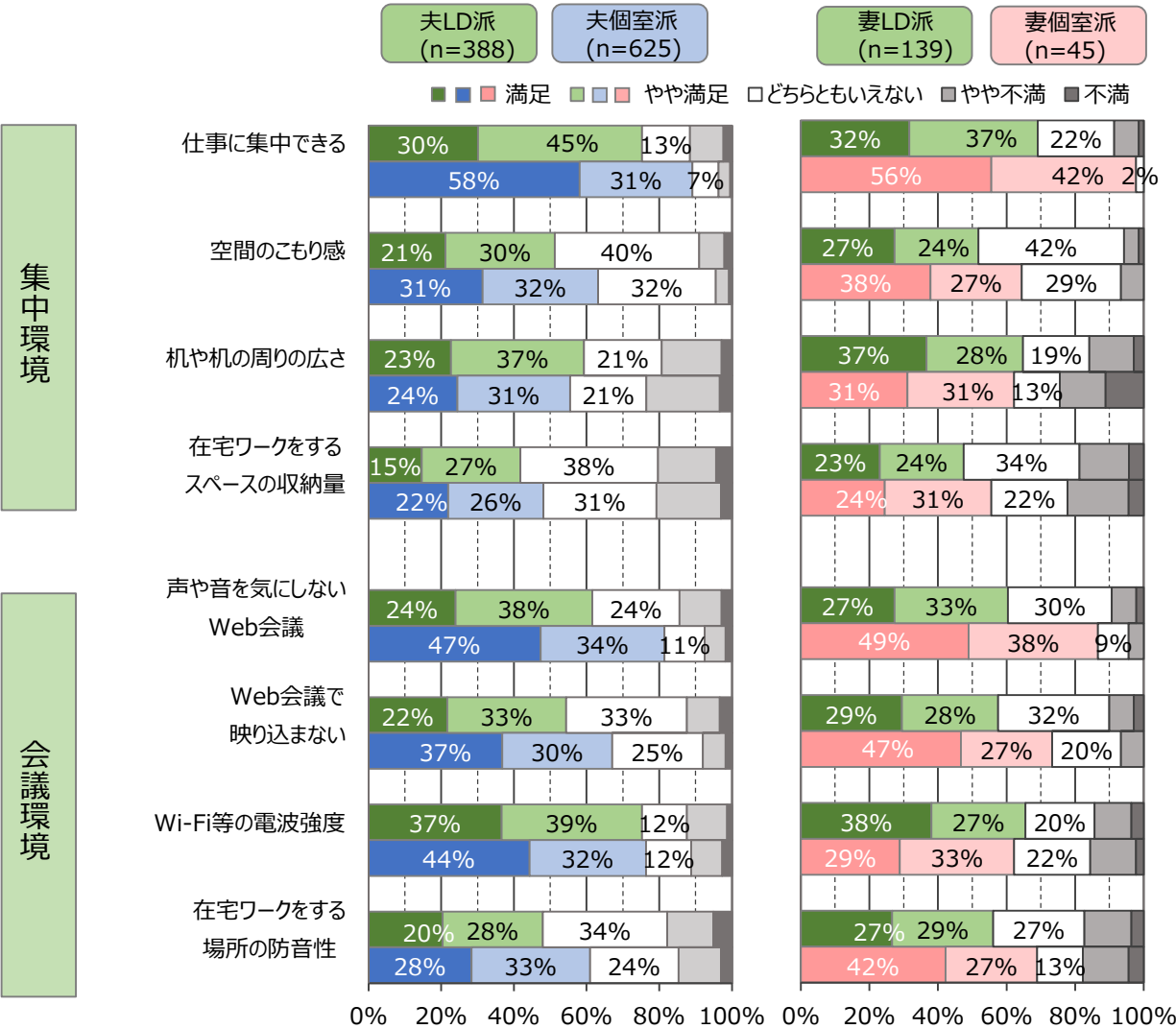
(3) 全体に満足度は高いが、不満が多いのは収納とWeb会議関連

前項に続き、重視度の回答内容で限定せず、集中環境と会議環境の満足度について、各項目の満足度をグラフ化しました。中には重視度を聞いていない項目も含まれます。重視する、という回答限定の集計に対し、全体に評価が低くなる傾向が見られますが、不満側の回答は各項目とも最大でも2割程度です。

集中環境では重視度を訊ねていない広さや収納量の満足度がLD、個室に共通して低めです。ペーパーレス化が進行している夫の在宅ワークではそれほど多くの資料を収納する必要はないはずですが、収納や棚が全くなく机のみだと文房具類の散らかりが気になるケースがあることと、4-5で触れた仕事以外の行為に収納が必要とされている場合があるのではないかと思います。

会議環境では声や音を気にしないWeb会議の満足度は特に個室では高いものの、映り込みや防音性といった観点では満足度が下がり、今後の課題と言えます。

■在宅ワークの際の満足度：本人・重視度限定なし



第5章

在宅ワークのメリット・デメリット

5-1 在宅ワーク本人のメリット

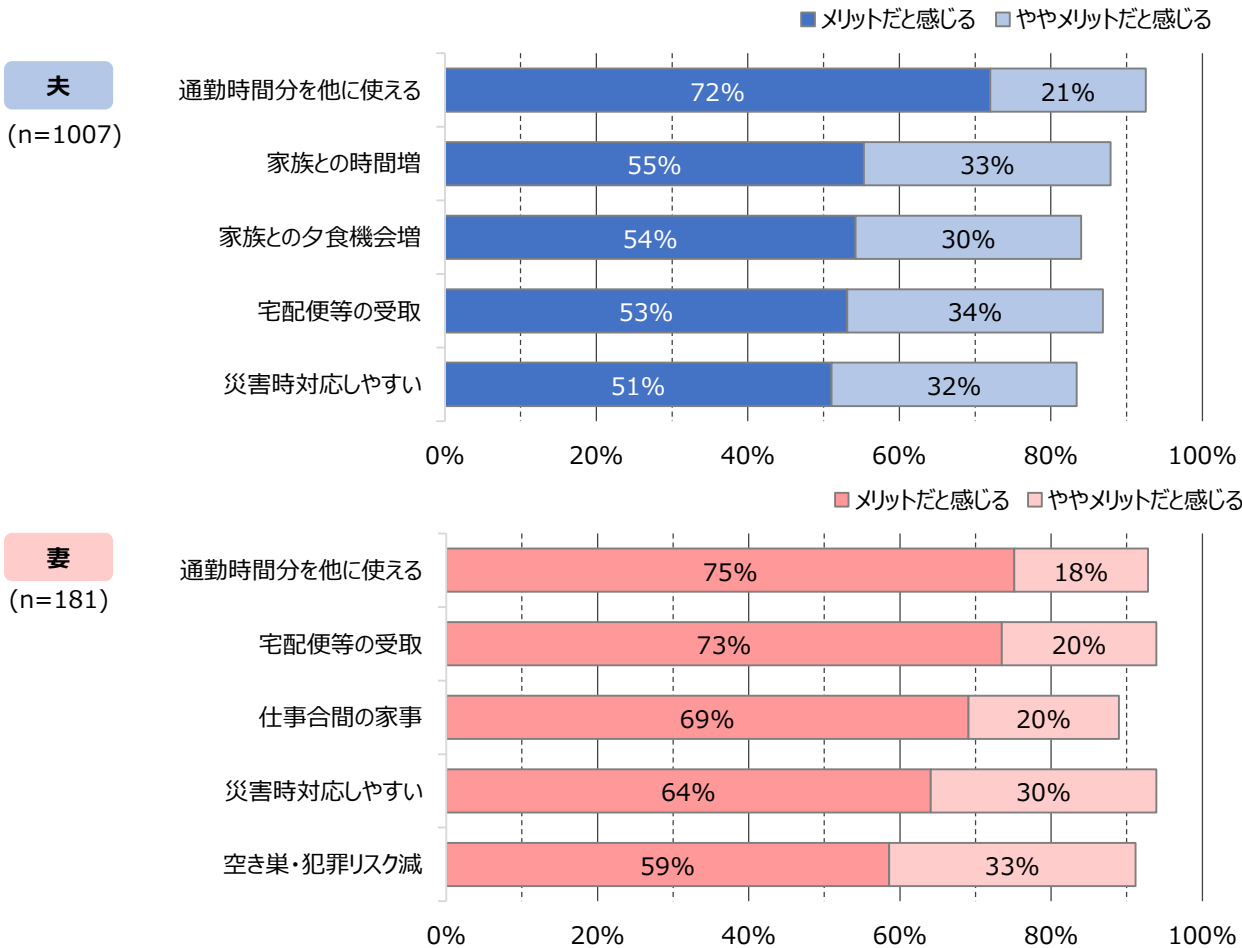
(1) 家族との時間増を挙げる夫、仕事合間の家事を挙げる妻

在宅ワーク時のメリットについて聞くと、上位5項目は通勤時間の活用、宅配便の受け取り、災害時の対応が夫妻共通で挙げられ、夫は家族時間の増加・家族との夕食機会の増加といった家族関連の項目が、妻は仕事合間の家事や空き巣・犯罪リスク減といった自宅での利便性・安全性に関する項目がメリットとして上位に挙げられていました。

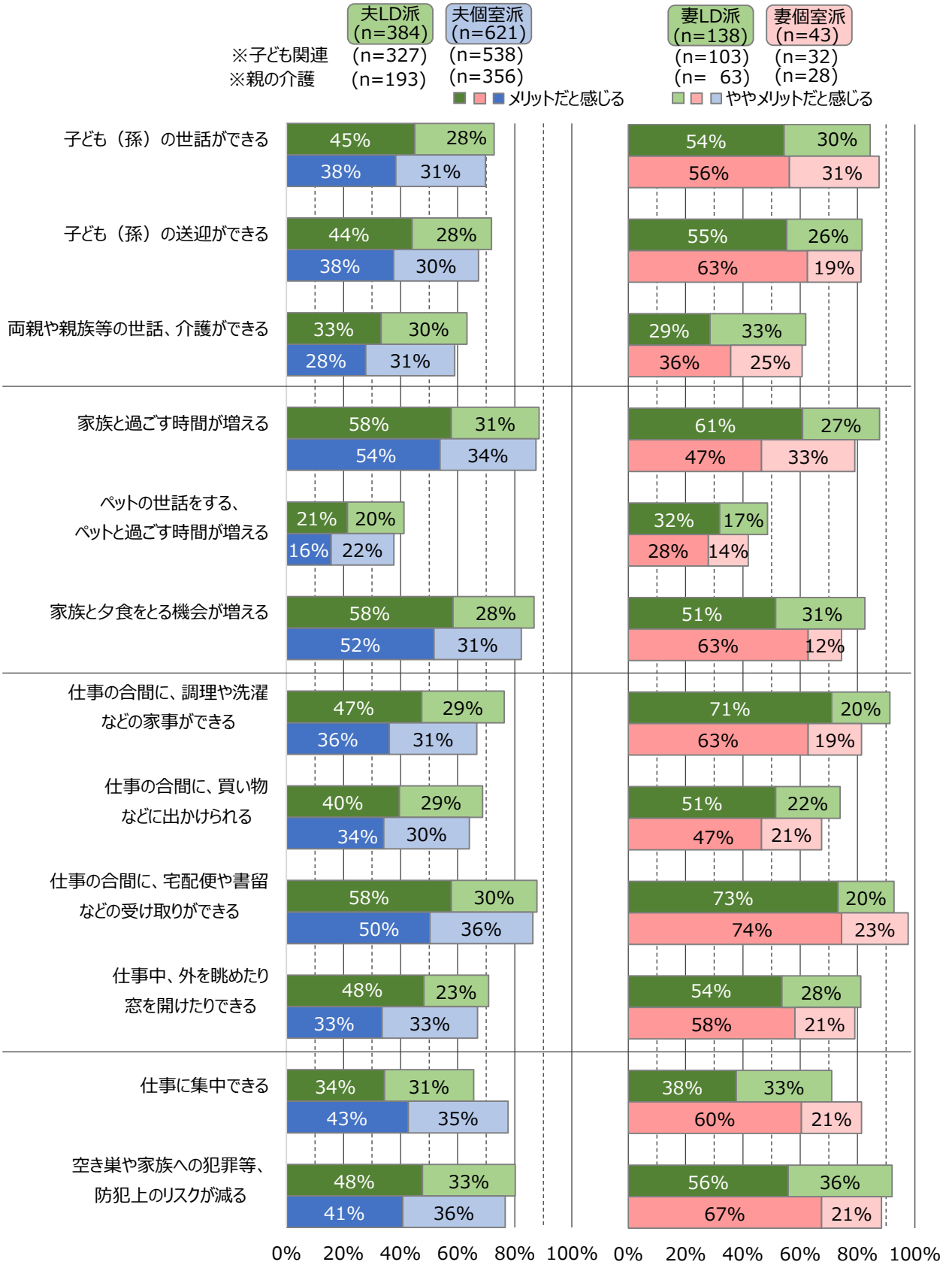
(2) LD派は家事並行・個室派は仕事に集中が多い傾向

全体を通して夫ではLD派の方が個室派に比べて在宅ワークメリットをより高く感じる傾向がみられました。夫妻に共通して在宅ワーク場所別に差が出た項目として、LD派は個室派に比べて仕事合間の調理・洗濯等の家事を高く挙げており、LDでの在宅ワークは合間に家事ができるメリットをより感じやすいと言えます。また、個室派はLD派に比べて「仕事に集中できる」ことをメリットとしてより高く挙げており、個室での在宅ワークの長所と思われます。

■在宅ワークのメリット：本人・夫妻別上位5項目



■在宅ワークのメリット：本人・夫妻×場所別

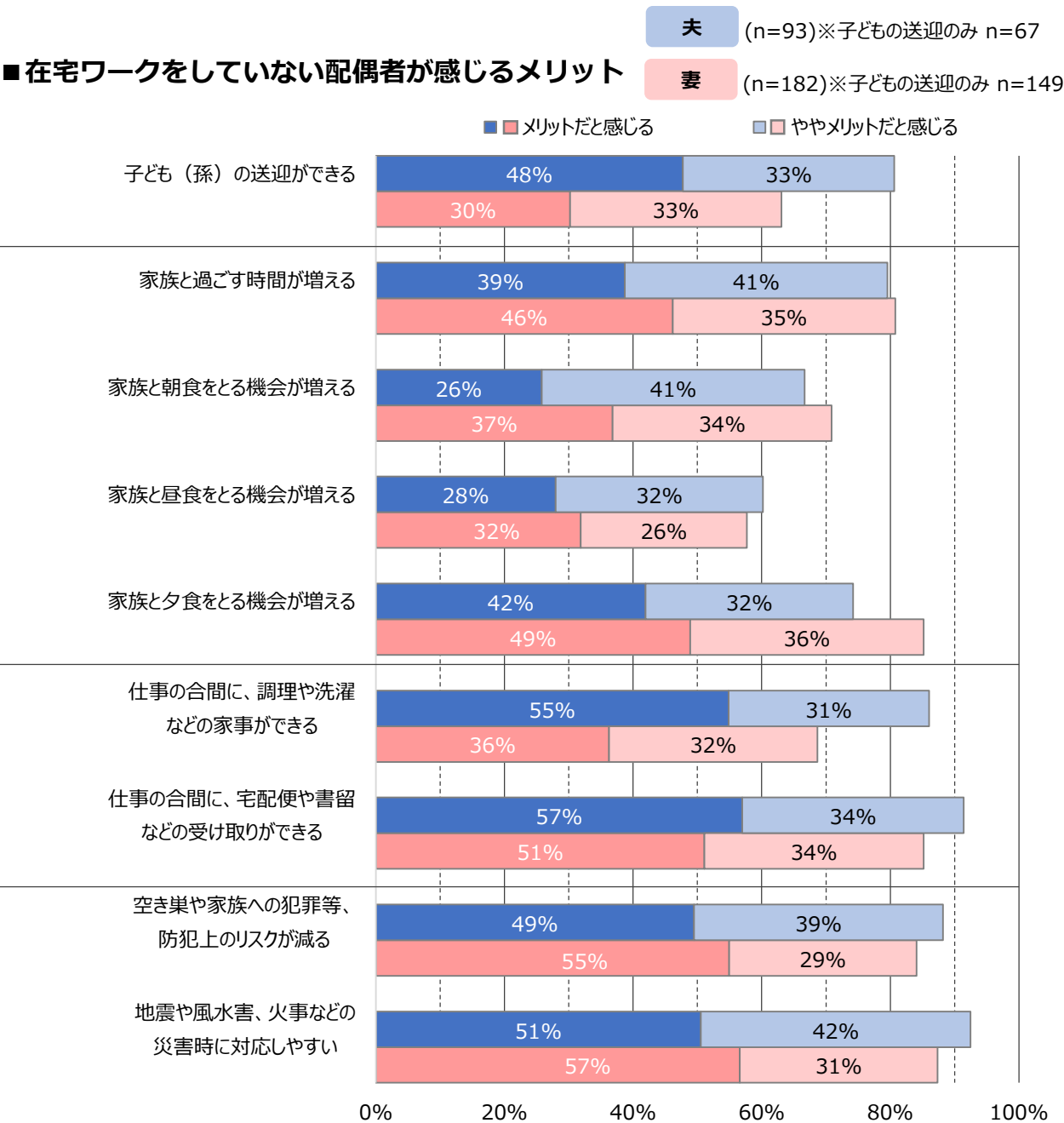


5-2 在宅ワークしていない配偶者のメリット

(1)在宅ワークしていない配偶者にもメリットがある

在宅ワークしていない配偶者に、在宅ワークにどのようなメリットを感じるか聞きました。「家族と過ごす時間が増える」「家族と朝食をとる機会が増える」といった家族関係のメリットや、「仕事の合間に、宅配便や書留などの受け取りができる」「空き巣や家族への犯罪等、防犯上のリスクが減る」といった、配偶者の在宅によって自分が外出しやすくなるメリットが夫妻に共通して感じられていました。

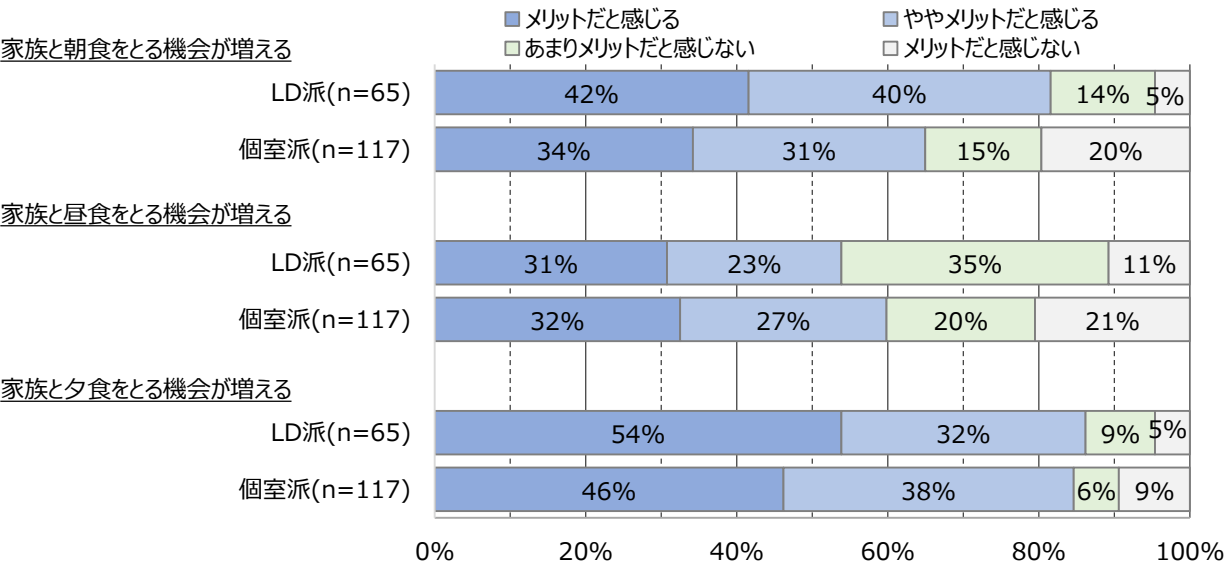
夫妻間で差があった項目は「子どもの送迎」「仕事の合間に、調理や洗濯などの家事ができる」で、夫がよりメリットに感じており、在宅でない夫が妻に対して子の送迎や仕事合間の家事を期待してしまうことがうかがえます。



(2)一緒に食事をする機会が増えるのをメリットと感じる妻は夫LD派に多い

在宅ワークでない妻を感じるメリットでは、家族との食事機会が増えることは朝食と夕食で特にメリットを感じやすく、夫のLD・個室での在宅ワーク場所別に分析すると、夫LD派の場合には朝食の機会により多い傾向があります。個室派に比べてLD派の夫の方が家事をする傾向にあるので、夫による朝食の片付け等をメリットに感じている可能性があります。昼食は半分程度と低くなっており、妻の在宅状況による差があるか分析しましたが、あまり値は変わりませんでした。妻が通勤の場合は一緒に昼食は取れないこと、非就業の場合は昼食準備の負荷が増えること等により、こうした回答となったと思われます。

■夫の家族との食事機会増を在宅ワークしていない妻はメリットと感じるか

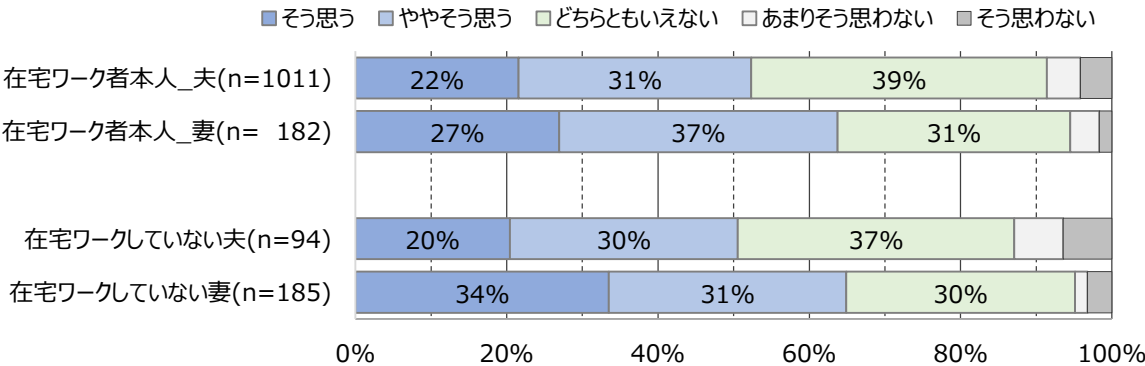


(3) 仕事している姿を子どもに見せることは共通していい評価

親の仕事の様子を子どもに見せることについての質問では、在宅ワーク者本人、在宅ワークしていない配偶者共に好意的であり、「そう思う」については夫よりも妻のほうがより高く、また妻については在宅ワーク者本人よりも同居家族側の方がより高い傾向がありました。普段は通勤していた親が自宅で仕事をすることで仕事を身近に感じたり、仕事の内容が家庭での話題の一つになったりと、子育てに良い影響を与えることを親は期待しているようです。

■親の仕事の様子を子どもに見せることは良いことであるか

親が仕事している姿を子どもが見るのはいいことだ

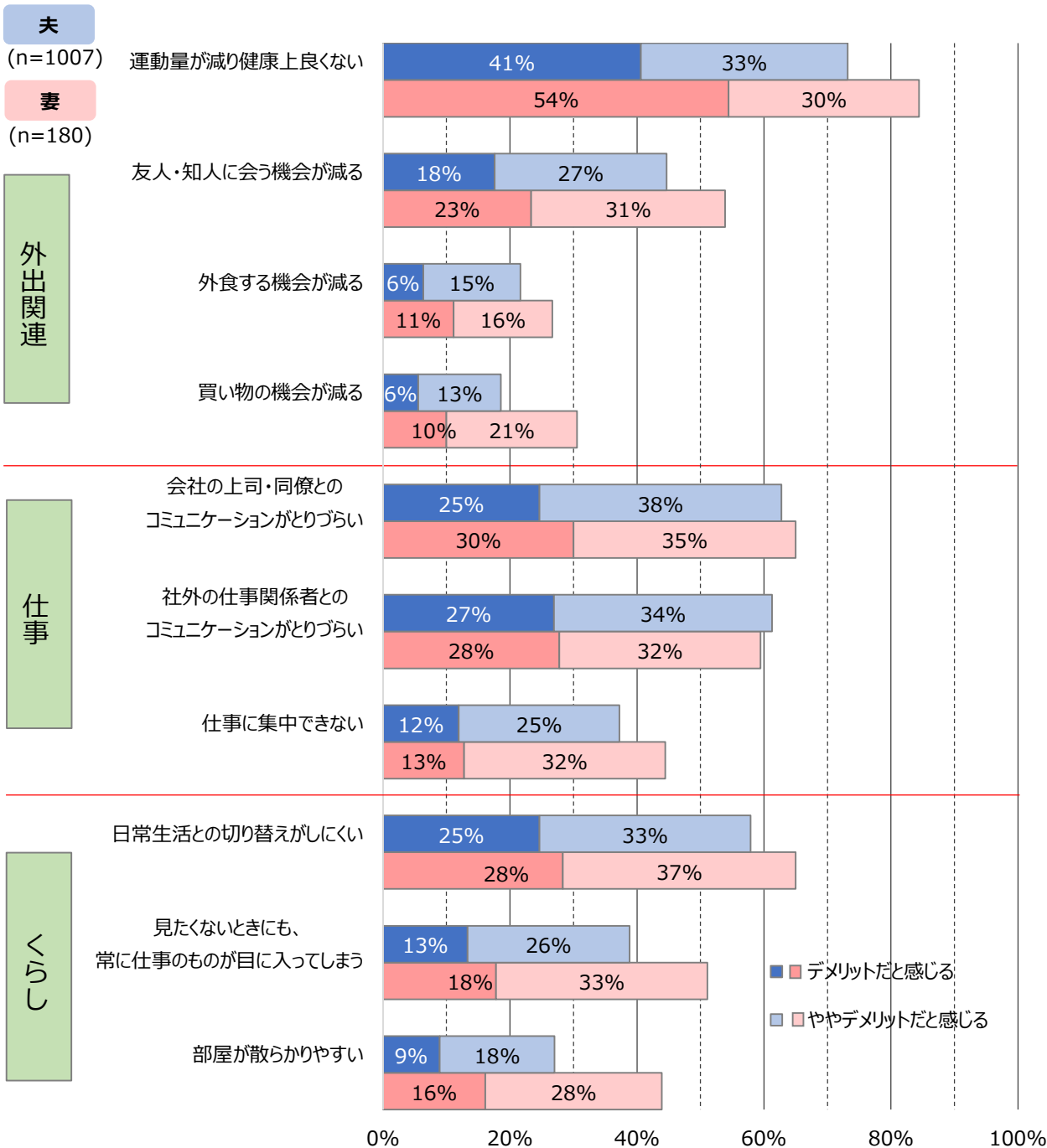


5-3 在宅ワークのデメリット

(1) 外出関連のデメリットが多い

在宅ワーク者本人のデメリットについて聞くと、夫妻共通して運動量減などの外出関連、社内外でのコミュニケーション減などの仕事関連、次いで日常生活との切り替えが難しいことなどの暮らし関連の項目が挙げられました。外出せずとも運動や気分転換ができるなど、住宅により多くの要素が求められるようになってきたと言えるでしょう。暮らし関連の項目については、妻が夫よりデメリットを多く感じる傾向が見られます。

■在宅ワークのデメリット：本人



夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

コラム：在宅ワークの合間の家事：回答者の声

仕事の合間の家事について、その効果と実態がよく表れているコメントを集めてみました。昼休みの活用と思われるもの、合間に行われる短時間のものなどがあり、仕事とのメリハリがつかないという意見もありますが、総じてメリットが多いようです。家族全体の関係もよくわかります。

仕事の時間と家事の時間を自分の好きなようにできる点が良いです。(LD派夫・妻通勤)

通勤時は遅くにしていた家事を昼に終わらせられる(LD派妻・夫通勤)

仕事の合間に家事ができるので週末がゆっくり過ごせるようになった(LD派夫・妻通勤)

良い点としては、仕事の合間に布団を干すなどの家事ができることですが、逆に言うと家事と仕事のメリハリを付けにくいのは悪い点だと思う。(LD派妻・夫通勤)

子どもの帰宅時に在宅でき、子どもの表情が見れるのは子育ての上で非常にメリット。機嫌の良し悪しが把握できる。合間合間で少しずつ家事をこなせる点也非常に効率的。(個室派妻・夫非就業)

在宅勤務でも 会議の時間以外は 融通がきくので 平日の空いてる時間に スーパーに車を運転してもらえて 自粛期間中は かなり助かった。(夫は)ダイニングのテーブルで仕事をしているので 会議と夕飯の時間が被った時は 娘の家の婿の書斎を借りることができ、助かっている。5歳と2歳の子をもつ娘は 我が家で過ごすことも多いが テレビ会議中は 来られず ストレスになっていたような気がする。(二世帯、非就業母・父LD派)

コラム：仕事への集中について：回答者の声

一方で、個室を中心に仕事に集中しやすい場所を求めているコメントも多くあります。書斎の活用例が多く、コンパクトな書斎でも満足している様子が見えがえします。LDで普段子どもと一緒に在宅ワークを行い、Web会議時に子ども部屋を使用している方もいます。

自宅を建てる際、小さくて狭いながらも書斎を作りました。集中する環境としては抜群で、たいへん気に入っております。特に不満はありませんが、小さい冷蔵庫が欲しいです。(夫個室派・妻通勤)

個人専用の個室の書斎を作ったので仕事を妨げる外乱が少なく集中できる。机も広く、資料を見ながらPC操作が可能なので作業しやすい。不満は特になし。(夫個室派・妻非就業)

最初はたった2畳のスペースと思ったが、実際に仕事をするとうちょうどいい狭さで集中でき満足しています。壁紙を柄物にしてしまっただけで気が散るので無地の壁紙に変えたいと検討しています。(妻個室派・夫通勤)

個人的には自分専用の部屋で仕事ができているので、そこは良い。ただ、趣味のものなどがあり、気が散ることはあるので、1、2畳分ぐらいの囲まれたスペースがあれば集中できると思う。(夫個室派・妻通勤)

(普段はLDでやっているが) 小さくても子ども部屋等の個室がそれなりに役に立つ。web会議等では、家族の姿、生活音を拾わなくて済む。(LDでは) 子どもたちが宿題をしている傍らで、仕事していると一人で家にいてやるよりも、「ちゃんと」やっている姿を見せるために集中してやっている気がする。(夫LD派・妻通勤)

5-4 在宅ワークへの配慮と困りごと

(1) 立入らない音出さないといった配慮を妻の8割以上が意識

在宅ワークしていない配偶者に、本人の在宅ワーク中またはWeb会議中に、立入らない、音を出さないといった配慮をしているかについて、対LD派、対個室派に分け若年層・熟年層別に集計しました。

対LD派では若年層・熟年層に共通して妻は夫に対し8割以上、逆に夫は在宅ワークしている妻に対し約7割が何らかの配慮をしています。

若年層の妻が夫にする配慮ではWeb会議関連が計56%に達し、この課題の解決がなされればLDでの在宅ワークが行える可能性が高まります。対個室派では配慮が「在宅ワーク時に立入らない」に集中し、生活動線外で個室を確保できれば同居家族のストレスが減らせそうです。

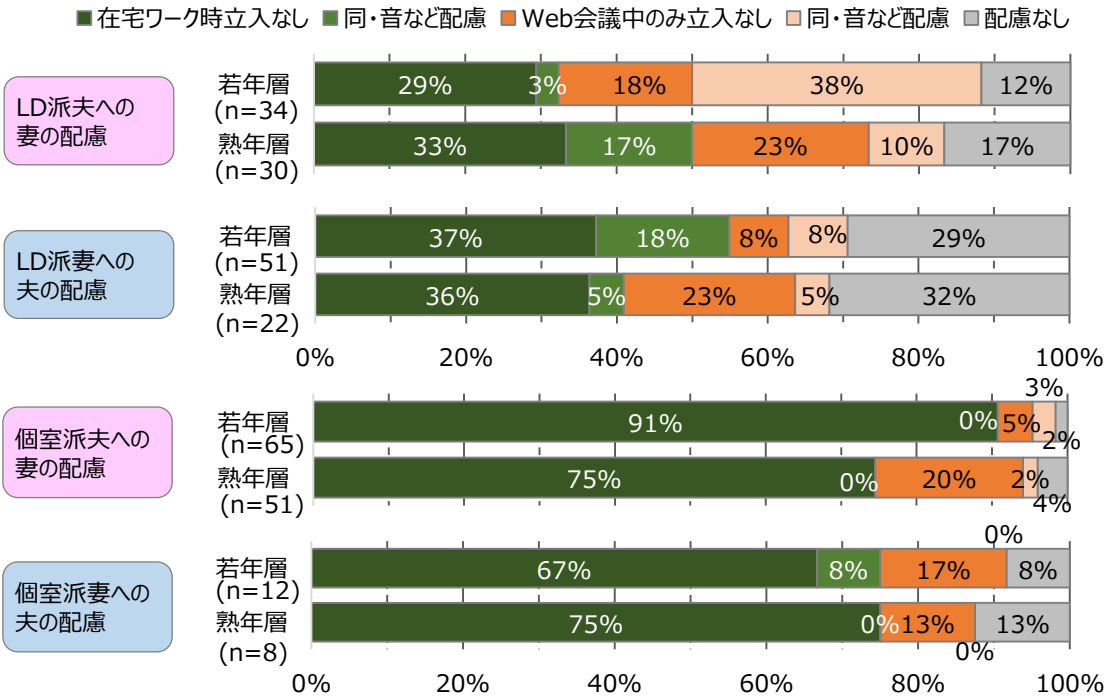
(2) 家事増加が妻の不満に

在宅ワーク配偶者の困りごとでは、全体に妻の困りごとが多く、「ゴミが増えた」「食料品の買物が増えた」が多く挙げられており、在宅時間や食事機会の増加が影響していると共に、これらの家事が妻に偏っている状況を表していると考えられます。

(3) LDでのテレビ視聴に加え、普段の生活全体が在宅ワークで乱される

配偶者の困りごとをLD派・個室派に分けて分析してみると、「好きなテレビが自由に見れない」が夫妻共通してLD派で多く、LDでの日常生活に制約が生まれていると考えられます。夫の在宅ワークによる妻の困りごとに注目すると、「生活ペースの乱れ」「昼寝や趣味等したいことが自由にできない」「思うように家事が出来ない」は個室派でも多く挙げられます。これを在宅パターン別に分析すると非就業＝専業主婦の困りごとが最も多く、これまで夫の通勤を前提に築かれた生活ペースが変化していることのストレスが感じられます。次いで妻が通勤の場合に困りごとが多いのは、帰宅時に夫がLDで在宅ワークをしていることでストレスが生じているのかもしれませんが、妻本人も在宅ワークをしているW在宅ワークでは、こうしたストレスは8割前後が感じていません。

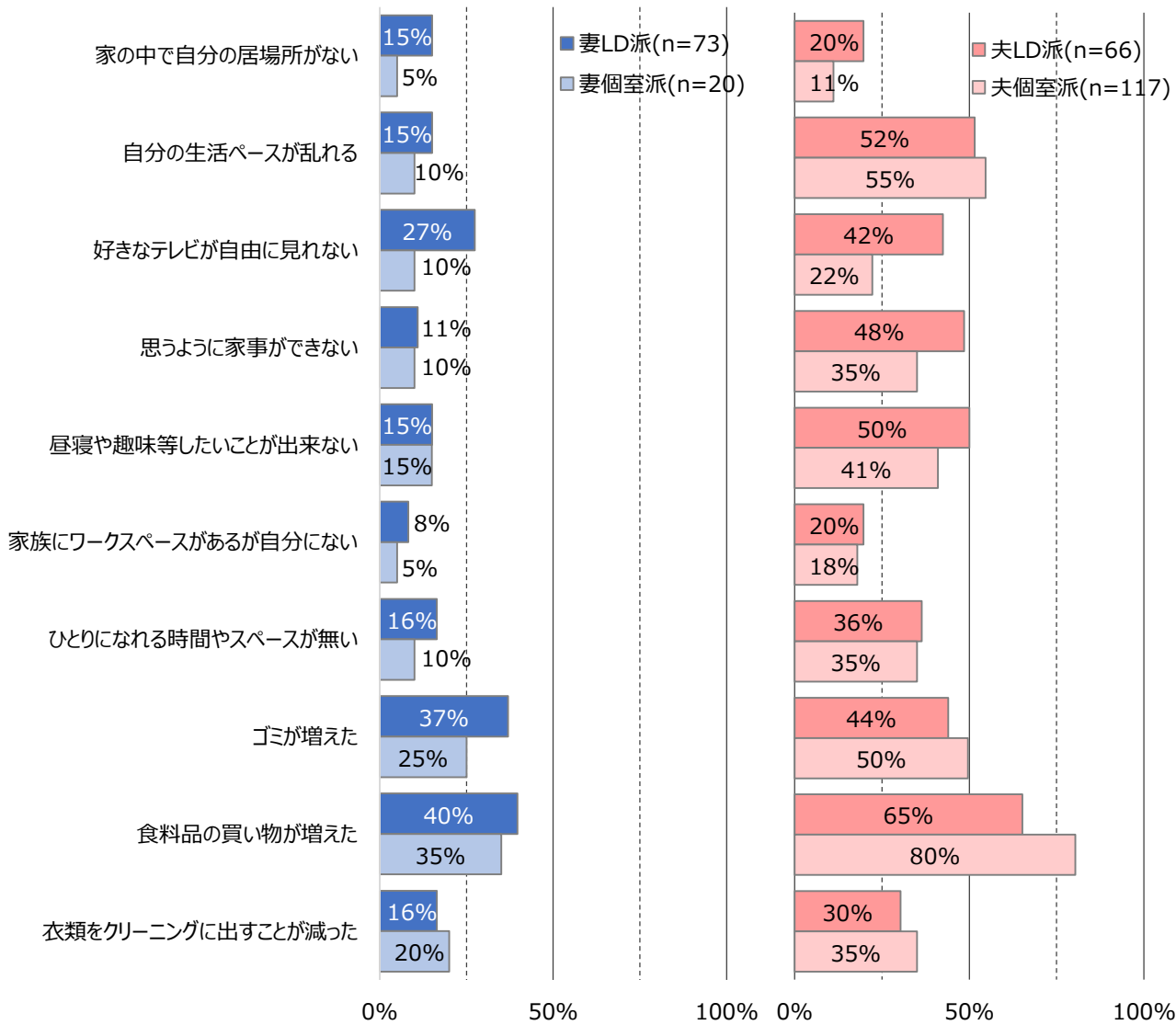
■ 本人の在宅ワークがLD派・個室派別 配偶者の配慮：配偶者回答



■ 配偶者の困りごと

夫の困りごと

妻の困りごと



■ 配偶者の困りごと（夫の在宅ワーク場所・妻の就業状況別）

妻の在宅パターン	通勤		在宅		非就業	
	LD	個室	LD	個室	LD	個室
夫の在宅ワーク場所						
n=	39	52	38	39	27	65
家の中で自分の居場所がない	23%	8%	13%	0%	15%	14%
自分の生活ペースが乱れる	51%	46%	26%	27%	52%	62%
好きなテレビが自由に見れない	41%	17%	24%	10%	44%	26%
思うように家事ができない	44%	29%	21%	21%	56%	40%
昼寝や趣味等したいことが出来ない	44%	29%	16%	21%	59%	51%
家族にワークスペースがあるが自分がない	21%	15%	11%	15%	19%	20%
ひとりになれる時間やスペースが無い	31%	23%	26%	21%	44%	45%
ゴミが増えた	44%	42%	55%	51%	44%	55%
食料品の買い物が増えた	64%	69%	79%	74%	67%	89%
衣類をクリーニングに出すことが減った	26%	31%	39%	33%	37%	38%

10pt差以下

15pt差以上

5-5 メリット認識の夫妻の差

(1) 家事育児・犯罪安全は妻が高く、家族との昼食のみ夫が高い

メリットについて夫妻で10pt以上差があった項目としては、空き巣等の犯罪リスク減、仕事合間の家事、子どもの世話・送迎、外の眺めや換気については妻の方がよりメリットに感じており、家族との昼食の機会増については、夫が妻に比べてよりメリットに感じていたようです。

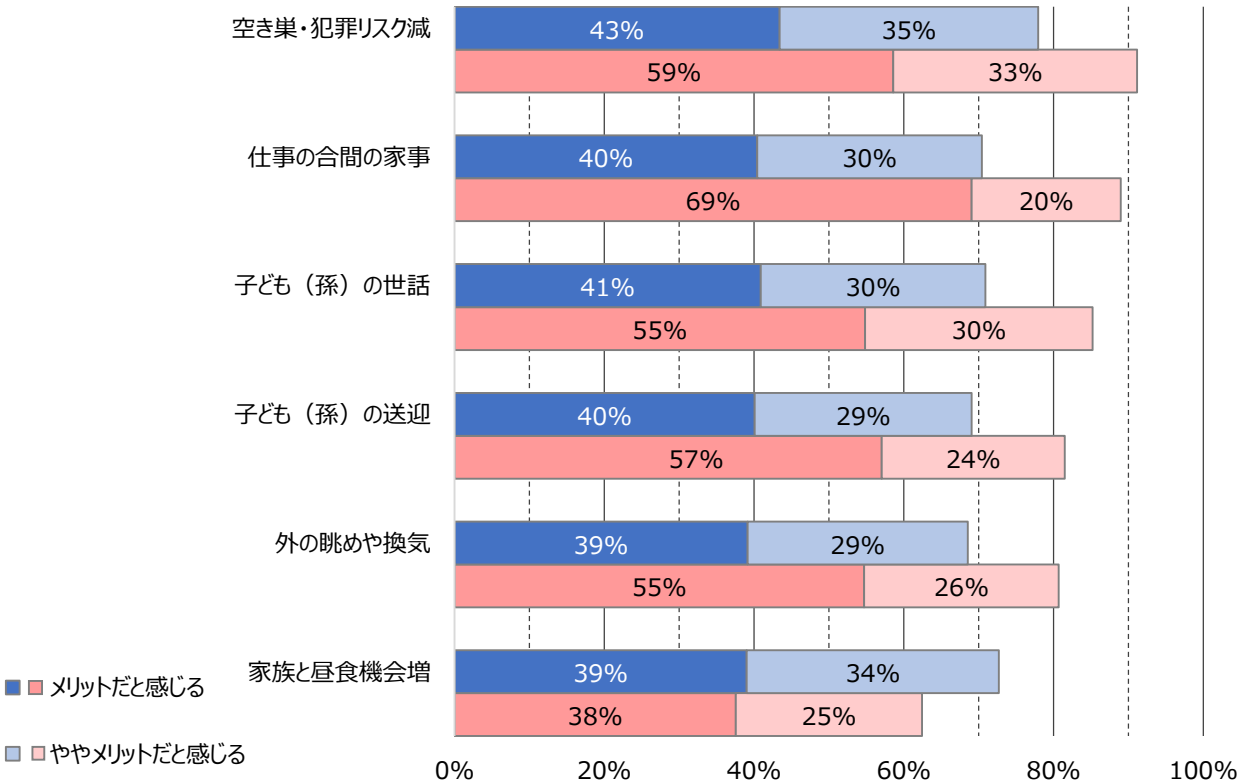
■在宅ワークのメリット・夫妻差10%以上の項目：本人

夫本人(n=1007)

※子ども関連のみ n=866

妻本人(n= 181)

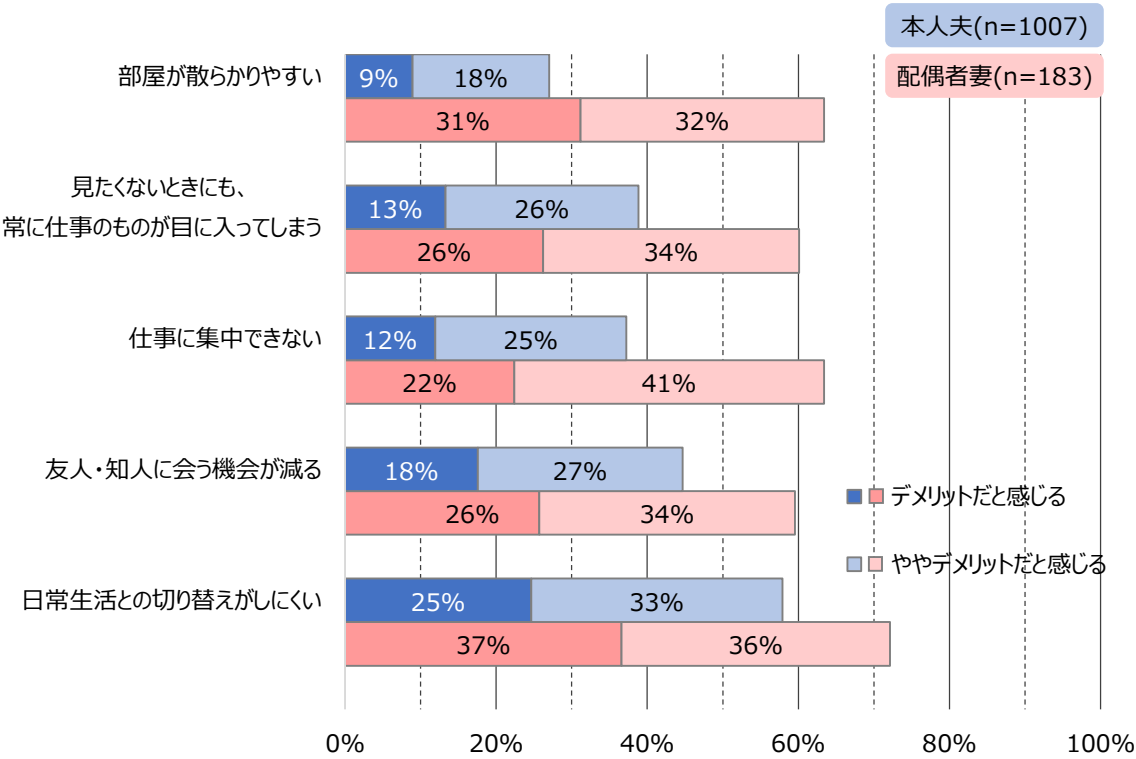
※子ども関連のみ n=135



(2)在宅ワークのモノの整頓が妻のストレス軽減のポイント

在宅ワークのデメリットについて、在宅ワーク者本人の夫と在宅ワークしていない配偶者妻の認識の差に着目し、差が大きいものを示します。夫本人に比べて、同居の妻は「部屋が散らかりやすい」「見たくないときにも、常に仕事の物が目に入ってしまう」を多く挙げるなど、今まで目にすることがなかった在宅ワークのモノが家庭内に入ってくることをデメリットと感じているようです。「仕事に集中できない」の回答も妻が多く、自分が在宅ワークの邪魔になっていないかといった気遣いの表れではないかと思います。外出機会の減少や、日常生活との切り替えについても本人以上に気に掛ける傾向があります。

■在宅ワークのデメリット・夫妻間の差があるもの：本人夫と配偶者妻



夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

コラム：在宅ワーク時の気分転換：回答者の声

在宅ワークでは、これまで明らかに分かれていた仕事と日常生活の場が一緒になってしまいます。切替えができない、というデメリットは5-3でも挙がりましたが、実際に在宅ワークしている方はどう感じているのでしょうか。

配偶者からは本人は気分転換しづらいのでは、という声がいくつかありましたが、意外なことに本人の声では在宅の方が気分転換しやすいという意見が多く、日常の家事を気分転換にうまく利用しています。例えば、下記の様な声があります。

家にいるので空いた時間に家事を少しでも進められたり、自分自身の気分転換が何かしらできるので精神的に安定する日が多い。ただうまく仕事とプライベートの切り替えをしないと切羽詰まる。(個室派妻・夫通勤)

気分転換になるからと私が仕事から帰ると入れ替わりで買い物に行ったり、夕食を毎日担当してくれるようになった。突然の雨にもベランダの洗濯物を取り込んでもらえる。(通勤妻・夫在宅)

また、家の周囲の環境の良さ、例えば緑が見えたり、外の風が取り入れられるということも気分転換には有効なようです。アウトドアスペースとして居場所になる空間がある場合は、昼間の在宅機会が増えると活躍する機会が増えるようです。また、メール対応などでアウトドアスペースに出て気分転換しながら仕事する、という方もおられました。

中庭に隣接していて気分転換ができるし、庭木も見えてリラックスして仕事できるので気に入っています。(LD派夫・妻在宅)

在宅しながら庭が見える位置にあり、気分転換になる。(LD派妻・夫通勤)

通勤時間がなくなったのは良いが、仕事を辞める区切りがつけづらい。家にこもる時間が長いので運動不足、気分転換がしづらい。そのまが大活躍している。(LD派夫・妻非就業)

職場と同じPC作業環境を再現しているため、不自由なく仕事ができている。また、気分転換にそのままで風を感じながらPC作業をすることもお気に入り。(個室派夫・妻非就業)



そのま(2Fベランダ)の例

第6章

夫の家事分担増加の可能性

6-1 在宅ワークで夫の家事が増加

(1) 若年層で6割強、熟年層でも5割強の夫の家事時間が増加

3-2で取り上げた在宅ワークによる時間と機会の増減において、夫の家事の時間、調理の機会が共に増加しているものの、妻よりも増加の度合いが低いことを取り上げました。そこで、夫の家事時間、調理機会がどのような場合に増加するのか分析します。長子が小学生以下(または子どものいない40代以下)の夫妻を若年層、長子が中学生以上(または子どもがいない50代以上)の夫妻を熟年層としてライフステージ別にみると、若年層の夫の方が熟年層の夫に比べて家事時間、調理機会共に増加しています。

(2) LD派の方が個室派より家事・調理機会ともに増加傾向が強い

さらにLD派・個室派の夫の在宅ワークの場所別でみると、若年層熟年層共に、個室派よりもLD派の方が増加の方が多いです。特に若年層の調理の機会について、この傾向が強く表れています。

(3) 共働きの場合は増加傾向が強い

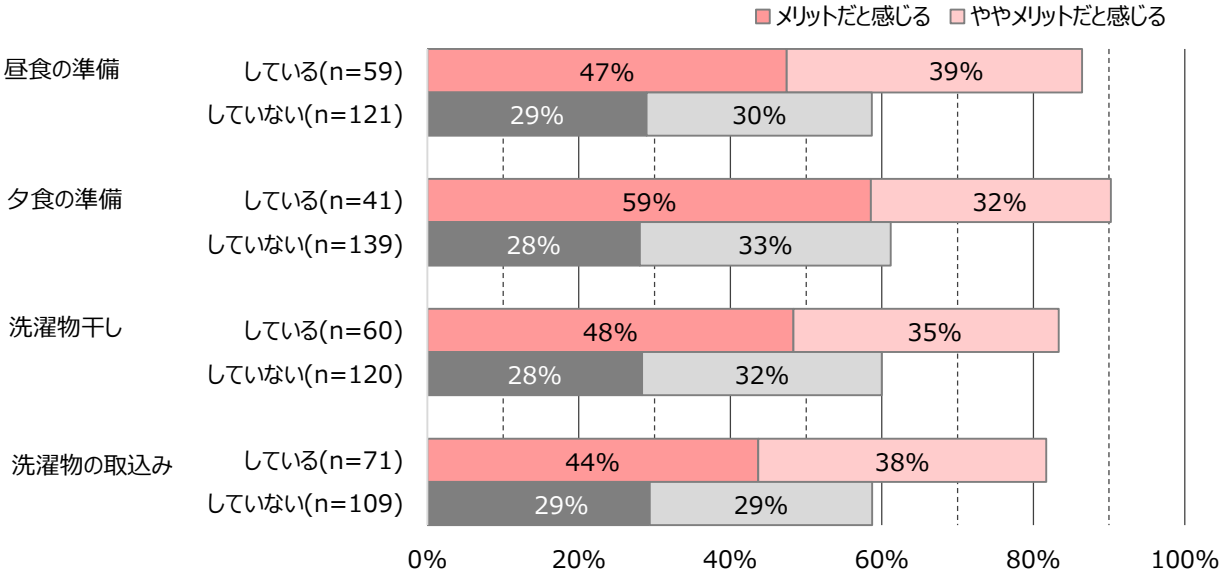
在宅ワークパターン別にみると、共働き(妻が通勤・在宅ワーク)の方が非就業より家事時間、調理機会の増えた方が多いです。妻が通勤で不在の場合より、在宅ワークの方が夫の調理機会が増える傾向があるのは、共に在宅することで手伝いの機会が増えたからではないかと思います。

(4) 夫の在宅ワーク合間の家事は妻のメリットとして認識される

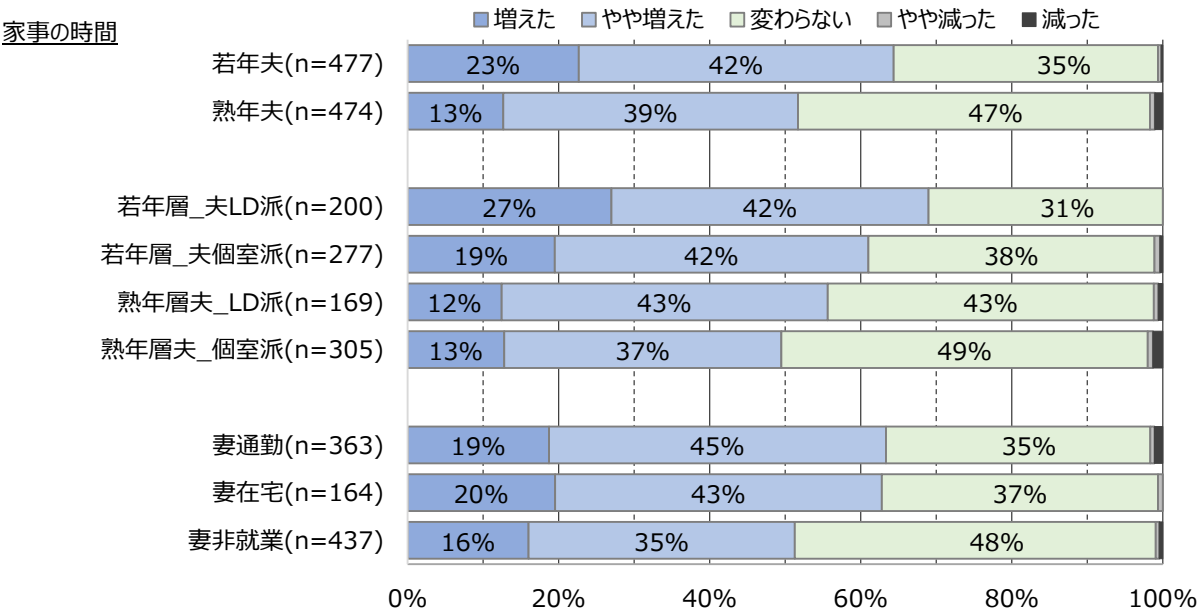
夫が在宅ワーク中に家事をしている場合、していない場合に分けて、6-2のグラフで示した妻が「仕事の合間に、調理や洗濯などの家事ができる」というメリットを分析してみると、夫が家事をしている方が妻のメリットの認識が高く、在宅ワーク中の夫の家事は妻にもメリットとして感じられています。

■ 夫が在宅ワークの合間に家事をしているか別、妻が感じるメリット

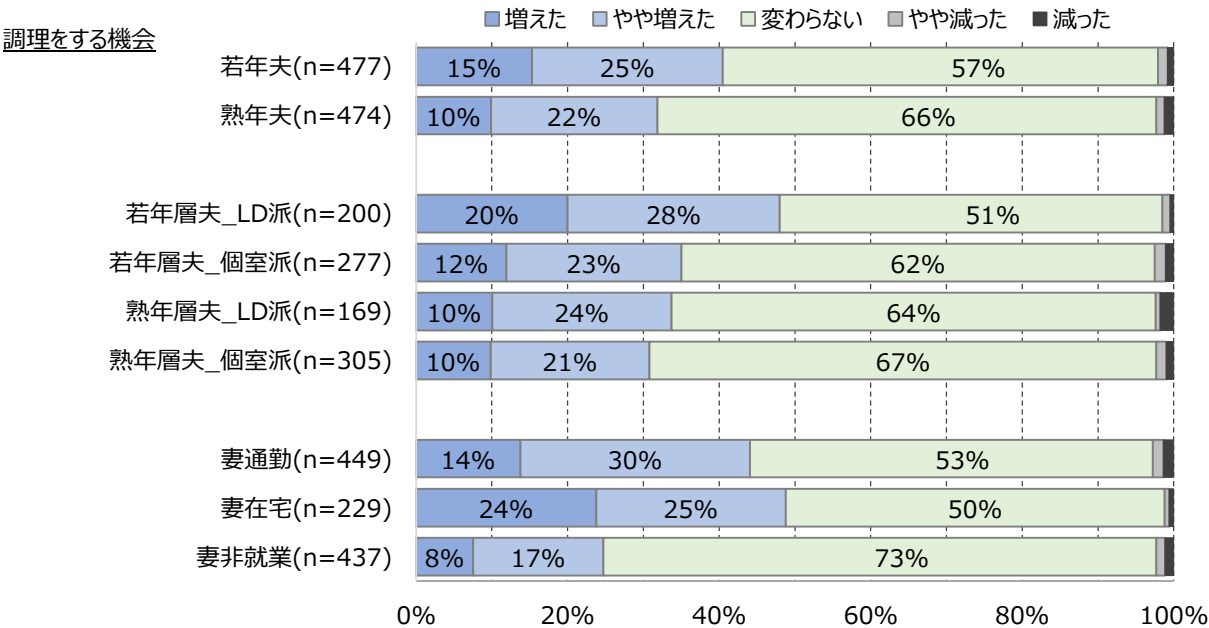
仕事の合間に、調理や洗濯などの家事ができる



■ 夫の家事時間の増減：本人



■ 夫の調理する機会の増減：本人



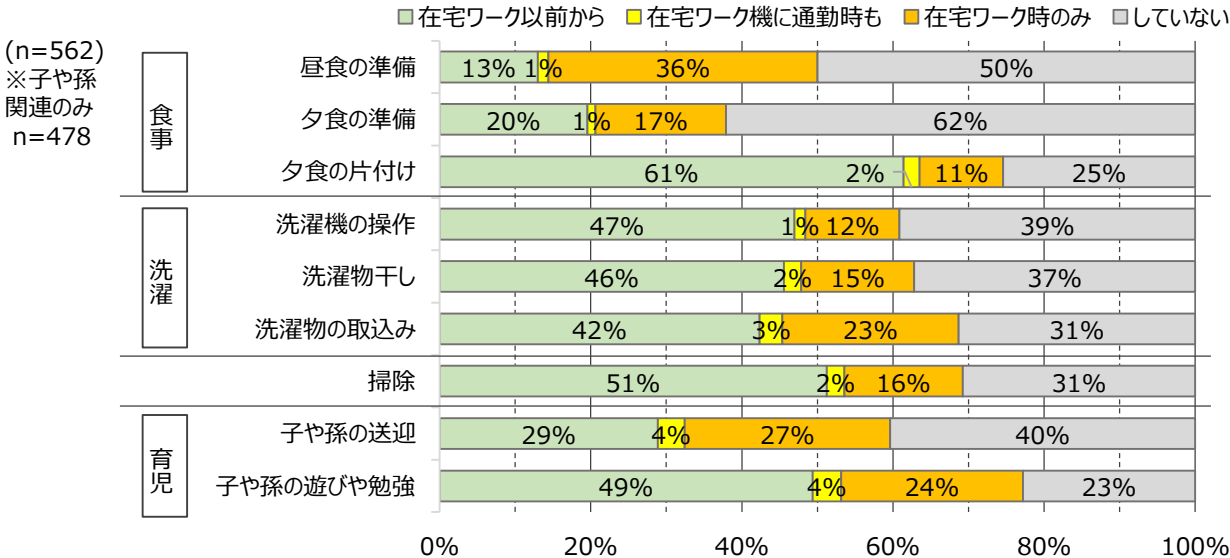
6-2 在宅ワークで増加する夫の家事の内容

(1) 在宅ワークをきっかけに増えた家事は調理洗濯育児と多岐に渡る

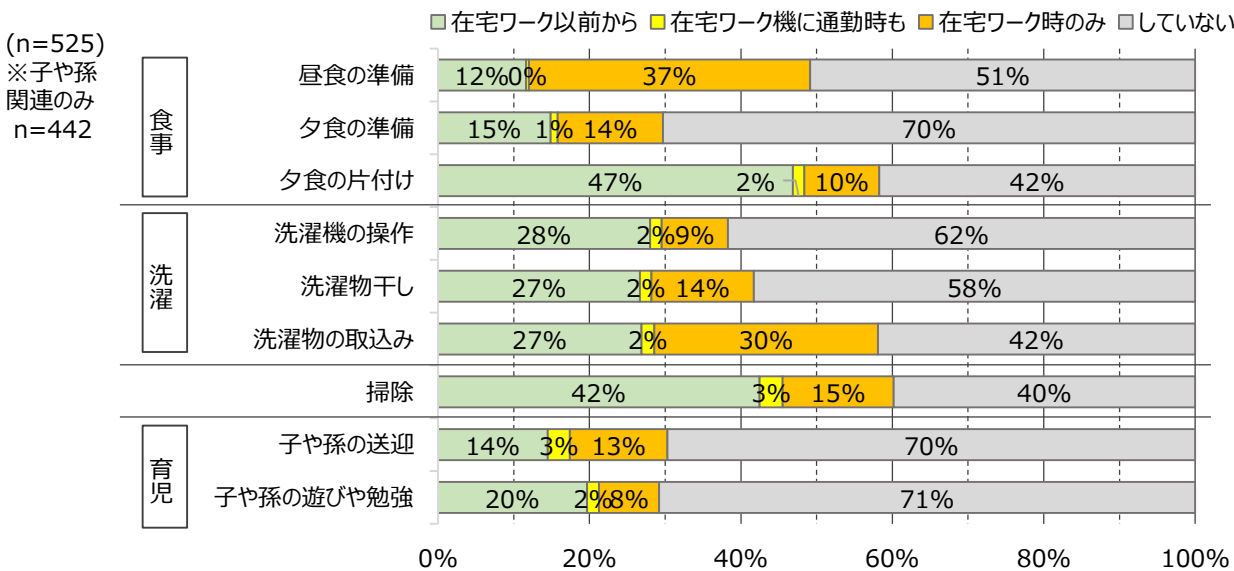
夫の家事増加の内容について、どのような家事が在宅ワークをきっかけに増えたのか聞きました。在宅ワーク以前からしていた家事は、全般に若年層が熟年層よりも多いですが、在宅ワーク時のみしている家事は双方とも一定数おり、在宅ワークがライフステージを問わず夫の家事を促進しています。

項目別では在宅ワーク以前からでは少なかった昼食、夕食の準備が在宅ワーク時には全体に増え、洗濯関連の項目では在宅ワーク以前からしていた率が若年層で高い特徴がありますが、若年層熟年層共に在宅ワーク時には増加しており、特に熟年層で洗濯物の取込みが大きく増えています。若年層では子の送迎、遊びや勉強といった育児期特有の項目の増加も顕著です。

■ 若年層夫のしている家事：本人



■ 熟年層夫のしている家事：本人



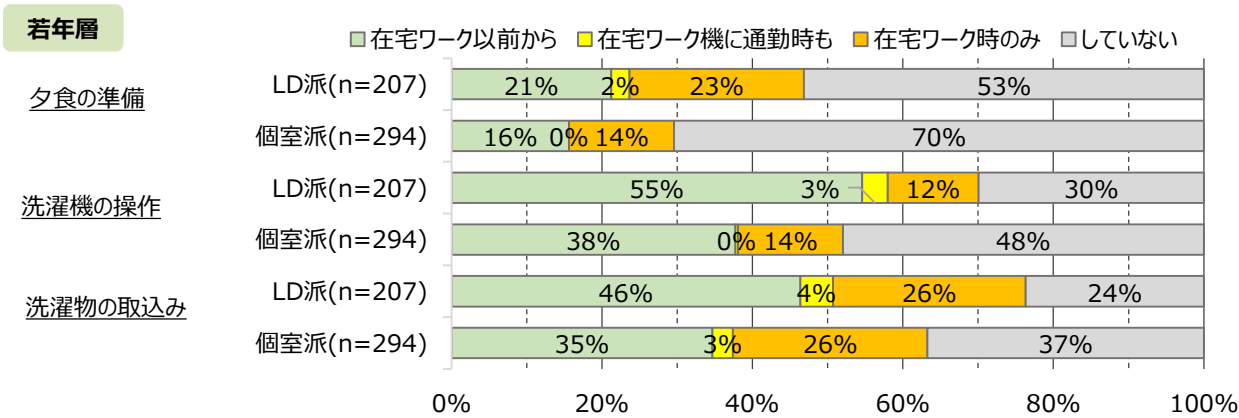
(2) 若年層の夫はLD派の方が家事をしている

若年層の夫の家事について夕食の準備、洗濯機の操作、洗濯物の取込みの3項目をLD派・個室派の在宅ワーク場所別にみると、どれもLD派の夫の方が個室派に比べて家事をする傾向にありました。夕食の準備は在宅ワーク時のみが多く、キッチンに近い場所で仕事をする影響と推測され、洗濯機の操作・洗濯物の取込みは在宅ワーク以前から家事をしていた夫がLDを選ぶためと思われます。

(3) 夫の家事率は共働きで高く、熟年層では妻が通勤より在宅の方が高い

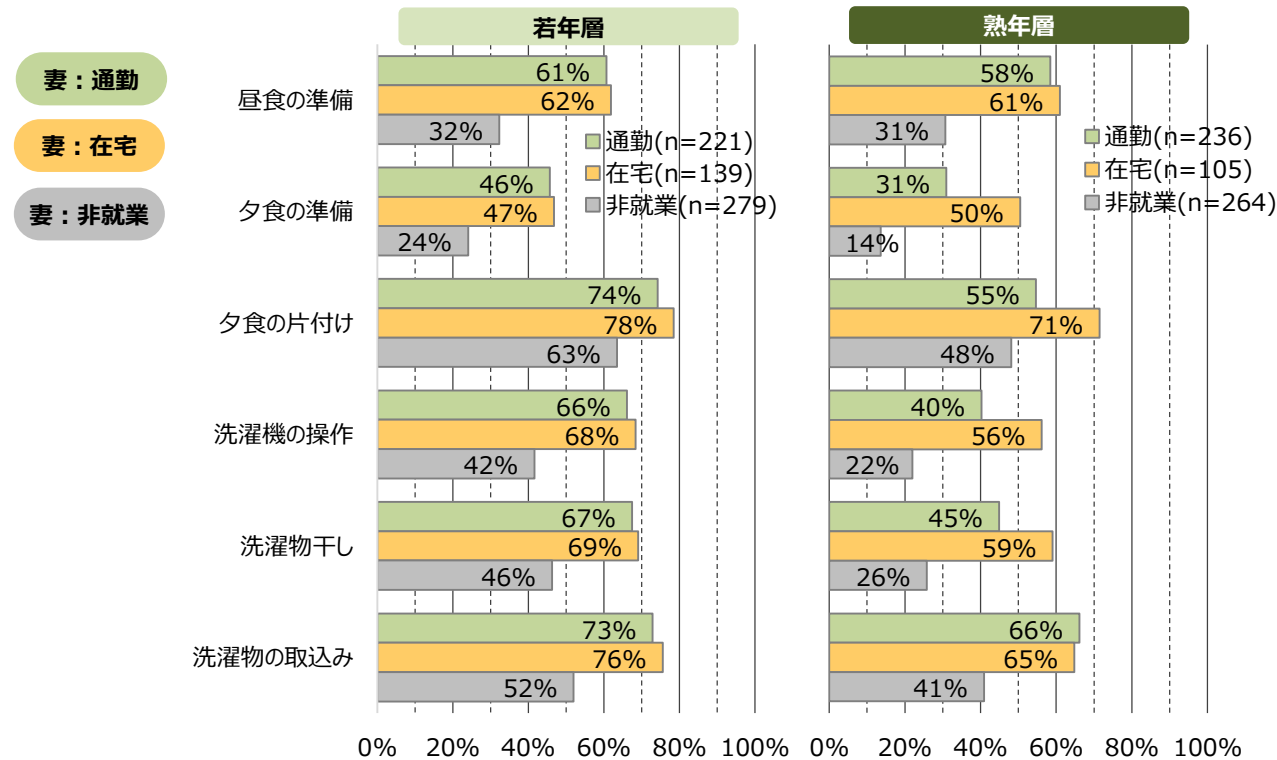
在宅ワークパターン別に在宅ワーク時に行う夫の家事をみると、全ての項目で妻が非就業の場合よりも、通勤あるいは在宅ワークをしている共働きの場合の方が夫の家事参加率が高い結果となりました。共働きの場合、若年層では妻が通勤か在宅ワークかは夫の家事参加にあまり影響がないのに対し、熟年層では妻が通勤よりも在宅ワークの方が夫が家事に協力的でした。これは熟年層の夫が、在宅ワークをする妻に聞きながら家事をするためと推測されます。

■ 若年層夫の在宅ワーク場所別 夫がしている家事



■ 在宅ワークパターン別 夫が在宅ワーク時にしている家事

※ していない以外の3項目の計



6-3 在宅ワークに対する夫妻の希望のずれ

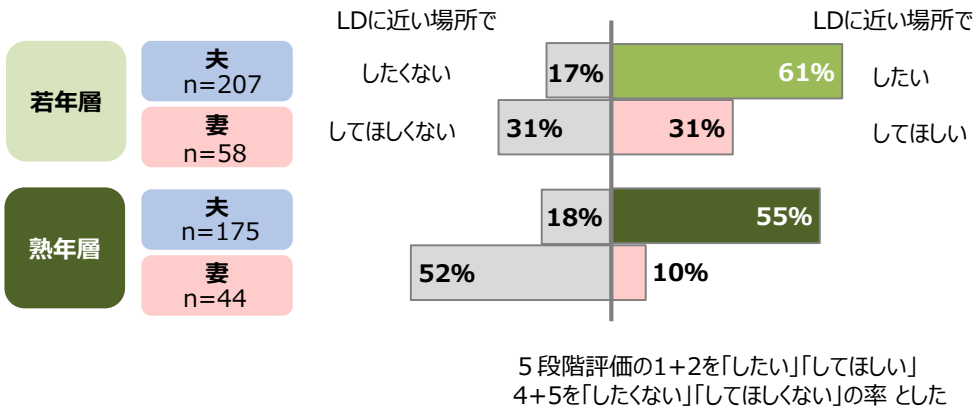
(1) 夫がLD派の場合、若年層の妻は支持、熟年層は嫌う

夫のLD派について若年層・熟年層で分けたときの夫・妻それぞれの希望をみると、夫は若年層・熟年層で共通して「LDに近い場所で在宅ワークをしたい」と回答したのに対し、妻は熟年層だと「してほしくない」と希望する人が圧倒的に多く、若年層では熟年層に比べて「してほしい」と希望する人が増える結果となりました。

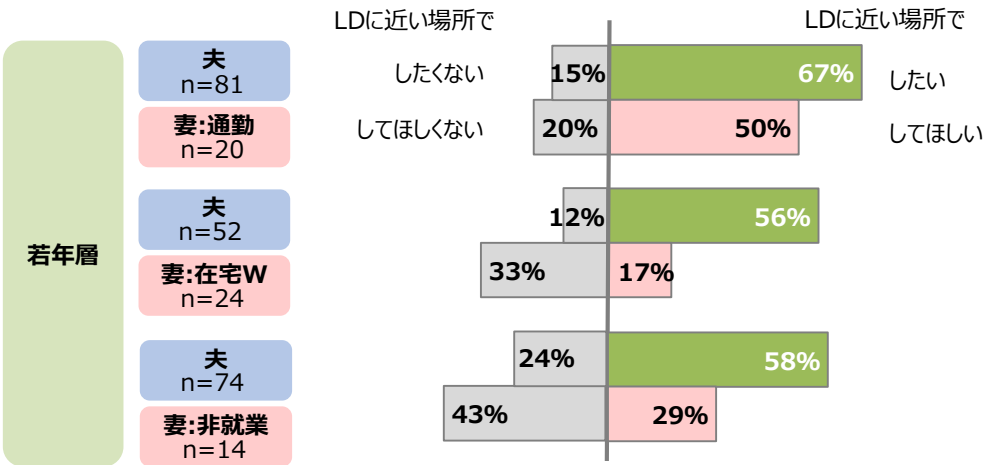
(2) 通勤している若年層の妻は夫にLDでしてほしい傾向

「夫にLDに近い場所在宅ワークをしてほしい」と答えた妻が多かった夫LD派の若年層について、さらに妻の3つ在宅ワークパタン別（通勤・在宅ワーク・非就業）にそれぞれの希望をみると、妻が通勤で家を空けている場合にLDでの夫の在宅ワークを希望する割合が最も高く、妻が非就業で在宅している場合にLDの近くでしてほしくないと答える割合が最も高い結果となりました。妻が通勤の場合で特にLD在宅ワークを夫に希望する理由としては、妻不在の間に、LDでの在宅ワークの合間に家事を進めてほしいという夫への期待があるのではないかと考えられます。

■ 夫と妻の希望：夫がLD派



■ 夫と妻の希望：夫がLD派・若年層・妻の在宅ワークパタン別



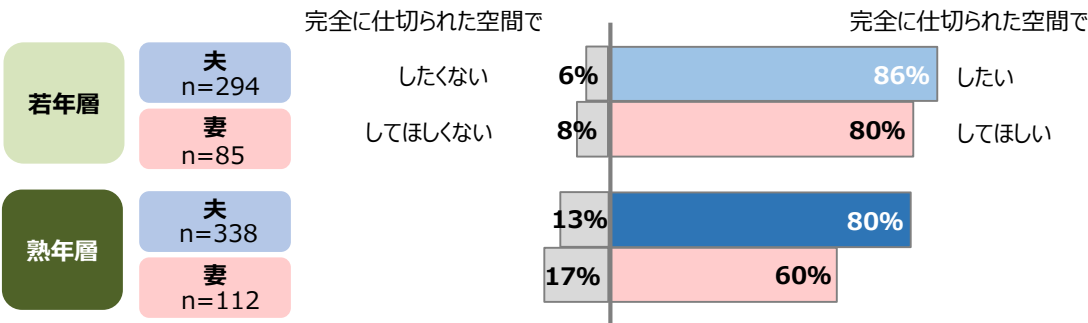
(3)夫が個室派の場合は、妻もそれを支持している

夫が個室で在宅ワークをしている場合、夫本人の多くが「仕切られた空間でしたい」と答えており、希望通りにワークスペースを確保できているといえます。同居家族の妻についても、多くが夫に「仕切られた空間でしてほしい」と答えており、夫妻の要望が一致していることがうかがえます。

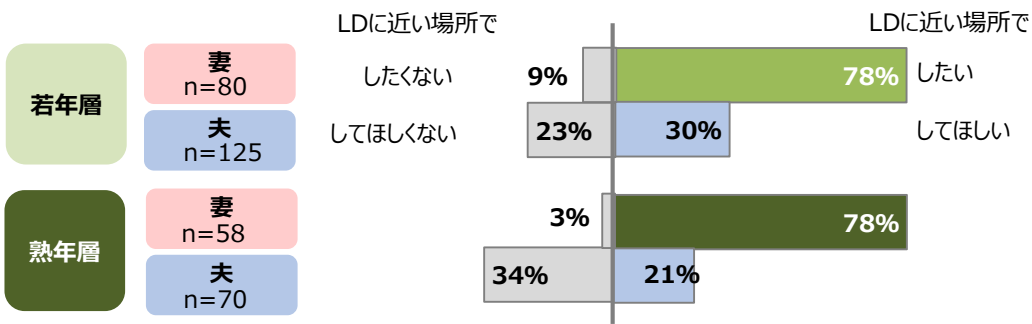
(4)妻がLD派、個室派の場合の夫の支持もほぼ同じ傾向

妻がLD派の場合、妻本人の多くがLDに近い場所での在宅ワークを希望しており、同居の夫については若年層で「してほしい」夫が多く、熟年層で「してほしくない」夫が多い結果となりました。熟年層・夫LD派のときの妻の意見と比較すると、夫の方が妻にLDでの在宅ワークを希望していることが分かります。妻が個室派の場合でも、妻本人の多くが完全に仕切られた空間での在宅ワークを希望していましたが、同居の夫については一部「してほしくない」と回答する方がおり、熟年層でより強い傾向がみられました。

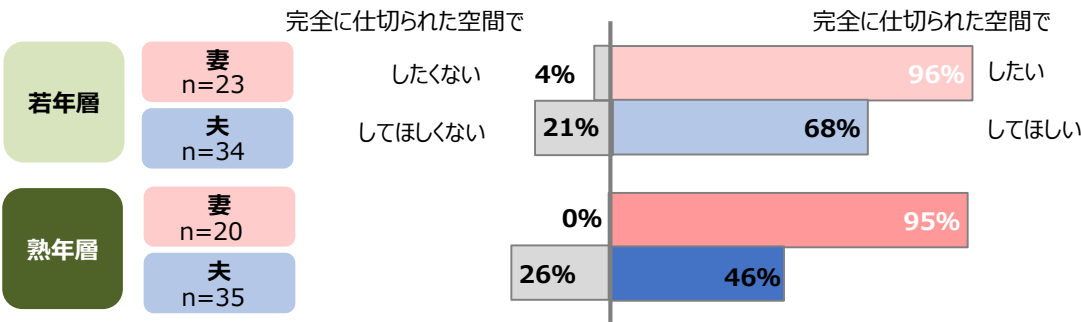
■ 夫と妻の希望：夫が個室派



■ 夫と妻の希望：妻がLD派



■ 夫と妻の希望：妻が個室派



コラム：夫妻それぞれの気持ち：回答者の声

在宅ワークは、夫妻の関係に様々な変化をもたらします。特に夫が在宅するようになったことで、家事育児を理解し、するようになった、という声は多く見られました。

夫回答(回答者・配偶者)

妻回答(回答者・配偶者)

コロナから妻の出産、産後の肥立ちが悪く、夫が在宅ワークを続けながら、家事育児を一人でせざるを得ない状況になった。夫は、今まで在宅ワークはなかったため、家事育児の表面しか見えてなかったそうだが、実際に働きながら家事育児をする大変さを身をもって体感したそう。妻にお願いされてから動くのではなく、自ら考えて動くようになった。仕事も家事育児も受け身体制ではダメだということに気づいてくれたことはとてもよかったと感じているし、変わってくれたことに心から感謝している。夫が気遣ってくれることで、妻もさらに家族のために頑張ろうとお互い相乗効果をもたらしている。我が家はコロナや在宅ワークになったことにより、家族がより仲良くなり、もめ事は減ったと感じる。(非就業妻・夫個室派)

◆暮らしの変化・昼食を夫婦でとるようになった・父親も子どもの送迎をするようになった・21時前には仕事を強制的に終わせなければならない環境になった◆良い点・コミュニケーション量が増えたこと・家事や育児の大変さがわかったこと◆悪い点・喧嘩をした翌日、気まずい(個室派夫・妻在宅)

一方で、夫にとっては仕事を続けにくかったり負担となる部分もあります。

通勤時間などの削減ができる一方、家事を妻に任せきりになってしまうのに気が引けて、定時以降は仕事をし続ける。(個室派夫・妻通勤)

階を分けても子どもの泣き声や走り回る音は嫌でも聞こえるので心配になって様子を見にくことが多い。在宅ワークだと生活環境と仕事の環境を完全には切り離せないの夫の負担が少し増えてしまった気もする。家族で過ごす時間が増えたのはいいことです。(非就業妻・夫個室派)

また、妻からは在宅しているのに家事をしない、という不満も出ています。

在宅ワークになっても、時間が余ってるはずなのに、家事を全く負担しない夫に大いに不満。(非就業妻・夫個室派)

コロナの流行後、夫はオンライン会議などで出張が減り、身体的に楽になっているようです。夫婦一緒に過ごす時間が増え良い事もあるが、夫は家事は一切しないし、書斎があるのにリビングで仕事をするのが多いので、妻としては微妙な面もあります。(通勤妻・夫LD派)

在宅の機会が増えたことで、ひとりの時間が減ることへの不満も見られます。

月で20日くらいテレワークを行っている。在宅ワークをする側からすると、毎晩家族全員で夕食を食べられるのが一番のメリット。18時半には夕食を開始でき、デザートも毎日のように共にする時間があり、圧倒的に家族との時間が増えとても喜ばしいと思う。一方、妻(専業主婦)側からしたら、今まで持っていた自分のプライベートな時間がなくなったうえに昼食を作る手間が増え、自由度はむしろ減っていると思われる。(LD派夫・妻非就業)

家事の負担を以前よりは公平に近づけられた点は良かった。一方で、自分も妻も自分の時間が減ったことは良くないと感じている。(夫LD派・妻非就業)

第7章

職住融合時代の家づくり

7-1 在宅ワークを考えた家づくり

(1) ワークスペースを生活空間に融合させるか、独立させるか

在宅ワークを想定した家づくりでは、ワークスペースの考え方は大きく2つに分かれると思います。一つはLDKでの在宅ワークに見られるような、家の空間の中にワークスペースを融合させてとる考え方、もう一つは仕事専用のSOHO(スモール/ホームオフィス)空間を確保する考え方です。在宅ワークは仕事の内容や状況により頻度が異なるため、必ずしも専用のワークスペースが必要とは限りません。また実際の家づくりでは広さが確保できないことも多いので、様々な家の機能と兼用させる提案が求められます。

(2) LDKのワークスペースなら、家事並行しやすい

本調査の結果から、在宅ワークのメリットとして、家族と過ごす時間の増加、生活リズムの正常化が顕著であり、またLDKでの在宅ワークの特徴として家事並行のしやすさが明らかとなりました。特に家事に積極的な若年層の夫については、LDKで在宅ワークを行うことに対して、妻も肯定的な傾向があることが見えてきました。

(3) LDKでの在宅ワークではWeb会議時の逃げ場所が課題

LDKで在宅ワークをする場合、配偶者にはその空間に立ち入らない、音を出さないといった配慮が必要であり、特にWeb会議の際には制限が多くなることがわかりました。特に配偶者が在宅していることが多く、家事をしたい場合やくつろぎたい時にその負担は大きくなります。週1回以上の日常的な在宅ワークが定着し、IT化によりWeb会議が増加していくことを考えると、同居家族が在室するLDKでの在宅ワークには気兼ねなく会議を行えるような「逃げ場」となる空間が必須と考えられます。

(4) 個室のワークスペースなら、仕事に集中できる

一方、個室をワークスペースとした場合、同居家族との干渉が避けられ、仕事に集中できるメリットがあります。仕事用にモニターアームを付けたサブモニターを増設したり、必要な機器や収納を充実させることも可能です。特に熟年の夫、専業主婦の妻の組合せのように家事並行メリットが少なく、在宅ワーク者への配慮が配偶者のストレスになる場合は、個室での在宅ワークが推奨されます。

(5) 個室での在宅ワークでは寝室部分との関係が課題

個室はプライベートな空間のため、在宅ワークのようなパブリックな用途との両立が課題となります。特にWeb会議時に寝室を見られたくないという意識は強く、周辺の衣類と合わせて会議画面に映り込ませないような配慮が必要となります。

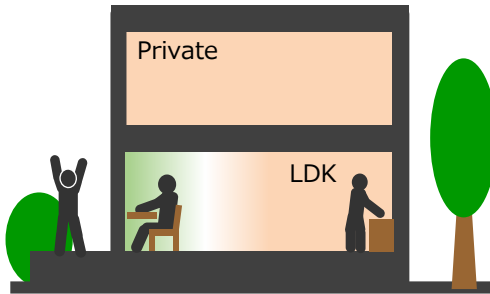
(6) ワークスペースに想定すべきモノ

LDK、個室に共通してワークスペースに想定すべきモノとして、一日中作業することを前提とした椅子と机があります。使用するPCはノートPCが主流となり、ペーパーレス化の推進により資料を広げたり収納スペースを確保する必要性は減ってきていますが、二画面化のためのモニターは夫の新規購入品の首位でもあり、設置の想定が必要となります。

■家づくりにおけるワークスペースの2つの考え方

①ワークスペースを生活空間に融合させる

仕事の場を内包する住まい



LD派：家事並行しやすい
若年層：夫が家事をする家族に向く
共働き：昼間は一人かW在宅ワーク



LDK Floor Workspace

①LDのカウンター（+NEST空間）

配偶者が通勤の場合
家事並行で在宅ワーク

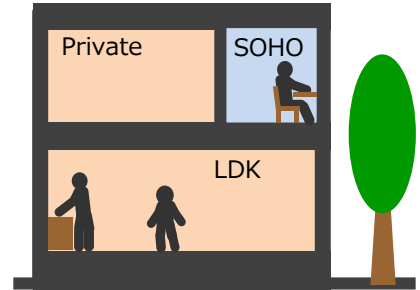
+

②web会議ブース（LDフロア）

配偶者も在宅ワークの時
会議時に移動する逃げ場

②仕事専用のSOHOをとる

住まい+オフィス



個室派：仕事に集中しやすい
熟年層：夫が仕事中心の家族に向く
専業主婦：同居家族の気遣い少ない



Private Floor Workspace

③個室書斎

配偶者が専業主婦で在
宅時でも配慮不要

寝室兼用個室とする場
合は寝室スペースとの
関係が課題

■ワークスペースに想定するもの

デスクカウンター：サブモニタを置ける幅

ワークチェア：一日中座ることを想定

ノートPC：会社から持帰る

サブモニター：2画面、多画面化でペーパーレス化

本棚：仕事用はペーパーレス化で多くはなく、趣味兼用で必要量を考える

7-2 LDK周辺のワークスペースの提案

LDK周辺において家事並行しやすいメリットを活かしながら、どのようにWeb会議時の逃げ場を作るか、特に在宅ワーク専用のスペースが取れない場合に、他のどのような用途と兼ねてワークスペースを確保するか、についての具体的な提案例を示します。

(1) +NEST：子どもの勉強場所との共用

LDKに小学生の勉強スペースを作る+NEST空間との共用を考えた提案例です。子どもの勉強場所としてのコンセプトは、適度なこもり感を持ちながら、キッチン付近から目が届くことが設計の要件ですが、在宅ワークを考えて、少しキッチンからは離し、座っている人が隠れるくらいの仕切りを設けています。遮音はされていないため、普段は子どもが通学・配偶者が通勤して留守であり、LDKを在宅ワークの際に独占できるようなご夫妻に向けた提案です。

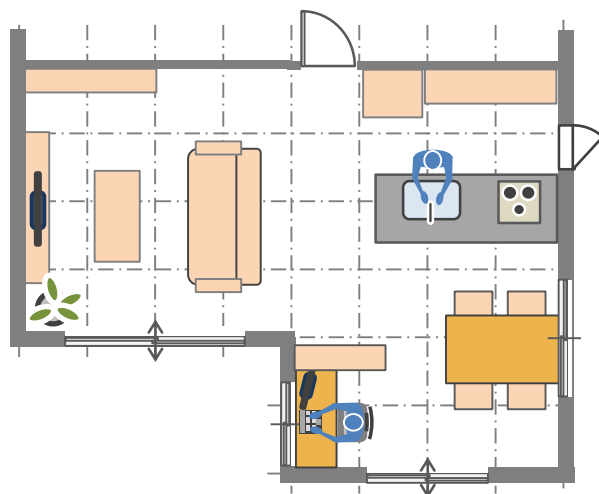
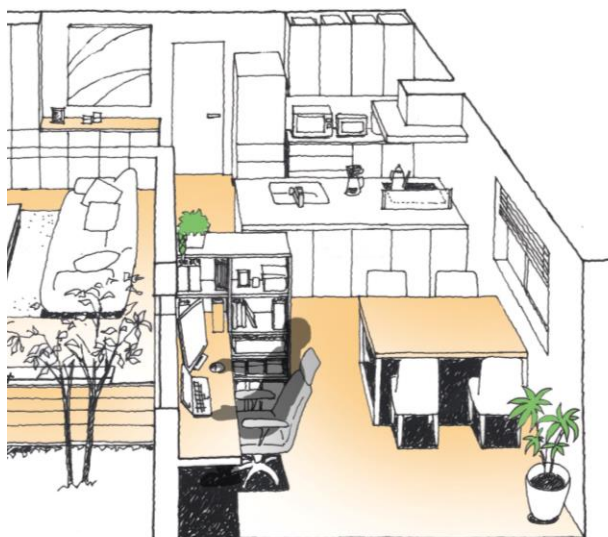
(2) BLANK：子どもの成長に合わせて使える小部屋との共用

幼児期は遊具がリビングに置かれ、床での遊び、昼寝なども多く行われます。その時期を考え、あえてカウンター等を設置せず置き家具でライフステージの変化に対応させる小部屋を作る提案がBLANKです。建具で仕切ることができるため、ある程度の遮音性が確保できWeb会議が支障なく行え、建具を開ければLDKと一体になる自由度の高い提案です。

(3) BOOTH：収納との共用

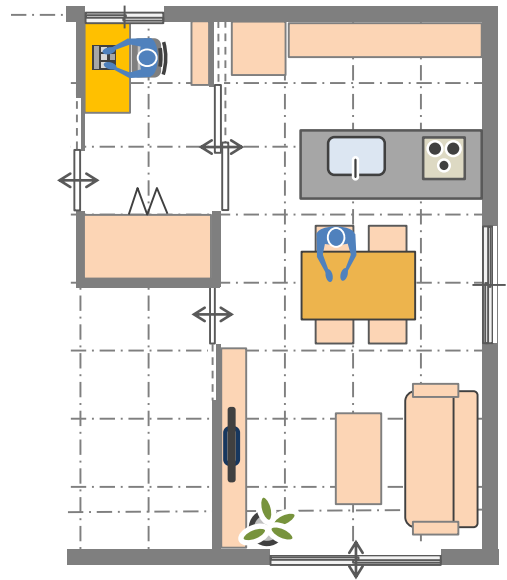
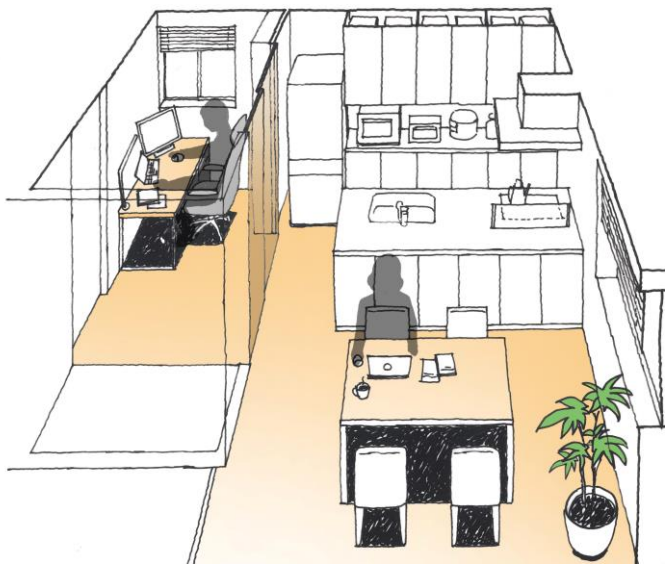
近年はLDにあるものが細くなり、奥行の浅い棚を周囲の壁に設けたリビングクロークと呼ばれる1畳程度の収納空間が多く造られています。BOOTHはその空間をWeb会議時の逃げ場所として使えるようにした提案です。普段は環境の良いダイニングテーブルや+NESTを使い、Web会議をする側がBOOTHへと逃げる、といったW在宅ワークのご夫妻に向いています。

■ +NEST：子どもの勉強場所兼用のワークスペースがあるLDK



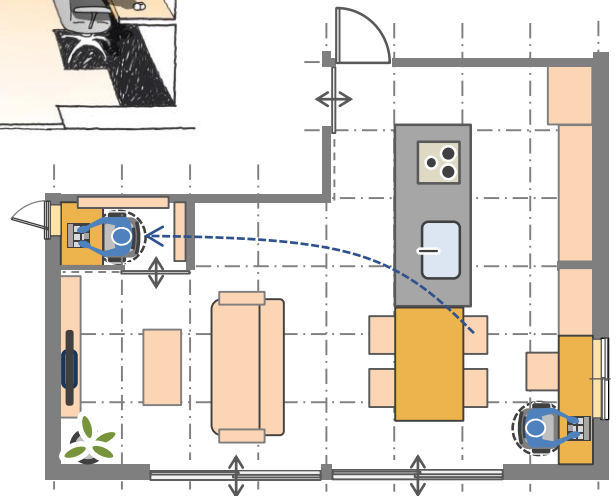
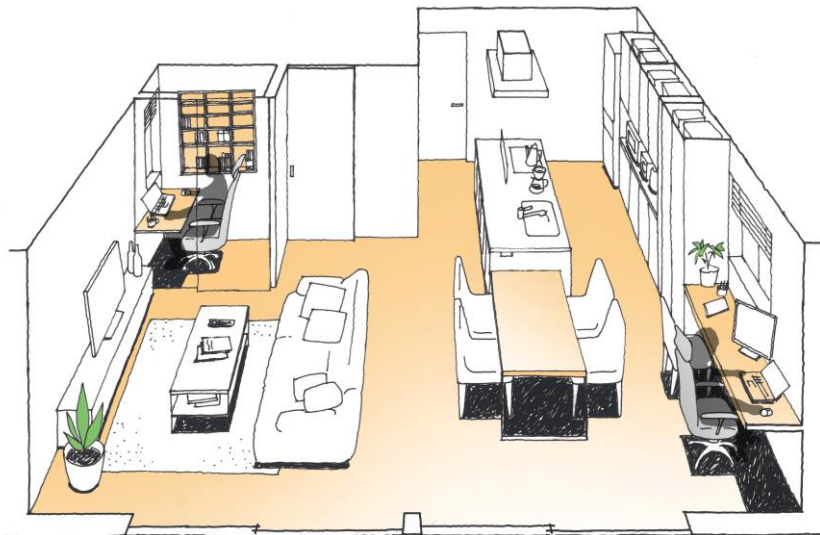
+NEST プラン 1/100

■ BLANK(3帖) : 子どもの遊びなどと兼用できる多用途の小部屋があるLDK



BLANK プラン 1/100

■ +NEST空間+BOOTH(1帖) : Web会議時の逃げ場のあるLDK



BOOTH プラン 1/100

7-3 個室フロアのワークスペースの提案

2階建ての戸建て住宅の構成では、2つの階をLDKフロアと個室フロアに分けて構成することが一般的です。LDKから離れた個室のフロアは同居家族の配慮が不要で、本人も気遣いなく仕事に集中できるメリットがあります。しかし仕事専用に空間を確保できることは少なく、何らかの空間との共用を考えなければならないのはLDKフロアのケースと同様です。

LDKフロアでは自然にできる家族お互いの状況の把握や来訪者の対応、一日中居られる良好な環境を、個室フロアでどのように確保するかについて、配慮する必要があります。

(1) 個人専用か、家族共用か

個人専用の部屋での在宅ワークは働く時間の自由度が高く、同居家族への負担も少ないと思われます。しかし仕事専用に部屋を確保できるのは恵まれた場合であり、夫婦別寝とした場合の個室や、子どもが独立した後の部屋の活用などが現実的です。一方、子どもがまだ小さく子ども部屋をつくってはいるがそこで寝ていない場合など、家族共用の部屋がワークスペースとして活用できる可能性があります。Web会議時の逃げ場として子どもの勉強机を活用されている方もおられました。

(2) 仕事専用か、寝室共用か

個人専用、家族共用はその空間を使用する人による区分ですが、仕事専用か寝室共用かといった、そこでの行為に注目する区分もあります。寝室という最もプライベートな空間で仕事という社会に開いた行為が行われ、特にWeb会議等で部屋が映り込むことに抵抗がある方も多くいます。その意味では、寝室と切り離してワークスペースを確保することが望まれます。

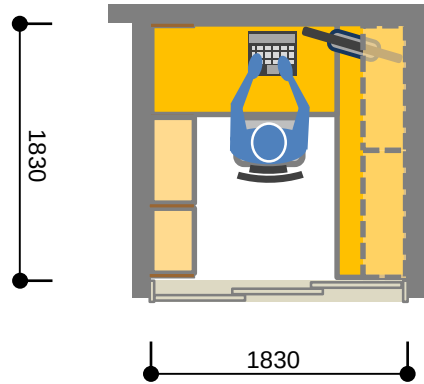
■個室でのワークスペースのバリエーション

	個人専用	家族共用
仕事専用	■ 仕事部屋 在宅中心、自営等	■ ガレージ・土間 逃げ場、気分転換の場 ■ 共用部カウンター 家族共用の作業場
寝室共用	■ 夫婦別寝室 熟年層で広がる 独立した子ども室の転用	■ 夫婦寝室のコーナー 書斎コーナーや寝室の机

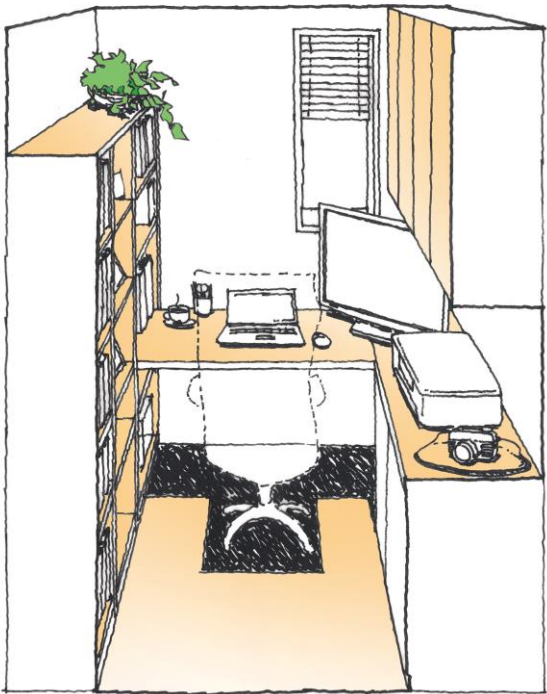
(3) COCKPIT書斎：仕事専用の空間をコンパクトに

寝室と切り離れた仕事の空間を個室フロアに独立して、あるいは寝室等に付属して設けるための2帖の空間を考えました。飛行機の操縦席のように必要なモノに囲まれ、趣味の空間と兼ねた居場所となるような空間です。PCやプリンタなどの多くの機器を置くことができ、本やコレクションの収納なども兼ねることができます。また、収納棚は壁に固定されているため、狭い空間でも家具転倒の心配がなく地震時にも安心です。

■ COCKPIT(2帖)：作業スペースに囲まれたコンパクトな書斎



COCKPIT プラン 1/50



調査報告書執筆者

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所 顧問
二世帯住宅研究所長

松本 吉彦

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所 研究員

高村 舞



在宅ワーク・夫と妻のニーズ ～ワークスペースのある住まいづくりに向けて～

調査報告書

発行： 2021年4月16日

発行所： 旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所

〒101-8101 東京都千代田区神田神保町一丁目105番地 神保町三井ビルディング
kurashinnovation@om.asahi-kasei.co.jp